

立正大学蔵書の歴史 寄贈本のルーツをたどる

—近世駿河から図書館へ—

〔増補改訂版〕

小此木 敏明



シリーズ・アタラクシア Vol.1



発刊の辞

戦後まもない一九四九年、
立正大学図書館年報「アタラクシア」創刊号が
発刊された。

戦禍を潜り残された貴重な資料を手に、
知の泉たらんとする大学の志は、
図書館の場からも発せられた。

書庫の奥に何時もあり、
ページを開けばいつでも触れられる、
「アタラクシア」にある先人の言葉の息吹が、
今、溢れる情報のなかで輝いて感じられる。
図書館の蔵書は折にふれ寄贈され、購入し、
多くの人に支えられて今に至っている。
めまぐるしく変化する時代に流されず、

多様化するメディアに対応し、
立正大学図書館の資料から視えてくる
普遍の価値を伝えるために、
「シリーズ・アタラクシア」をここに発刊する。

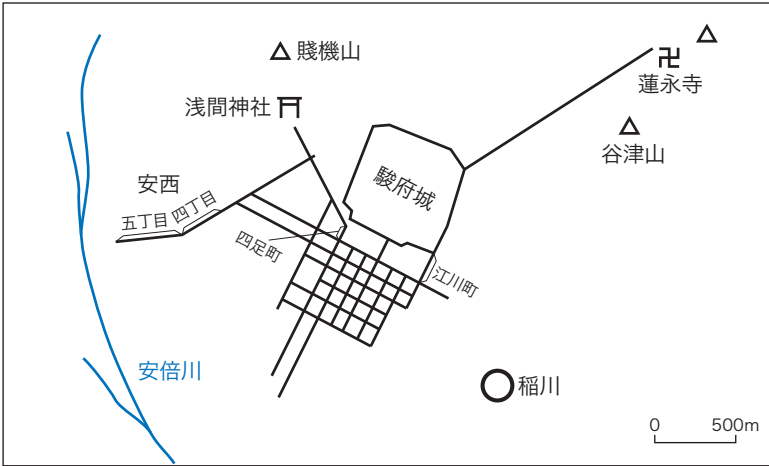
二〇一三年 三月吉日 立正大学図書館

立正大学蔵書の歴史 寄贈本のルーツをたどる

—近世駿河から図書館へ—

【目次】

凡例・地図	4
はじめに	5
第1章 遍歴する蔵書 — 山梨稲川 『三丁集』	6
第2章 採選亭の木活字本 — 『重修無得道論』	26
第3章 左官職人による自費出版 — 『安鶴在世記』	42
第4章 貸本屋、鳴雁堂の蔵書 — 『三川日記聞書』	58
第5章 中国からやってきたカレンダー — 『大清嘉慶十九年時憲書』	72
引用・参考文献	88
附録 『今川家集』 翻刻	92
あとがき	136



凡例

- 本書では、特に断らない限り、立正大学品川図書館を「立正大学図書館」と呼ぶ。
- 本書に掲載している画像は、すべて立正大学図書館が所蔵している資料に基づく。資料の請求記号には、NDC（日本十進分類法）と、「A」から始まる旧分類番号がある。
- 本文の引用に際しては、旧漢字・異体字などを通行の字体に改め、句読点・濁点・ルビを私に施した場合がある。
- 頭注には、人物や資料など、本文に入れられなかった解説を付け、引用・参考文献は巻末に記載した。

はじめに

昔から古書店を題材にした物語は多い。誰にでも、思出の本の一冊や二冊はあるものだが、そうした本が人から人へと移動する古書店は、本にまつわる思い出が紐解かれる場としてふさわしい。

本の移動という面では、図書館にも古書店と同じような側面がある。単に本の貸し借りが行われるというだけではない。本を手放すには、売る以外にも図書館へ寄贈するという選択肢がある。

寄贈される本は最近のものに限らない。立正大学図書館には長い歴史があるが、今まで多くの和漢古書が寄贈されてきた。

古書は時代が古い分、図書館に納められるまでに多くの人の手を経ている場合がある。本が移りゆく過程には様々な事情があっただろうが、それが物語のように披露されることは希である。いつ頃、誰の手を経ってきたかを

推測することも難しい。しかし、もとの持ち主が、押印や書入れといった何らかの痕跡を本に残していれば、移動経路ぐらいいは見えてくる。

幸いにも、立正大学図書館に寄贈された古書の中には、その痕跡が残されているものも多い。それらを調べることで、立正大学図書館へと至った経緯や、かつての所有者について、ある程度分かったものがある。

本書では、大正五年（一九一六）に寄贈された駿河の貞松山蓮永寺の旧蔵書の中から、和漢古書を五点選んで紹介していきたい。その際、所有者や本の移動という側面にも着目していくつもりである。

三丁集 二卷(一・四) (919.6×352.4)

稲川玄度(山梨稲川)著。袋綴 四つ目綴 写本 半紙本二冊。23.7×16.1cm。第一冊、四十五丁。第二冊、五十七丁。



遍歴する蔵書―山梨稲川『三丁集』

一、山梨稲川

二〇一九年現在、立正大学図書館は、二〇〇三年に竣工した総合学術情報センター内に置かれているが、それ以前は長らく五号館と呼ばれる建物内であった。旧図書館の地下は、今も保存書庫として機能しており、二〇一一年までは未登録の和装本が保管されていた(現在は、古書資料館に移されている)。ここで紹介する『三丁集』の二と四の二冊は、その未登録本の中から見つかり、登録されたものである。

『三丁集』は、山梨稲川(やまなしとうせん (一七七一―一八二六)による漢詩文の自筆稿本(草稿)である。稲川は、『稲川詩草』(とうせんしそ)という自身の漢詩集を、採選亭(さいせんてい)という本屋から文政四年(一八二二)に出版している(採選亭については次章参照)。この稿本は、そこに掲載する漢詩を選ぶために、自作の詩を整理する目的で作られたと考えられている。

山梨稲川は漢詩もよくしたが、中国語の古音などを研究した漢学者でもあ

* 俞曲園（一八二一—一九〇七）

清朝末期の学者。岸田吟香の依頼により、日本人の漢詩を選んだ『東瀛詩選』を刊行した。『東瀛』は東の大海の意で、日本を指す。

* 内藤湖南（一八六六—一九三四）

大阪朝日新聞社を経て、京都帝国大学教授となる。山梨稲川に興味を持ち、二度の講演を行った。死後に出版された『先哲の学問』に、活字化されたものが収録されている。

* 稲川詩草 七卷五冊（A84/10）

山梨稲川著。駿府、鉄屋十兵衛、文政四年（一八一二）刊。

編輯と校訂には、稲川の次男の玄昱、弟子の塩屋定暹、娘婿の戸塚維春が協力した。和田正誠の跋の有無により二種の伝本が知られる。立正大学図書館が所蔵するのは有跋本。

る。出身は、駿河国庵原郡西方村（現静岡市清水区庵原町）で、四十一歳の時、駿府城の南郊外である稲川（同市駿河区稲川）に移り住んだ（四頁地図参照）。それ以降、名を治憲、字を玄度とした。稲川の号は地名に由来する。

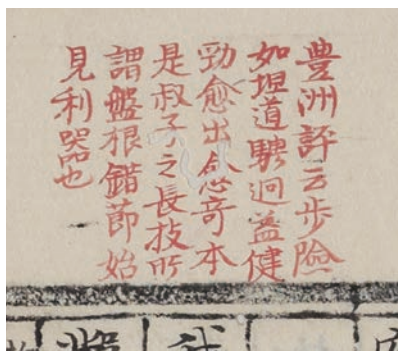
生前、稲川の知名度はそれほどでもなかったが、その漢詩や学問は近代に入って評価されるようになった。清朝の俞曲園は稲川の漢詩の才を認め、自身も光緒九年（一八八三）に編纂した『東瀛詩選』の巻十五に、その詩を六十八首も掲載している。また、東洋史学の大家である内藤湖南は、昭和二年（一九二七）の稲川先生百年祭にて、「山梨稲川の学問」というタイトルの講演を行った。この年、稲川は正五位を追贈されている。

二、陰山豊洲の評

稿本には、完成版には見られないメモ書きや、推敲の過程が記録されている場合がある。『三丁集』もその例に漏れない。幸いにも立正大学図書館には、稿本の完成版とも言える『稲川詩草』* が所蔵されているので、両者を簡単に比較することができる。

*陰山豊洲かげやまほしう(二七五〇〜二八〇八)
漢学者。河内狭山藩に仕える。文化三年(一八〇六)、『松桂园詩集』を出版した。稲川はその死を悼み『哭豊洲公首』を作成している。この漢詩は『三丁集』二に載り、『稲川詩草』にも収められている。

〈豊洲の評〉



『稲川詩草』にない情報としては、稲川の学問の師であった陰山豊洲の評が書き写されている点が面白い。その評は、『三丁集』二の「山居」と題された十九首の漢詩に対して付けられている(「山居」は『稲川詩草』巻一の五言古詩に収録)。十九首目の欄外には、総評だと思われる以下の内容が書かれている。

豊洲が評して言うには、険しい場所を平坦な道を歩むように進み、走つては、ますます力強く壮健となり、更に突出し更に奇抜となる。本来これが稲川の長所である。世に言うところの、「盤根錯節ばんこんさくせつに遇ひて、始めて利器を知る」ということだ、と。

「盤根錯節に遇ひて、始めて利器を知る」とは、中国の故事である。入り組んだ木の根や節を前にして、始めてその刃物の切れ味が問われるように、人の本領も困難に遭遇しなければ分からないという意を表す。険しい道とは、十九首の連作を指しているのだろうか。稲川は、難題に挑んでこそ力を発揮するタイプだったらしい。

ここで、「山居」十九首の中から一首を紹介してみたい。どの漢詩がすぐれているかの判断は難しいが、豊洲が誉めている一句を含む六首目をあげる。

*太玄経

中国前漢末の学者、揚雄（前五三〜後一八）の著作。揚雄は、名利にこだわらない人物として知られる。吃音だったため、思索することを楽しんだ。『太玄経』を書いたとき、嘲りを受けたが、「嘲解」という文章を書いて反論した。

詞士自彬々

詞士しし、自ら彬々おのずか ひんびんとして、

勇夫何佻々

勇夫ゆうふ、何ぞ佻々きうきうたるや。

豈如巖嶂中

豈あに如んや、巖嶂がんしょうの中、

得喪俱相訖

得喪とくそう、俱ともに相あひ訖おふに。

酒従近県餘

酒さけは、近県きんけん従り餘り、

醢向鄰家乞

醢しおみは、隣家りんかに向むかひて乞こふ。

時草太玄経

時ときに太玄経たいげんきょうを草そうすれども、

任人嗤口吃

任人にんじん、口吃こうきつを嗤わらふ。

文章家は、もとより表現と実質が調和し、勇敢な男は、なんと猛々しいことか。それでも、険しい峰に住み、名声の得失に対する関わりを断つに勝るものはない。酒は近くの県で代金を借りて買い、しおからは隣家に寄つて貰えばよい。当時、『太玄経』を書いた揚雄ようゆうでさえ、口先だけの者に、その吃音きつおんを嘲笑されたのだから。

豊洲は、この詩の第五句に朱でしるしを付け（圈点けんてん）、他の人には真似できない巧手（「豊洲先生云、巧手段、他人不言得」という評価を与えている）。

*葵文庫

一九一四年に開館。江戸幕府の旧蔵書のうち、番所調所^{ばんしょていじょ} 開成所^{かいせいじょ} 昌平坂学園^{しやうへいざか} 所などの蔵書の中核とする。

*十干

一ヶ月を三分した際の十日間(旬)に、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十字を当てたもの。

*十二支

一月から二月までの月に、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の一二字を当てたもの。考案された殷代には、動物の意味はない。

三、『山梨稲川詩稿』

稲川^{とうざい}の自筆稿本は、この二冊以外にも多く残っている。静岡県立中央図書館の葵文庫^{あおい}は、稲川の蔵書を数多く所持する。その中には、『三丁集』と同様の漢詩文の稿本が二十二冊もあり、『山梨稲川詩稿』^{やまなしとうせんしこう}（以下、『詩稿』）という名で管理されている。ただし、それぞれの本には、個別の名称も付けられており、多くは「辛亥稿^{しんがいかう}」のように六十干支^{かんし}（単に干支とも）を冠している。

六十干支とは、十干^{じっかん}と十二支^{じふにし}を組み合わせて出来る六十周期の符号で、中国や日本などで年月日を順序付けるのに用いられた。「辛亥稿」の「辛亥」は年を表すので、基本的に『詩稿』は、作つた年毎に漢詩をまとめた本であることが分かる。さらに、「辛亥稿」のような名称とは別に、おおよそ十年単位で、『初丁集』、『二丁集』、『三丁集』、『四丁集』という名が付けられている。

ただし、葵文庫の『詩稿』を年代順に並べていっても、すべてが揃うわけではない。『四丁集』の五に当る「乙酉詩稿^{おつゆう}」には、「共二十六冊」と書かれているが、『初丁集』から『四丁集』までは十九冊である。葵文庫に残る『詩稿』は、この十九冊に『於陵樵唱^{おつりょうしやう}』、『佩蘭新雅^{はいらんしんが}』という名の二冊の稿本と、『初丁集』の

《六十干支表》

57	53	49	45	41	37	33	29	25	21	17	13	9	5	1
庚申	丙辰	壬子	戊申	甲辰	庚子	丙申	壬辰	戊子	甲申	庚辰	丙子	壬申	戊辰	甲子
58	54	50	46	42	38	34	30	26	22	18	14	10	6	2
辛酉	丁巳	癸丑	己酉	乙巳	辛丑	丁酉	癸巳	己丑	乙酉	辛巳	丁丑	癸酉	己巳	乙丑
59	55	51	47	43	39	35	31	27	23	19	15	11	7	3
壬戌	戊午	甲寅	庚戌	丙午	壬寅	戊戌	甲午	庚寅	丙戌	壬午	戊寅	甲戌	庚午	丙寅
60	56	52	48	44	40	36	32	28	24	20	16	12	8	4
癸亥	己未	乙卯	辛亥	丁未	癸卯	己亥	乙未	辛卯	丁亥	癸未	己卯	乙亥	辛未	丁卯

一を清書した一冊を加えた計二十二冊となる。どのように数えて二十六冊としていたのかは分からないが、抜けがあることは確実である。

立正大学図書館所蔵の『三丁集』は、その欠けている『詩稿』のうちの二冊分に相当する。巻表示は、表紙に「三丁集 二(四)」とあることで確認できる。中を見ると、二には「戊辰雑稿」「己巳雑稿」、四には「乙亥雑稿」「丙子雑稿」という名称が書かれている。葵文庫にある『三丁集』は一と三であり、一は「丁卯稿」、三は「癸酉雑稿」「甲戌詩稿」「乙亥雑稿」となっている。「乙亥雑稿」は四にもあるので、三と四にまたがっていることが分かる。

すでに述べたように、六十干支は六十年で一巡するので、生没年などで範囲を絞ればその年を特定することができる。稲川の生没年に基づき、『三丁集』の一から四に含まれる雑稿の干支を、西暦に置き換えてみよう。

- 一、丁卯（一八〇七年）
- 二、戊辰（一八〇八年）・己巳（一八〇九年）
- 三、癸酉（一八一三年）・甲戌（一八一四年）・乙亥（一八一五年）
- 四、乙亥（一八一五年）・丙子（一八一六年）

*丁
和装本などの頁を数えるのに用いる。一丁は二頁分で、表・裏で区別する。

『三丁集』は一から四まで揃ったはずだが、一八一〇年（庚午）から一八一二年（壬申）が抜けている。しかし、この年の詩は二の中に収録されているようだ。五十四丁裏より後には、「文化七年庚午二月上丁」（二八一〇）、「辛未」（二八一）、「壬申」（二八一）というように、作成した年を記載した詩が確認できる。これで、一八〇七年から一八一六年の間の詩が埋まったことになる。

四、葵文庫へ至るまで

すでに述べたように、葵文庫には稲川の稿本が多く所蔵されている。にも関わらず、なぜ『三丁集』の二と四だけが立正大学図書館にあるのだろうか。この疑問に答えるために、まずは『詩稿』が葵文庫に至るまでの経緯を、蔵書印から探ってみよう。

本の所有者は、自らがその本を所持していることを示すため、本に印を押すことがある。これが蔵書印である。印を押した人物や機関を特定できれば、その本が誰の手を経て今の所有者のもとに至ったかを知ることができる。

*米山梅吉（一八六八～一九四六）
三井信託の初代社長。静岡県に米山梅吉記念館がある。

*中村秋香（一八四一～一九一〇）
詩人・歌人。国文学者として古典の注釈なども出版している。

*笹野堅（一九〇一～一九六一）
国文学者。狂言研究の先駆者として知られ、蒐書家としての一面も持つ。静岡県出身で、山梨稲川にも関心を持っていた。昭和十一年（一九三六）には、『山梨稲川書簡集』を私家版で出している。

葵文庫の『詩稿』には、稲川のものを除き、次の五つの印記がある。

1 「中村蔵書」

2 「笹野／氏図／書記」

3 「昭和九年七月二十日／米山梅吉寄贈」

4 「静岡県／葵文庫／図書之印」

5 「昭和11.9.8登録／（登録番号）／静岡県立葵文庫」

3・4・5は葵文庫で押された印である。これらの印から、昭和九年（一九三四）に米山梅吉が寄贈し、同十一年（一九三六）に葵文庫の蔵書として登録されたことが分かる。1と2の印についても見ていきたい。文庫の蔵書となった後に個人の印は押されないはずなので、1と2は米山氏の前の所有者が押した印ということになる。これらの印の持ち主はすでに知られている。1は稲川の孫の中村秋香^{なかむらあきか*}、2は笹野堅^{ささのけん*}の印である（『新編蔵書印譜』参照）。

中村家は稲川の次男の玄昱^{げんいつく}が跡を継いだ家で、長女阿佐^{あさ}の嫁ぎ先の戸塚家と同じく、稲川の蔵書を多く引き継いでいた。昭和二年（一九二七）に出版された『稲川先生記念録』（静岡県文化協会）には、「稲川詩集 自筆 稿本 二十二

冊」が紹介されている。これが葵文庫の『詩稿』だろう。その所有者は秋香の孫の秋一なので、笹野堅の手に渡ったのは昭和二年以降のことになる。

笹野氏は、研究のために稲川の遺稿を集めていたが、そのまま持ち続けることはなかった。現在、笹野氏の旧蔵書は、法政大学能楽研究所が所蔵しているが、稲川の自筆本はなく、日記類を翻刻した原稿用紙が残るのみである（「笹野堅氏旧蔵文献資料目録」参照）。

米山梅吉は、『詩稿』以外にも稲川の著作を購入し、葵文庫に寄贈している。そのあたりの事情については、今関天彭が昭和十年（一九三五）に静岡谷島屋書店より出版した『駿遠之詩界』（二頁）で触れている。今関氏によると、米山氏は葵文庫の館長だった貞松修蔵の依頼により、はじめから葵文庫に寄贈する目的で稲川の著作を購入したようだ。

五、貞松山蓮、永寺の寄贈

『詩稿』は、中村家→笹野堅→米山梅吉→葵文庫という順で移動してきたことが分かった。それでは、立正大学図書館所蔵の『三丁集』は、先の変遷のど

*貞松修蔵（一八七四～一九三八）佐賀県出身。初代葵文庫館長。山梨稲川の著作の収集に尽力し、『稲川先生記念録』や『山梨稲川集』などの出版を企画した。

*貞松山蓮永寺

静岡県静岡市葵区香谷（くのや）に現存する日蓮宗の旧本山。開山は六老僧の一人、日持上人。もとは庵原郡松野郷（まつのの）に位置したが、徳川家康の側室お万の方（養珠院）によって、現在の地に再興された。家康が再建を許可したのが元和元年（一六一五）、建物が完成したのが同四年とされる（『名遠理會之記』）。三十五代貫首は、立正大学二代学長の小泉日慈（一九〇六、一九一〇在任）。現貫首の松村寿巖氏は、立正大学名誉教授。

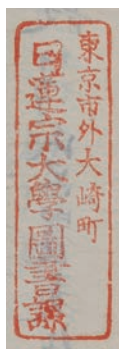
の段階で分かれたのだろうか。

大学図書館が本を入手する方法は、大きく分けて二つある。一つは書店からの購入、もう一つは、米山氏が葵文庫に行ったような寄贈である。それは、新刊本でも古い和装本であつても変わらない。

この『三丁集』は購入本でなく、寄贈された本である。寄贈先は、本の背に書かれた「貞松文庫」の文字から判断できる。立正大学図書館は、大正五年（一九一六）に、貞松山蓮永寺（れんえいじ）という日蓮宗の寺院から、蔵書の寄贈を受けた。寄贈を計画したのは、当時の蓮永寺の住職、丹沢日京（たんざわにっきやう）だと考えられる。丹沢氏はその功績により、同年十二月五日に日蓮宗宗務院より褒賞を受けた記録が確認できる。その褒賞記事によると、日蓮宗大学（現立正大学）に寄贈された蔵書の数は、仏教関係の書（内典）が一〇〇一部四五二二卷、それ以外の書（外典）が四〇五部二三三九卷にも及んだ（『月刊宗報』二号）。『三丁集』は外典の方に含まれるだろう。

通常、蓮永寺の寄贈本には、「大正五年八月二十五日／貞松蓮永寺寄贈」という印が押されている。しかし『三丁集』の場合は、整理の段階でどこかに紛

〈立正大学図書館の印〉

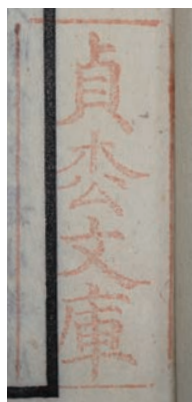


日蓮宗大学は、大正十三年（一九二四）に大学令による認可を受け、立正大学となる前の名称。

れてしまったのか、この寄贈印が押されていない。「日蓮宗／大学図／書課印」という印はあるが、冒頭で述べたように、未登録本として長らく書庫内に眠っていた。近年、書庫本の移動に伴う調査により、ようやくその存在に気づき、登録したという次第である。

『三丁集』と同じく、蓮永寺れんえいじの旧蔵書の中には、先の寄贈印が押されていないものがある。しかし、「貞松みまつ文庫」などの書入れがあつたり、蓮永寺の蔵書印が押されていたりするので、その本が蓮永寺の旧蔵書であることが確認できる。

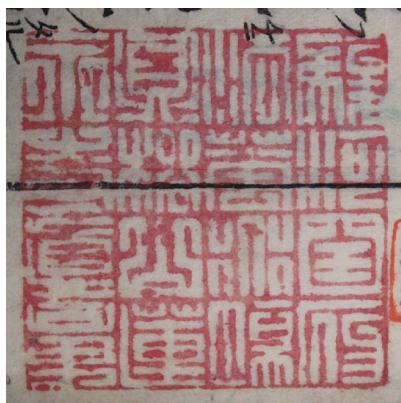
〈蓮永寺の蔵書印〉



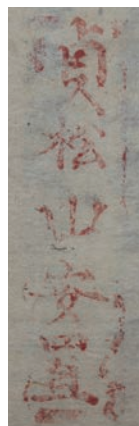
① 「貞松文庫」 7.1 × 3.0 cm



② 「良岳貞／松山蓮／永寺印」
3.6 × 3.6 cm



③ 「駿河国府／法華道場／貞松山蓮／永寺真章」
5.8 × 5.8 cm



④ 「貞松山安置」 7.4 × 1.8 cm

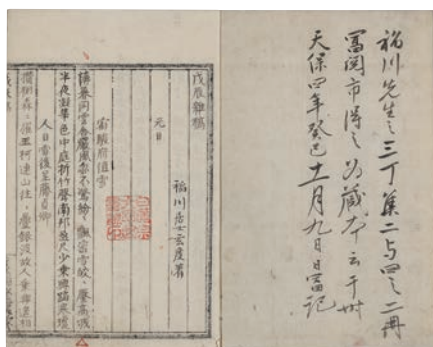


⑤ 「貞松」 2.9 × 2.1 cm

蓮永寺旧蔵書には、①②の印が多く見られる。③④⑤の印は数点しか確認できない。

『三丁集』二の見返

「稲川先生之三丁集二与四之二冊／富岡市得之為藏本云于時／天保四年癸巳十一月九日日富記。四にも同内容の書入れが見られる。



六、売りに出た『三丁集』

『三丁集』が蓮永寺の旧蔵書であることは分かったが、今度は、なぜ稲川の自筆本が蓮永寺にあったのか、という疑問が生じる。

この『三丁集』二と四には「中村家蔵書」の印がない。それも当然で、印を押しした中村秋香なかむらあきかが生まれた天保十二年（一八四一）の段階で、中村家はこの二冊を所持していなかったことが確実である。それは、この本の見返し（表紙の裏側）に見られる書入れから判断できる。書入れによると、天保四年（二八三三）の十一月九日に、日富にっぶという人物が「稲川先生」の『三丁集』二と四の二冊を市で見つけて蔵書に加えたという。天保四年は稲川の没後七年目に当る。日富は蓮永寺の僧であることが分かっている。

ここでいう市とは、今でいう古本市のようなものだろうか。開かれていた場所は、やはり駿府城の周辺と考えるのが自然だろう。稲川は晩年、研究のために江戸へ移り、その地で没したが、文化八年（一八一二）以降、駿府城南東の郊外にある稲川いながわ（現静岡市駿河区稲川）に長く居を構えていた。一方、蓮永寺の所在は、駿府城の鬼門の方角（北東）に当たる沓谷くつたに（同市葵区沓谷）であり、

稲川とは直線距離で約3kmと近い（四頁地図参照）。

『三丁集』を手放したのは、中村秋香の父の玄昱げんいつくだろうか。先祖から受け継いだ蔵書を、生活に困ったりしてお金に換えることはさして珍しくもない。しかし中村家は、昭和の初期まで『詩稿』を引き継いできた。玄昱が『三丁集』のみ売りに出したというのは不自然である。そうになると、別な事情で流出したと考えるのが妥当だろう。

たとえば、稲川本人が誰かに『三丁集』の二と四を貸した。借り主が返さなのまま、稲川も借り主も亡くなってしまい、事情を知らないその家族が売却した、というのだろうか。もちろん、根拠はまったくないが、色々想像をめぐらすのも面白い。

七、日富

天保四年（一八三三）、市に出かけていった日富という僧は、『三丁集』が稲川の自筆本であると気付き、購入した。そのことは、日富の中でも印象深い出来事であったため、本に記載しておいたのだろう。ただし、『三丁集』一つが

特別だったわけではない。日富はかなり筆まめな人物で、蓮永寺の旧蔵書には日富の書入れが多く見られる。

日富は、蓮永寺の旧蔵書（貞松文庫）を語る上で、どうしてもはずせない人物である。この後もたびたび登場するので、どのような人物だったかを述べておきたい。日富は、安永六年（一七七七）に生まれ、天保十一年（一八四〇）に没した日蓮宗の僧である。蓮永寺の二十八世・二十九世の貫首を勤めたほか、日蓮宗の僧の教育機関であった中村檀林の二三八世や、鶏冠井檀林の一九五世にも就任している。稲川よりは六歳若い、同時代の人物と比べてよい。天保四年（一八三三）当時は、蓮永寺の二十九世に就いていたと思われる。著作も多く、特に『竜華秘書』の著者として知られている。

貞松文庫の『古文真宝後集』第一冊には、「貞松山蓮永寺福寿院日富聖人伝」と題された書入れが見られる。どこまでが事実か不明であるが、この伝も参照したい。

日富は、下総香取郡多古村（現千葉県香取郡多古町）の出身で、三歳の時に唐竹妙光寺で出家し、蓮永寺二十四世の日邃、同じく二十六世の日匡を師とした。

*中村檀林

関東三大檀林の一つ。千葉県香取郡に所在。慶長四年（一九九）、恵雲院日円が正東山日本寺にて開講したのに始まる。

*鶏冠井檀林

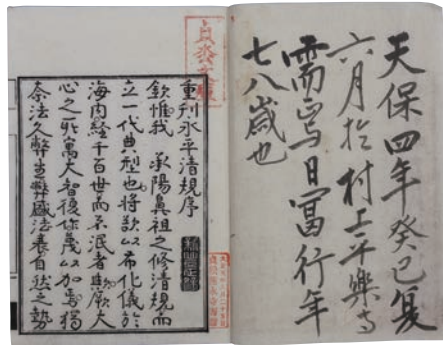
関西六檀林の一つ。京都府向日市に所在。承応三年（一六五四）に、通明院日祥が京都の鶏冠井山北真経寺にて開講したのに始まる。明治八年（一八七五）に廃檀。

*竜華秘書

京都の妙顕寺が所蔵する文書や記録等を書写整理し、考証を加えた書。天保九年（一八三八）成立。

『永平元禪師清規』書入れ
第一冊見返し（A50/55）

「七八歳」は7×8=56で、日富が
五十六歳であることをいう。

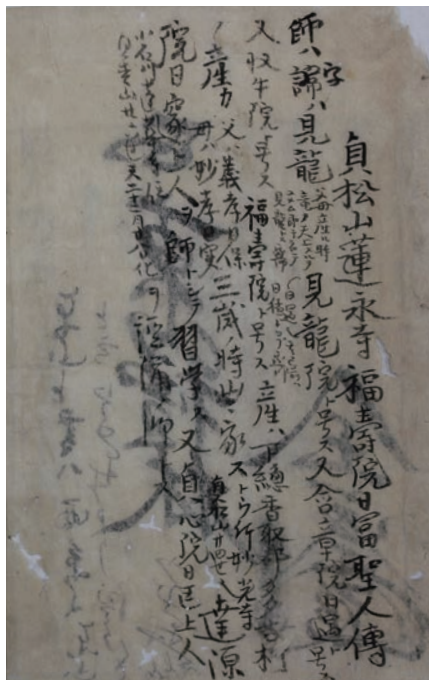


父は義孝日保、母は妙孝日実という。両親は、日富が生まれるとき、天に昇る龍の夢を見た。日富の字が見龍なのは、この話に由来する。僧にはさまざまな呼称があるが、日富の院号には、見龍院・含章院・収牛院・福寿院があり、日富以前には、日猛・日遇とも名乗っていた（『日蓮宗宗学章疏目錄』では、他に日愚とも）。

先にも述べたように、日富はとにかく筆まめな人物で、蓮永寺から寄贈された本の多くに自身のサイン（識語）を書いたり、蔵書印を押したりしている。『三丁集』の例のように、いつでも購入したか、場合によっては金額まで記載しており、書き入れの年が分かる本だけでも百点以上ある。たとえば、天保四年六月には、京都に本店のある平楽寺という本屋で『永平元禪師清規』二巻二冊を購入したことが、その本の見返しに書かれている。ちやうど、『三丁集』を手に入れた五ヶ月前のことになる。

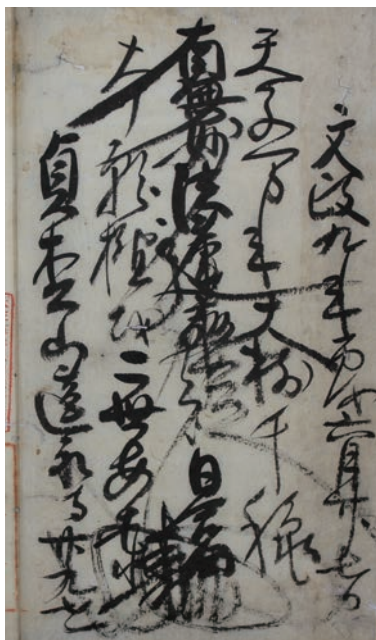
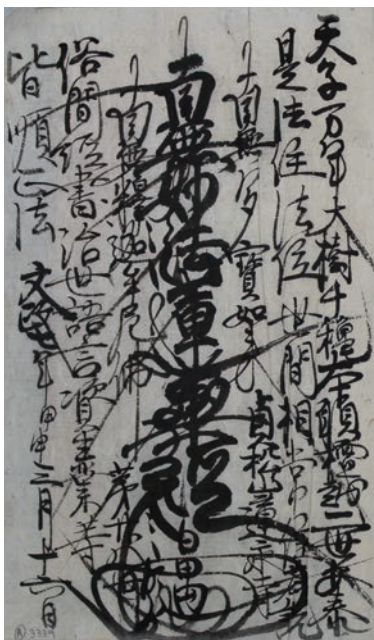
〔真松山蓮永寺福寿院日當聖人伝〕

もとは反古紙で、『古文真宝後集』（魁本大字諸儒箋解古文真宝後集）第一冊（A84/106）の裏見返し裏面に書かれていたか。本書が改装された際、裏見返しが裏表紙からはがされたため、背面の「日當聖人伝」が見えるようになったと思われる。

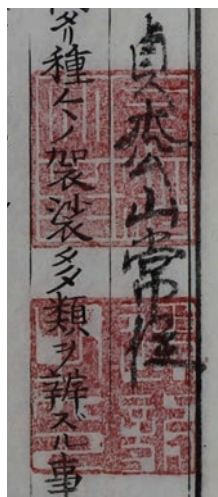


〔日當の書人れ〕

右下は文政七年（二八二四）の髭題目（『善身堂一家言』A93/19）。左下は文政九年（二八二六）の髭題目（『法華経文字声韻音訓篇集』A72/127）。署名から判断するに、蓮永寺二十八世の頃は日遇を名乗り、文政八・九年頃に二十九世となつて後、日當を名乗り始めたと考えられる。



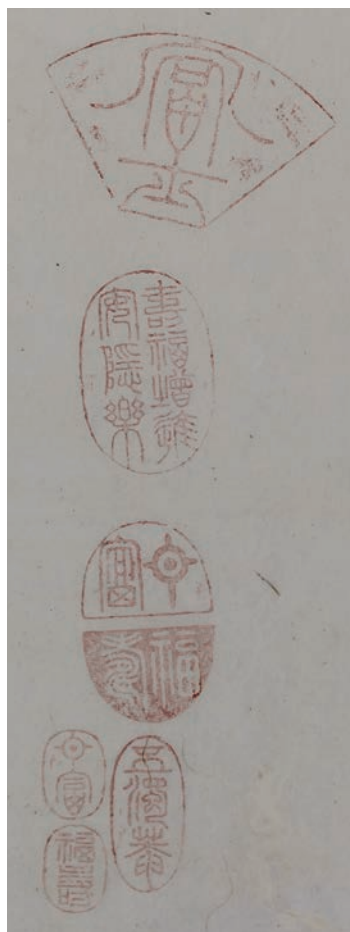
〔日富の蔵書印〕



〔貞松／山主〕
 〔遇龍／之印〕
 各3.2×3.0cm
 (『聖道衣料編』)
 A78／54)

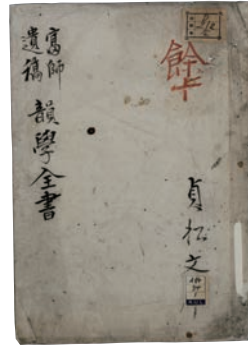


〔日／遇〕
 2.2×2.2cm
 〔含／章〕
 2.2×2.4cm
 (『像法決疑經記』)
 写本 A12／
 391)

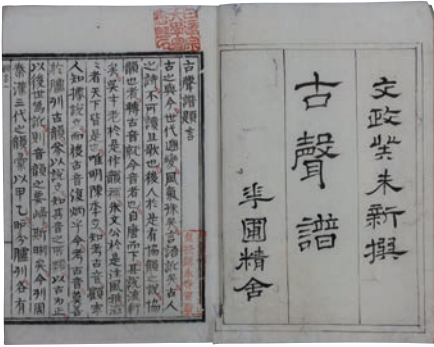


〔富本〕3.7×6.0cm
 〔寿福増進／安隱樂〕4.0×2.7cm
 〔日／富〕〔福／寿〕4.0×2.7cm
 〔五独菴〕3.1×1.5cm
 〔日富〕〔福寿〕各1.8×1.3cm
 (『一念三千等之事』坤 A4／217)

*韻学全書 一冊 (A84/34)



*古声譜 二巻二冊 (A84/101)



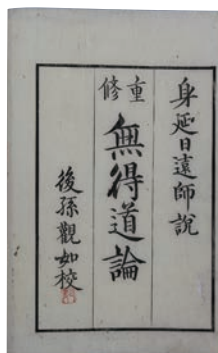
実は、先にふれた稲川の漢詩集『稲川詩草』^{とうせんしやう}も、日富が購入したものである。本の背には「辛巳十二月刻 貞松山 日遇」と書かれている。「日遇」は、先にも述べたように、日富の前の名前である。「辛巳十二月刻」の「辛巳」は文政四年（一八二二）に当たり、『稲川詩草』の刊行年を示している。ただし、その初版は十月の刊行で「十二月」ではない。『稲川詩草』には、和田正誠の跋文がある本とない本がある。日富が入手したのは有跋本なので、「十二月刻」というのは、跋が加えられた本の刊行月なのかもしれない。

いずれにしろ、日富は稲川に関心を持っており、以前から注目していたらしい。おそらく、その興味は漢詩にとどまらず、稲川の本分たる音韻学の分野にも及んでいたと思われる。日富は晩年、自身で『韻学全書』^{いんがくぜんしやう}という本を編纂しようとしていた。また、日富が入手したという証拠はないものの、貞松文庫の中には、稲川の韻学書の一つである『古声譜』^{こせいふ}の写本がある。『古声譜』は江戸時代に刊行されていない。これも稲川の自筆本だと思われる。加えて、立正大学図書館の原簿によると、貞松文庫の中には、かつて稲川の『文緯附録諧声図』^{もんいふろくかいせいず}も所蔵されていた。残念ながら、現在は失われているため確認できないが、こ

れも稲川の自筆本だった可能性がある。

ともかく、事前に『稲川詩草』を読んでいた日富だったからこそ、『三丁集』を目ざとく見つけることができた、と言えるのではないか。せつかく貴重な本に出会っても、気づかなければ見逃してしまう。やはり、日々の研鑽は重要である。

重修無得道論 (A05/12)
 日遠説・観如校。袋綴 四つ目綴 近
 世木活字本 半紙本一冊 24・8×
 16・8 cm。駿府、鉄屋十兵衛、文政四
 年(一八三二)刊。二十丁。



*西河折安 三卷三冊 (A83/8)
 猪飼敬所著 文政十二年(一八二九)刊
 猪飼敬所(二七六一〜一八四五)が、清
 朝の毛奇齡(二六三三〜一七一六)の經
 門の説を論駁した書。「西河」は毛奇齡
 の通称。敬所は近世末期の儒者。天保
 二年(一八三一)、伊勢津藩に招かれた。

採選亭の木活字本——『重修無得道論』

一、採選亭柴崎直古

山梨稲川の漢詩集『稲川詩草』は、採選亭より出版された。現在、採選亭の手がけた書籍は十六点知られている(『静岡印刷文化史』『近世木活統貂』参照)。この内、立正大学図書館は、『稲川詩草』『重修無得道論』『西河折安』『紀元集』の四点を所蔵している。いずれも貞松文庫に属するが、本章では、蓮永寺と関わりの深い『重修無得道論』(見返し題による)を紹介することにした。加えて、採選亭や近世木活字本についても触れておこう。

まずは採選亭である。江戸時代の本屋は、ただ新刊本を売るだけではない。古本も扱うし、出版も行う。貸し本業を兼ねる場合もあった。採選亭もそんな本屋の一つである。ただし、江戸・大阪・京都の大都市で商売をする大手ではない。駿府城下の江川町(四頁地図参照)で営業した地方の本屋である。

採選亭の主人は柴崎直古(一八三四・三五頃没)という。通称は十兵衛(重兵衛)、屋号は鉄屋である。駿府で酒造業を営む深江屋、森直樹の三男として

*紀元策 一冊 (A86/14)

羽倉簡堂著 文政七年(二八二四)刊

中国・日本の年号を頭字の韻目によって分類・配列し、皇帝・天皇の名を付した書
羽倉簡堂(二七九〇)一八六二)は幕臣で儒者。各地の代官を歴任。文政六年(二八二三)に駿府代官に就いている。

*鹿都部真顔(二七五三)一八二九

天明七年(二七八七)頃には狂歌四天王の一人に数えられる。和歌に接近した俳諧歌を提唱し、その門人は三千人とも言われた。

*平田篤胤(二七六六)一八四三

国学者。多くの著書があるが、『古史成文』は、文化八年(二八一二)に柴崎直古の招きにより、駿府に滞在した際に完成した書。

生まれ、鉄屋に養子に入った。鉄屋は、銅や鉄で富を築いた豪商だったが、直古は、知人や駿河ゆかりの人物の著作を出版する本屋を始めた。採選亭の号は稲川が選んだものである。

家業を変えたのは、直古が文芸や学問に明るい人物だったことが関係しているだろう。直古は、鹿都部真顔しかつべのまがお*に師事して俳諧歌はいかいかの判者にまでなり、文化八年(二八一二)には、真顔の紹介で国学者平田篤胤ひらたあつね*の門人となっている。

鉄屋の身代は、直古の代で傾いてしまったらしい。本屋で儲けることが難しいということもあるだろうが、単に浪費が激しかったという証言もある。そういうわけで、採選亭の出版は一代限りで終わってしまった。その活動期間はつきりしないが、現在残っている採選亭の出版物から判断すると、文政二年(二八一九)から天保二年(二八三二)までの十二年間となる。

二、近世木活字本

江戸時代の出版物は、その大半が整版本せいばんである。整版とは、木の板(版木)に文字を逆向きに彫り、墨を塗った上に紙を置き、バレンで擦る印刷技法であ

*朝鮮侵略

文禄元年（一五九二）から慶長三年（一五九八）にかけて行われた、豊臣秀吉による朝鮮への侵略戦争。日本では文禄・慶長の役、朝鮮側では壬辰倭乱などと呼ばれる。連行や略奪により、人や物が日本へ渡った。

*武英殿聚珍版叢書

乾隆年間（一七三六～一七九五）に武英殿で作られた木活字本の叢書。武英殿は、清の宮北京にあった建物の名。

る。それに対して採選亭さいせんていは、木活字を用いた印刷を行っていたことで知られる。木活字は、大きさを揃えた木の駒に文字を彫って作った活字で、これを植字台しむじだいと呼ばれる専用の台に並べて版面を作る。後は、整版せいばんと同じ要領で刷っていく。もともと、活字印刷の技術は西欧と朝鮮から伝わった。前者は宣教師が持ち込み、後者は豊臣秀吉とよとみひでよしの朝鮮侵略*を契機とする。どちらの方法も金属活字を使用していたが、日本では多く木活字が使われた。

文禄（一五九二～一五九六）以降、日本でも活字本が盛んに作られるようになるが、寛永（一六二四～一六四四）の末頃には、ほとんど見られなくなる。この半世紀の間に作られた活字本は、古い活字ということで「古活字本」と呼ばれている。ちなみに、古活字本は数が少なく、購入しようとする和高級車一台分の値がするものもある。

古活字本に代わり、出版の主流となったのは整版本である。それは、明治の初期まで変わることはなかった。しかし、整版本の時代になっても、活字本が完全に消滅したわけではない。古活字がすたれてから明治初期までの間に作られた木活字本は、古活字本と区別して「近世木活字本」と呼ばれる。次節で紹介

*乾隆帝（二七二〜一七九九）

清朝第六代皇帝。諱は弘曆。学問を奨励し、「四庫全書」など、現在も利用される多くの書を編纂した。

*選択本願念仏集

浄土宗の開祖、法然（一一三三〜一二二二）の著作。当時の関白、九条兼実の依頼によりに著された。専修念仏の教義について記されている。

*日遠（一五七二〜一六四二）

身延久遠寺二十二世、池上本門寺十六世、蓮永寺八世貫主などを歴任。徳川家康の側室、お万の方（養珠院）の帰依を受ける。

*校合

本文を比較し、異なる部分を確認したり、どちらの本文が正しいかを決定したりすること。

介する『重修無得道論』も含め、立正大学図書館が所蔵する採選亭版は、すべて近世木活字本に含まれる。

近世木活字本が多くなったのは、安永（一七七二〜一七八〇）頃からである。それは、中国清朝で作成された武英殿聚珍版叢書の影響だと考えられている。「聚珍版」とは、乾隆帝によって名付けられた「活字版」の雅称で、当時の日本にも浸透していた。採選亭が出版した『揚州十日記』の巻末に載る「採選亭書目録」によると、直古も聚珍版に倣って活字を作ったようだ。

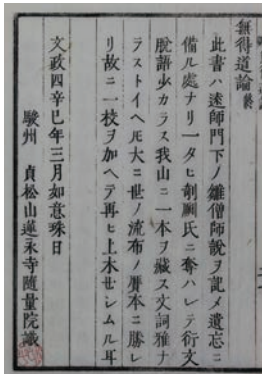
三、『重修無得道論』の印刷

『重修無得道論』は、法然の『選択本願念仏集』に対する反論の書で、日蓮宗の僧、日遠の説を記録したものである。『稲川詩草』と同じく、文政四年（二八二二）に作られた。今回は内容に触れず、出版の経緯や費用に注目したい。『重修無得道論』の巻末には、二つの跋文が載る。一つは本文の校合について述べた文、もう一つは刊行のきっかけや印刷部数について述べた文である。これらの跋文には、それぞれ日付と共に「貞松山蓮永寺随量院識〔印〕」「貞松

*随量院
蓮永寺の塔頭たつどう（支院）。塔頭は大寺の境内に建てられた僧侶の住居。

*行文
文章の中に紛れ込んでしまった不要の文句。誤脱と共に、本文を書写したりする際に起こる。

〔跋文Ⅰ〕



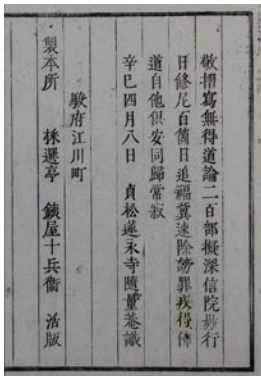
蓮永寺隨量庵識」という署名がある。これにより、『重修無得道論』の出版に蓮永寺が関わっていたことが分かる。この随量院*（隨量庵）が誰なのかはひとまず置き、先に跋文の中身を確認しよう。

この『無得道論』は、日遠門下の若年の僧が師の説を記録した備忘録である。それを本屋が入手して出版したが、えんぶん* 行文・語脱などのミスが少なくない。蓮永寺にも『無得道論』の写本が伝わっている。文章・言葉は優れてはいないが、世に出回っている偽物の本より勝っている。よって校合を加えて、再度刊行する。

この文章によると、『無得道論』は文政四年（一八二二）以前にも刊行されていたが、本屋のミスで多くの間違いを含んでいた。その間違いを、蓮永寺が所蔵する写本によって正したのが『重修無得道論』だという。「重修」には、新たに訂正するという意味がある。

この、誤りが多いというのは事実だろうか。検証してみたい。残念ながら、『無得道論』が最初に刊行された年は分からない。しかし、天和三年（一六八三）の出版記録（天和三年改修『延宝三年刊新增書籍目録』）に記載があるので、

*刊記
刊本に見られる、刊行年や刊行者などの表記。



〈跋文と刊記〉

文政四年（一八二二）以前に版本が存在したことは確かなようだ。

あとは、その『無得道論』を見つけて採選亭版と比較すればよい。立正大学図書館を探してみると、「重修」を冠しない『無得道論』を二点見つけることができた。一つは貞松文庫のものである。刊記がないので刊行年は不明だが、状態などから判断して、文政四年（一八二二）よりは古い本のようだ。

両本文を比べると、ところどころ違っていることが分かる。無刊記『無得道論』が明らかに誤っている箇所を、採選亭版が文意の通じるように改めたり、一部省略されている經典の文句などを補ったりしている。どうやら先の跋文の主張は正しそうである。

もう一つの跋文の方も確認したい。こちらには、「深信院妙行日修尼」という人物の百箇日追善の供養になぞらえて、『重修無得道論』を二百部印刷すると書かれている。追善供養では、法要を営み、仏像や仏具を寺院に寄進したりするのが一般的だが、その代わりに『重修無得道論』を印刷した、ということだろう。日修尼がどのような人物なのかは分からないが、出版にかかった諸経費は日修尼の関係者が出したのではないだろうか。

〈無刊記『無得道論』と『重修無得道論』の比較〉

掲載箇所は両者の本文が大きく異なる部分。無刊記本(A05/10)には、本文を校合した際の書入れが見られる。校合に使われた本文は、一部『重修無得道論』に対応しているが、完全には一致しない。

無刊記『無得道論』(八十一表)

一 選擇上北三云名號者是萬德所歸文

難云名顯ス體道理彌陀一佛上萬德名歸可云何名號

是則攝他佛之功德其上法華說出生三世皆於此經

故萬德所歸也故去淨名疏云若供養一佛於餘佛

無功德文其上論三寶勝劣持諸佛所師所謂法

也故道理法勝云事佛咀諸宗無共其隱殊云法華諸經

超過有誰可論是非耶ナ謗法至極超過

况復

方佛所俱得功德若毀謗佛母則於諸佛爲怨文

一選擇上升升云名號者是萬德之所歸也文

難云名必顯體故彌陀一佛之萬德則可歸名號
何攝他佛功德耶法華說出生三世皆於此經是

則萬德所歸故淨名疏云若供養一佛於餘佛無
功德矣況復論三寶勝劣時法勝佛劣諸宗共許
於中法華超過諸經何以之云攝在名號中乎謗
法至極

四、採選亭に支払う出版費用

当時、よほどの利益が見込めるものでなければ、著者が出版費用の一部、もしくは全部を負担するのが一般的だった。採選亭から本を出す場合、その費用はいかほどだったのだろうか。同じく、採選亭から木活字本として出版された『西河折妄』の場合をみてみよう。

『西河折妄』は、三巻三冊の計百丁で百部印刷されたが、著者の猪飼敬所いかいけいしよは十四両負担したという（『静岡県印刷文化史』参照）。『重修無得道論』ちようしゅうむとくどうろんは二十丁で二百部、『西河折妄』とは書型が同じで、半丁あたりの文字数も近い。十四両の内訳が分からないので、一概には比較できないが、仮に一万枚（百丁×百部）の紙と印刷代を十四両として計算すると、四千枚（二十丁×二百部）の『重修無得道論』の費用は五・六両となる。

この金額は、整版本せいばんぽんで出版した場合と比べると割安のはずである。そもそも『西河折妄』は、整版で出版する費用が足りず、活字本になったという経緯がある（『於多満幾』おだまき 卷四）。

整版本には、版木となる木材の費用と、それを彫る職人の人件費がかかる。

*於多満幾
猪飼敬所の養子、彦ひこ繼つぐが敬所の事績を記録した書。

橋口侯之介氏は、本が作成されるまでの諸経費について、様々な例を示して統計を出している（『続和本入門』）。それらを参照し、版木と彫り賃を一丁あたり五匁（六十匁＝一両）で計算すると、『西河折妄』では五百匁（五匁×百丁）、つまり八両以上も余計に出費しなければならぬ。また、版木に彫る文字は、筆工に依頼して清書してもらう必要があるのも、さらに高く付く。

対する活字本は、一度活字作成の費用を回収してしまえば、先にあげた諸経費がかからない。活字を組むのに特別な職人を雇う必要もないので、安く本を作ることができた。

五、近世木活字本の特徴

本を安く作れるなら、本屋や著者にとって活字本の方が得のように思えるが、そう簡単にはいかない。先の木活字本『西河折妄』に対して、頼山陽は、「この本は活字で出すべきものではない。惜しいことだ」と言ったという（『於多満幾』巻四）。なぜ活字本ではダメなのか。

活字の数には限りがあるので、印刷が終われば新たに活字を組み直す必要が

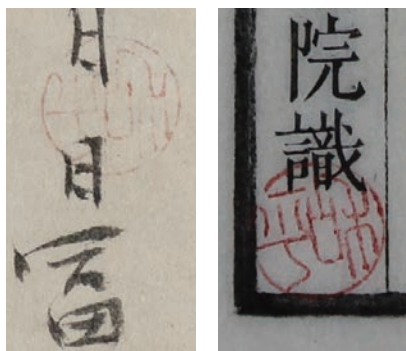
*頼山陽（二七八〜一八三二）漢学者、『日本外史』などの著作で知られる漢詩文の名手。晩年、敬所と親交があった。

*林子平（一七三八〜一七九三）
海外事情に明るく、海防の必要を論じたが、幕府への批判とみなされ、弾圧を受けた。

あつた。つまり、木活字本には、印刷物以外に版木のような形が残らない。当時は、版木を所持することが出版の権利を持つこととイコールであり、版木の売買によつて権利も移動した。そのため、活字本は正規の出版物とは認められなかつた。また、活字を使えば、他の本屋が出版した本の複製本を作ることでも簡単だつた。その点が、本屋仲間（本屋の組合）に嫌われたため、江戸・大阪・京都の本屋で木活字本を積極的に出版したところは一つもないと言われている。しかし、非正規であるからこそその利点もあつた。林子平はやししへい*は、江戸湾の海防などについて述べた『海国兵談』かいこくへいだんを寛政三年（一七九一）に出版したが、発禁処分となり版木を没収されている。天保十二年（一八四一）に処分は解除されるが、発禁状態の間も木活字による出版は見逃されていたらしい。

その理由の一つに印刷部数の少なさがある。近世木活字本には、作つた部数を記載することが多いが、よく見られるのは百部で、多くても三百部と言われる。『重修無得道論』ちゆうしゅうむとくどうろんの二百部は多い方だろう。

部数が少なければ確かに影響力は少ない。しかし実際には、書かれている数以上に刷られていたかもしれない。部数の少なさを示すのは、営利目的でない



点をアピールし、トラブルを避けるためという見方もある。木活字本は、無料配布を謳う場合もあるが、それも同様の処置だろう。

六、随量院について

ここで、三十頁で触れておいた随量院ずいりょういんの正体について述べておこう。『仏書解説大辞典』の『無得道論』の項（望月敏厚 担当）は、『重修無得道論』の刊行者を日富ひつぶだとする。ということは、随量院が日富なのだろうか。この点については特に言及がない。そこで、『重修無得道論』の跋文の署名を改めて確認してみたい。「随量院識」の下には「和／平」という丸形の朱印が押されている。これは、一冊のみが特別というわけではない。貞松文庫の中には、同じ『重修無得道論』が七点あるが、それらすべてにこの印が確認できる。製本後、すべての本に押したのだろうか。

この印にはどうも見覚えがある。どこで見たのか。それは、前章で紹介した『三丁集』だった。見返しに書かれた日富の署名の上あたりに、同じ印が押されていることが確認出来る。日富が多くの蔵書印を持っていたことは二十三頁に示

〈島田文庫本の日富の印〉

『重修無得道論』(SA05/11)



〈宗隆寺の印〉



した通りだが、「和平」の印もその一つだったと思われる。

『重修無得道論』の見返しには、「後孫観如校」という記載がある。この観如という人物については不明だが、日富が『重修無得道論』に関わっていたことは確かだろう。

証拠の一つとして、島田文庫の『重修無得道論』も確認したい。島田文庫は、神奈川県川崎市の興林山宗隆寺の旧蔵書で、昭和三十七年（一九六二）に島田堯存氏によって立正大学図書館へ寄贈された。同図書館より、『立正大学蔵溝之口宗隆寺島田文庫目録』（一九七〇年）が刊行されている。

この島田文庫の『重修無得道論』には、一つ目の跋文の終わりに、「貞松山主」「遇龍之印」という印が押されている。この印は、二十三頁でも紹介したように、日富（日遇）の印だと考えられる。つまり、日富が製本した『重修無得道論』に自身の印を押して、宗隆寺へ贈ったと見るのが自然だろう。

おそらく『重修無得道論』は、完成後に蓮永寺が引き取り、日富によって日蓮宗の寺院などに配られたのではないか。貞松文庫にある七点は、蓮永寺に残された予備の本だったと思われる。

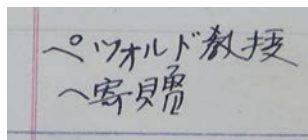
ところで、『とうせんし稲川詩草』の刊行は文政四年（二八二二）十月、『重修無得道論』の二つ目の跋文の日付は同じ年の四月である。この年は、現状、採選亭さいせんていが木活字を用いた最初の年となる。文政二年（一八一九）に刊行された『そうもくようかつひろく草木養活秘録』は整版本せいほんであつて活字本ではない。『稲川詩草』の最後には、採選亭が活字を新造したことを祝った詩が載せられている。ということは、活字の完成は、文政三年か四年の初め頃だろうか。

『重修無得道論』が、本当に跋文にある日付から日を置かずに印刷されていれば、『稲川詩草』より前に手がけられたことになる。日富は、柴崎直古しばさきなおふるの出版業に早くから関心を持っていたのかもしれない。

七、海を渡った『重修無得道論』

貞松文庫には、『重修無得道論』が七点あると述べた。島田文庫のものを合わせると、立正大学図書館には計八点の所蔵があることになる。この本を、これだけ多く持っている図書館は他にないだろう。しかし、立正大学図書館の原簿によると、かつては『重修無得道論』がもう一点存在していた。

〈原簿の注記〉



*ブルーノ・ペツォルト
ドイツ人。一九一〇年に来日し、日本で
没した。島地大等や花山信勝らに仏教
を学び、天台宗を中心とした大乘仏教
を研究した。天台宗の僧籍を持ち、葬
儀は浅草寺にて行われた。

図書館では、本が破損・紛失した場合などに除籍となる。かつて存在した『重修無得道論』も除籍されているが、その理由は破損や紛失ではなかった。原簿の注記によると、「ペツォルト教授」に寄贈されたことが分かる。調査したところ、同様の注記が見られる除籍本は、四十点一五七冊に及んだ。

この「ペツォルト教授」は、ドイツの仏教学者であったブルーノ・ペツォルト（二八七三〜一九四九）のことだろう。ペツォルト氏は、大正六年（二九一七）*に日本の第一高等学校で教鞭をとっていたが、その他にも複数の大学で講義を行っていた。日蓮宗大学（現立正大学）もその一つである（『比叡山に魅せられたドイツ人』）。

『重修無得道論』が除籍となったのは、昭和二年（一九二七）七月九日のことである。昭和二年度の『立正大学一覽』（当時の学生要覧）を見ると、ペツォルト氏は、立正大学の講師として「独語」（ドイツ語）を教えていたことが分かる（『立正大学史資料集』第一集）。

先にも述べたように、立正大学図書館はペツォルト氏にそれなりの数の蔵書を譲ったことになる。通常ではあり得ない措置だが、何らかの理由があったの

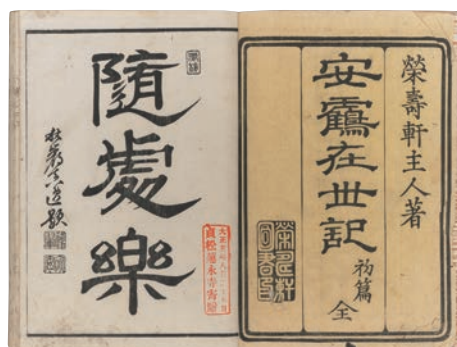
*ハーバード・燕京図書館
ハーバード大学内に置かれた、東アジア研究のための図書館。中国語・日本語・朝鮮語・ベトナム語を中心に多数のコレクションを有する。アメリカにおけるアジア研究の促進などを目的とし、一九二八年にハーバード大学と北京の燕京大学に置かれた燕京研究所を母体とする。

だろう。推測ではあるが、ペツォルト氏は私設の図書室を設け、それを国際的な大乘仏教研究所の土台とする計画を持っていたという（D・シャウベッカー「ブルーノ・ペツォルト（1873年—1949年）」）。当時の立正大学図書館はその計画に賛同し、蔵書を譲った可能性がある。ただし、寄贈した蔵書は、『重修無得道論』のように複数所蔵しているものに限られたようだ。立正大学に在籍する学生のことを考えれば、当然の判断だろう。

ところで、ペツォルト氏の旧蔵書の一部は、ハーバード大学・燕京図書館*に所蔵されている。ペツォルト・コレクションの概要は、道元徹心氏の「ブルーノ・ペツォールド氏の仏書コレクションについて」に詳しいが、立正大学からの寄贈本については触れられていない。

なお、『ハーバード燕京図書館和書目録』を見ると、『重修無得道論』の所蔵が一点確認できる。現物を見ていないので何とも言えないが、この本が立正大学からペツォルト氏に寄贈された本という可能性はあるだろう。仮に立正大学と無関係であったとしても、蓮永寺が制作に関わった『重修無得道論』の一冊が、現在、アメリカに渡っていることは確かである。

安鶴在世記 初篇 (A99/4)
 栄寿軒安鶴著・谷臨川画・袋綴 四つ
 目綴 半紙本一冊。22.7×16.0cm。
 文久二年(一八六二)十一月刊。栄寿軒
 蔵版。二十五丁(題辭二丁落丁か)。



左官職人による自費出版——『安鶴在世記』

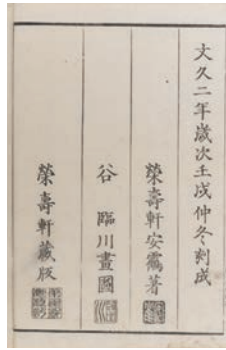
一、『安鶴在世記』

ここまでは堅い話ばかりを紹介してきたので、本章では少し毛色の違った本を取り上げたい。タイトルは『安鶴在世記』^{あんづざいせいぎ}という。「安鶴」というのは人名前なので、その意味するところは、安鶴が世に在りし記録といったところか。安鶴は、駿府に実在した左官職人で、文化八年(一八一二)に生まれ、明治五年(一八七二)に没した。その安鶴が、自身の実体験を語ったというふれこみで書かれているのが『安鶴在世記』である。ただし、文章は別人の筆によるものと推測されている。作者としては、物語中に登場する花野井有年^{はなのいありとし*}の名があがっているが、確証があるわけではない。

この本には、「狐の証文の事」「沖津川を逆立してわたる事」という二つの話が収録されている。どちらも天保三年(一八三二)頃に起こった出来事という。天保三年当時、安鶴はまだ二十一歳の若者であった。しかし、この本が作られたのは、それから三十年後の文久二年(一八六二)のことである。安鶴はすで

*花野井有年（二七九九〜一八六五）
医者・歌人。駿府の安西四丁目に住んだ。
漢方・蘭方を学ぶが、後に、日本独自の
漢方である皇国医方を提唱した。

〈刊記〉



に五十一歳、当時としては老境に入っている。

出版の目的については、序文などにも特に記載されていないが、人生も終盤にさしかかり、若い頃を振り返って自らの生きた証を残す意味合いがあったか。現代でも、十数年前から自分史の自費出版が流行している。それに近い感覚だったのかもしれない。

実際、『安鶴在世記』は安鶴が自ら費用を出して出版した本だった。刊記には、本屋の名前がなく、「榮壽軒藏板」とある。これは、安鶴が版木を所蔵していることを表している（榮壽軒は安鶴の号）。版木が存在するので、この本は整版本である。前章でも述べたように、整版本の場合、版木の所有者が出版の権利を有する。個人によって出された、このような出版物は私家版と呼ばれる。私家版を出すにあたって、まず乗り越えなければならないのは、費用の問題だろう。『安鶴在世記』は、『重修無得道論』のような活字本ではない。整版本が活字本より高く付くのは前章で述べた通りであるが、本屋を介さない場合、版木作成費や紙代などが割高になる。

資金問題をクリアできたとしても、『安鶴在世記』には挿絵があるので、絵

師の手配も必要となる。また、安鶴あんづる自身が文章を書いていないとすれば、執筆を引き受けてくれる人物も探さなければならぬ。

ただの一職人であつたら、どれも厳しそうな条件だが、安鶴には、職人とは別の芸人としての顔があつた。お呼びがかかれば出かけていき、その多彩な芸を披露したり、時には寄席にも顔を出したりしていたらしい。あるいは、出版費用を立て替えてくれる鼻肩筋がいたのかもしれない。

また、和歌や狂歌などの文芸にも明るく、彫刻・印刻画などもこなしたため、その方面の知人も多かつた。作者説のある花野井はなのい有年ありとしも、安鶴の和歌の師匠であるし、挿絵を担当している谷臨川たにりせんには絵を習っていたようだ。

二、安鶴の芸

安鶴の芸について、もう少し詳しく触れておこう。安鶴は、昔話や落語といった話芸や、手先で表現する影絵、八人芸などで評判を取つた。特に八人芸は安鶴の代名詞だったらしく、物語中でも、招かれて八人芸を披露したという記述がある。また、啖呵を切つての名乗りの場面でも、八人芸のことに触れている。

*谷臨川（二八一〇～一八八二）
駿府の安西五丁目に住んだ役人。材木を運ぶ筏をあらため、運ばれる材木に対し、十分一の税を徴収する役を行っていたとされる。

*坪内逍遙（一八五九〜一九三五）

西洋文学に影響を受け、『小説神髓』にて小説の写実主義を提唱した。シエイクスピアの完訳を行ったことでも知られる。

*江戸川乱歩（一八九四〜一九六五）

推理小説家。ペンネームはエドガー・アラン・ポーに由来する。晩年に住んだ住宅や蔵書は立教大学に譲渡されている。

*井原西鶴（一六四二〜一六九三）

俳諧師・浮世草子作者。『好色一代男』の流行は、風俗小説である浮世草子というジャンルの起点となった。

八人芸は明治三十年（一八九七）頃までは続いたが、すたれてしまつて現代に伝わってはいない。ただし、どのようなものだったかは分かっている。八人芸とは、屏風などの敷居で姿を隠し、複数人で演奏しているかのごとく、一人で多くの楽器を操る技である。八人芸の名称が一般的だが、十二人・十八人・三十二人芸などの名で自身を売り出した芸人もいた。八人芸には二つの流派があつたとされる。一つは、鳴物を主体とする川島流、もう一つは、鳴物を交えつつ声色で複数人を演じ分ける牛島流である。楽器だろうが、声色だろうが、一人で数人分の役割をこなすというところが肝なのだろう。

この、声で複数人を演じ分ける部分から、近代には腹話術として理解されていたようである。例えば、言文一致運動で知られる坪内逍遙は、「西洋の八人芸」（一九〇六年）という小編で、西洋の腹話術を八人芸で説明している。また、江戸川乱歩の「声の恐怖」（一九二六年）も同様である。

江戸時代に、この芸を最初に演じたと認識されていたのは、酒楽という座頭である。井原西鶴の『好色一代女』（巻一「舞ぎよく遊興」）によると、酒楽は、万治年間（一六五八〜一六六一）に「駿河国、あべ川のあたり」から江戸へ向

かい、一人で八人分の楽器を演奏する芸を披露した後、京都に出てその芸を広めたという。安部川は駿府城の西を流れる川で、安鶴の出身地である安西五丁目（四頁地図参照）。安鶴は偶然にも、八人芸の創始者と同郷だったことになる。

初期の八人芸は、平家琵琶などと同じく座頭の芸であったが、後に一般の芸人も演じるようになった。酒楽以後、たびたび名人が出て流行したようである。『安鶴在世記』によると、安鶴が八人芸を学んだ動機は、天保年中（一八三〇〜一八四四）にはやっていたためという。

天保期に活躍した八人芸の演者の中に、安鶴の号と同じ芸名を持つ人物がいた。名を豊島栄寿としまえいじゆといい、後に豊島寿鶴齋としまじゆかくざい（二代目）を名乗った。この人物については、樋口保美氏の「八人芸」という論に詳しい。豊島栄寿は、『安鶴在世記』の舞台と同時代の天保四年（一八三三）十月九日に、江戸一流の芸人として名古屋の大須観音おおすかんのん（真福寺）前で芸を披露したという記録がある（『名陽見聞図会』）。この時は、まだ栄寿を名乗っていたようだ。寿鶴齋の没年は明治二年（一八六九）ということなので、安鶴とほぼ同世代の人物だと思われる。

安鶴の名は、出身地の安西と本名の鶴蔵を縮めて安鶴ということらしい。

栄寿軒えいじゅけんの方は、安鶴とセットで松寿軒西鶴しょうじゅけんさいかく（井原西鶴いはらさいかく）のもじりとの説もあるが（中川芳雄「庶民生活と創作―『安鶴在世記』の意味するもの」）、八人芸を得意とする安鶴が、豊島栄寿を意識して付けたというのはどうか。本当のところは分からないが、安鶴も寿鶴斎の評判は耳にしていたに違いないし、その芸を直接見ていた可能性もある。

ここまでの紹介から、安鶴に太鼓持ちのようなイメージを抱いたとしたら、それは間違いである。安鶴の芸には、軽業や力技といった肉体を駆使するものも含まれている。相撲も得意で、度胸もすわっていた。安鶴の実兄の富五郎は、清水次郎長しみずのじろちやうも一目置く駿府の大親分、安東文吉あんどぶんきちの兄弟分だったらしい。その関係で、安鶴も文吉の子分となっていたという話がある。

三、安鶴の知名度

安鶴は、芸達者というだけでなく、奇抜な行動をとることで知られていた。地元ではかなりの有名人だったようだ。『安鶴在世記』の序文には、ここに収

*清水次郎長（二八二〇～一八九三）
本名山本長五郎。侠客。黒駒勝蔵との抗争が有名。

*安藤文吉（一八〇八～一八七二）
侠客。清水次郎長の後ろ盾となる。規律を重んじる人物として知られる。

*石川淳（一八九九～一九八七）

小説家。東京外国語学校フランス語科を卒業。一九三七年、『普賢』にて第四回芥川賞受賞。戦時中は、江戸文学に関心を持ち、本人が「江戸に留学」（『乱世雑談』）していたと語つたほど。

*三田村鳶魚（一八七〇～一九五二）

江戸時代研究者。江戸の風俗考証や随筆などの著作が数多くある。『三田村鳶魚全集』二十七巻・別巻一卷が中央公論社より刊行されている。

められているエピソードが人々のよく知る話をつづつたものだと言われている。しかし、その名が鶴の声と均しく遠くの国々までも響いている、というのは、さすがに誇張があるだろう。安鶴は一貫してローカルな存在であったと思う。今もそのことに変わりはないだろうが、戦後、安鶴の名を広めるのに一役買った人物がいる。それは、作家の石川淳である。石川は、昭和三十二年（一九五七）に筑摩書房から『諸国畸人伝』という本を一千部限定で出版した（『別冊文芸春秋』昭和三十一年新号から昭和三十二年六月号まで、十回の連載をまとめたもの）。その中で、安鶴を「畸人」の一人として紹介している。

石川以前にも、三田村鳶魚が『江戸百話』（大日社、一九三九年）の中で安鶴を取りあげてはいるが（「安鶴一代噺」）、やはり『諸国畸人伝』の影響の方が大きいだろう。

『諸国畸人伝』は、後に筑摩叢書や中公文庫などでも出版されている。近いところでは、二〇〇五年の中公文庫（改版）がある。残念ながら、文庫本は現在絶版となっているが、『石川淳全集』第十三巻（筑摩書房、一九九〇年）などにも収録されているので、少し大きい図書館に行けば、すぐに読むことができ

〔挿絵①〕
「真九郎狐、唐木屋の普請所に睡眠して、
はからず安鶴に打たる」



きるだろう。

石川淳が安鶴の話を書くにあたっては、協力者がいた。静岡在住の左官職人、白鳥金次郎しろとりきんじろうもその一人である。白鳥氏は、『諸国畸人伝』が出たのと同じ年に、『静岡名人畸人伝』を書いている。この本には、『安鶴在世記』あんつるざいせいぎに載っていない安鶴のエピソードが収録されているので、こちらも合わせて読んでみるといいだろう。

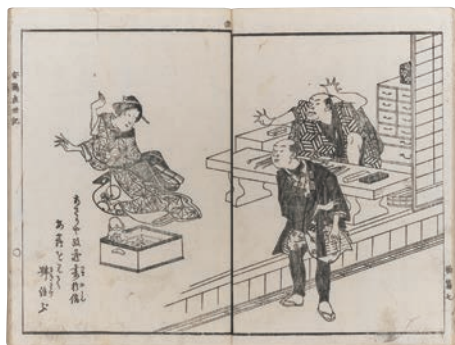
四、狐の証文の事

もし、『安鶴在世記』の原文を読んでみたいなら、『静岡県史』資料編十（近世二）に翻刻があるし、あらずじを知りたいなら、先にあげた石川淳の『諸国畸人伝』を読めばこと足りる。しかし、それらに任せてしまうと、本書で書くことがなくなってしまうので、簡単に話の筋を紹介しつつ、思いついたことを述べることにしよう。

「狐の証文の事」は、安鶴が原因で狐に憑かれた女から狐を追い出すまでの顛末を語った話である。

挿絵②

「あざりや政蔵妻於信、安鶴をみて号泣す」



安鶴あんづるが狭い場所で左官の仕事をしていると、積み重ねられた古い屋根板の隙間から何かが飛び出してきた。安鶴は、とっさに持っていたこて板で、正体不明の何かを殴りつける。殴られたのは狐だった。狐は、安鶴に仕返しをしようと思いつけたが果たせず、安鶴が訪問した芸仲間の政蔵宅で、その妻のおしんに取憑いた。

その後、おしんは安鶴が家を訪れるたびにひどく怯え、取り乱すようになる。それは一年経つても変わらなかった。政蔵が意を決して問い詰めると、狐は事情を打ち明けて、一旦はおしんの体から出ていく。しかし、安鶴に仕返しせずに戻ったことを仲間の狐達に咎められ、再びおしんに取憑いてしまった。

そこで、袋物師の久蔵たちが狐と交渉した結果、安鶴が狐と証文を交わすことになった。安鶴は、生涯四つ足の動物を叩かないことを約束し、狐はおしんから出て、二度と駿府を徘徊しないことを誓う、という内容である。これにより、狐も面目を保つことができるというわけである。

安鶴は、証文を「花井昌齋先生はなのいしやうざい」（花野井有年はなのいありとし）に書いてもらっている。その日付は天保三年（一八三二）十月九日である。狐の方も翌日に自ら証文を書

〔挿絵③〕

「真九郎狐、契書を書て安鶴に与す」



左下に「変化とは何のすみかそ風のおとはせを」とある。「はせを」は芭蕉のことだが、この句は、現在芭蕉の句として認められていない。曲亭馬琴の『新累解脱物語』（文化四年（一八〇七）刊）巻五の巻末に、芭蕉の句として同様の句が引かれている。

いた。最後に名前を書き入れる段になって一悶着あったが、署名の上から貼り紙をすることで決着した。狐は、安鶴を除き、自分の名前を絶対に見ないようにと釘を刺して去っていった。昔話などには、相手に名前を知られることで力を失ってしまう化け物の話などがある。狐が名前を隠すのも同じような理由だろう。物語中では、安鶴のみ狐の名が「真九郎」であることを確認している。

最後に、安鶴が狐に憑かれなかつた種明かしとして、摩利支天を信仰していたから、ということが語られる。摩利支天は、一切の災厄から身を守ってくれる神として武士に信仰された。徳川家康も軍神として摩利支天を祭っている。

『安鶴在世記』は事実譚を標榜していると述べた。狐憑きのリアリティーは現代とは比較にならない。それでも、この話が事実譚をよそおうためには、工夫が必要となる。安鶴や花野井有年を初めとして、登場する人達が実在の人物である点も重要だろう。特に、医学を学び、国学者でもあった有年が関わっていることで、信用度はさらに増す。

それ以上に重要なのは狐の証文だろう。これにも、現物が存在することを補強する仕掛けがある。『安鶴在世記』には、実際の証文をまねて彫った体裁の

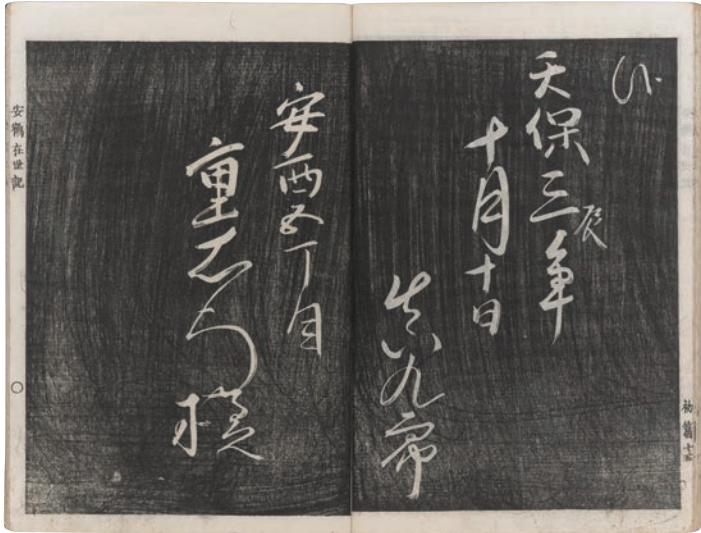
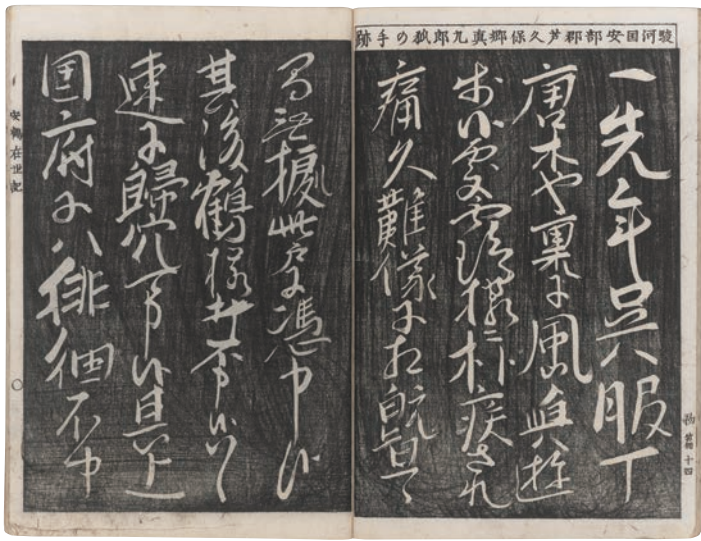
図が付けられている。通常、整版本せいばんは刷ったときに文字の部分が黒く残るように版木を掘る。しかし、この証文の図は逆で、周りを黒く残して文字の方を白抜きにしている。これは拓本たくほんを模したものである。

拓本とは、石碑などに紙をあて、上から墨を含ませた綿で叩いて、文字を写し取る方法である。こうすると文字が白く、周りが黒くなる。拓本は、名筆の筆跡を再現した複製物として珍重された。そのため、書道の手本などを出版する場合、文字を白抜きにすることが多い。

つまり、狐の証文の文字が白抜きなのは、書道の手本と同じく、その筆跡が本物を模したものであることを示している。

《狐の証文》

右上には「駿河国安部郡昔久保郷真九郎狐の手跡」とある。「昔久保郷」は現静岡市足久保奥組・足久保口組。



一先年呉服丁
唐木や裏に風と遊
歩候処鶴様二朴疾され
痛久難儀に相暨候
間無拠此戸に憑申候
其後鶴様打不申候ハ、
速に掃穴可申候其上
国府にハ徘徊不申

候
天保三辰年
十月十日

真九郎
安西五丁目
重右衛門様

〔挿絵④〕

「安鶴、逆立して沖津川をわたる」



五、沖津川を逆立してわたる事

もう一つは「沖津川を逆立してわたる事」という比較的短い話である。タイトル通り、安鶴が沖津川（現興津川、四頁地図参照）という川を逆立ちで渡ることになった顛末を語っている。

沖津川には橋がなく、川越し人足が肩車などをして旅人を渡していた。ただし、十月五日から翌年の三月五日までは、年貢米を運搬するために橋がかげられ、旅人が通行することも許されていた。

時は天保三年（一八三二）十月三日のこと、まだ旅人の通行は許可されていない。しかし、沖津川に着いた安鶴は、人足に頼らず川を渡ろうと考えた。浅瀬の場所を知っていたためである。そこに、川越し人足が近づいてきて、渡してやろうと言う。一度は断った安鶴だったが、人足の稼ぎのことも考えて、仕方なく決められた金額を払おうとした。しかし人足は、四十八文という通常の二倍の金額をふっかけてきたのである。怒った安鶴は、足も濡らさずに簡単に渡れるのに、四十八文も出せとは凶々しいやつだ、と言い放った。人足も怒って仲間を呼び集め、出来なければ打ち殺すぞ、と脅しをかける。すると安鶴は、

足に荷物の風呂敷包みをくくりつけ、逆立ちをしたまま川を渡りきってしまった。その後、大音声で堂々と名乗りをあげる。原文をそのままあげておこう。

川越等よくきけ。我はこれ府中安部川のほとりにすむ安鶴なり。身ひとつにて八人芸の芸徳を兼て、諸国を遊歴し、是等のたわむれ何かあらん。ふしぎの芸術さまざまあり。汝等われに隨身なさば、のぞみの術をしへつかはさん。

まるで、『平家物語』^{（へいけものがたり）}に見られる武士の名乗りのようである。この話は、知恵を絞った頓知話というより、力技で自らの言葉を証明した武勇譚とも言える。最後に、安鶴は次のような狂歌を詠んで去っていく。

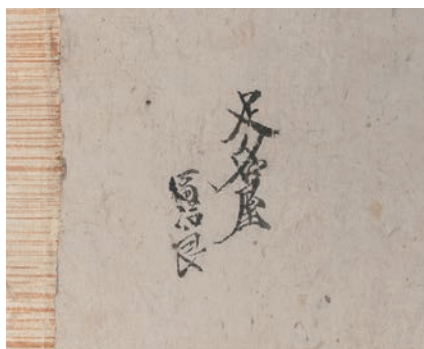
川越の口もぬらさでふろしきに
おあしをいれて手にてこしゆく

川越し人足に金を支払わず、風呂敷にお金を入れたまま（足に風呂敷を巻き）、手で川を越していく、という意味である。「おあし」には、お金の意味と、文字通り足の意味が掛けられており、「ふろしきにおあしをいれて」は、足に風呂敷を巻いた状態も表している。

〔「足名屋」の書入れ〕

裏表紙芯紙（A99／4）。

慶応元年（一八六五）、駿府の町人は第二次長州征伐のため、軍費を上納した。その入金者リスト（御進発御用途上納名前帳）の安西四丁目在住者に、二十両を納めた「足名屋富次郎」がいる。



六、二種類の『安鶴在世記』

『安鶴在世記』^{あづるざいせいぎ}は売り物でなく、安鶴が得意先に手ぬぐい代わりに配ったものと考えられている。立正大学図書館は、蓮永寺寄贈の『安鶴在世記』を二点所蔵しているが、蓮永寺も得意先の一つだったのだろうか。二点のうちの一点には、「足名屋／富治良（郎）」という書入れがあるため、安鶴から直接もらったわけではなさそうだ。もう一点は、蓮永寺での書入れのみだが、どこから入手したのか不明である。

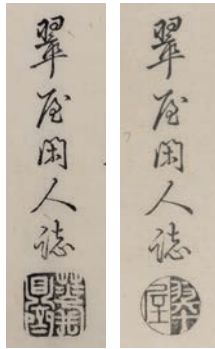
ただし蓮永寺は、『安鶴在世記』の著者と言われている花野井有年^{はなのいありとし}と多少の接点があったので、そちらから貰ったということも考えられる。

有年は、『辛丑雜記』^{しんちゆうざつき}という書を天保十二年（一八四一）に書いているが、同年三月十二日の記事で蓮永寺について触れている。その中で、蓮永寺の歴史に加え、蔵書を多く有すること、住持の「日富上人」^{にっぷ}に「日本記教証」という本を借りて見たことを書いている。この日富は当然、ここまでたびたび名前が出た、あの日富だろう。日富は、天保十二年の前年に没しているが、『辛丑雜記』は日記ではないので、有年が蓮永寺のことを書いたときに、かつて本を

〈序文の刻印〉

右は「翠／屋」(A99/4)、

左は「華井／泉齋」(A99/5)。



借りたことを思い出したのだろう。

実は、『安鶴在世記』は初篇であり、巻末には続篇の出版が予告されている。しかし、これは実現しなかった。その代わりかどうかは分からないが、『安鶴在世記』は一部修正して増刷されている。つまり二種類の『安鶴在世記』が存在する。なぜそれが分かるのか。立正大学図書館所蔵の二点を見比べると、序文の署名の下にある印文が違うことに気付く。一つは「翠／屋」、もう一つは「華井／泉齋」となっている。表紙や刷りの状態から判断すると、「翠屋」の方が古く、後に「華井泉齋」へと改められたのではないか。

版木に彫った文字を修正するのは面倒である。直したい文字を削り取り、その部分に新たに木片を埋め込んで彫り直す。そこまでして、なぜ印文を修正したのかは分からない。序文を書いた「翠屋閑人」は、花野井有年の息子の花野井泉齋であるが、泉齋の要望によって直したのだろうか。

『安鶴在世記』は、時間を置いて少なくとも二度刷られている。『安鶴在世記』の配り先は、意外と多かったのかもしれない。

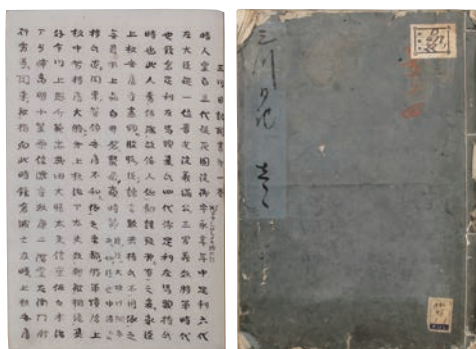
『三川日記聞書』二十二巻 (A96 / 43)

善念大徳〔著〕・呆々庵兀子輯。袋綴

四つ目綴 写本 大本二十二冊。27・5

×19・2cm。明和元年(一七六四)十一月

呆々散人(呆々庵兀子)序。計九九四丁。



貸本屋、鳴雁堂の蔵書——『三川日記聞書』

一、駿府の貸本屋

『三川日記聞書』は、明和元年(一七六四)に書かれたと推定される雑史で、徳川家康に焦点を当てた軍記物とも言える本である。この本は、鳴雁堂という

貸本屋の蔵書だったと思われる。なぜ、そう言えるのか。『三川日記聞書』を紹介する前に、その答えにたどり着くまでの経緯を述べることにしたい。まずは、鳴雁堂の話から始めよう。

採選亭とは別に、駿府の城下町には鳴雁堂という本屋が営業していた。繁原央氏による幕末の町絵図の検証によつて、天保十三年(一八四二)以前から、四足町(四頁地図参照)に店舗を構えていたことが知られている。主人の名はかがねやようぞう。雁金屋要蔵という。江戸時代、雁金屋の屋号を持つ本屋は多いが、要蔵の出自については分かっていない。

この鳴雁堂は採選亭と異なり、積極的に出版活動を行つておらず、貸本業を中心に生計を立てていたようだ。前の章でも述べたように、本を作るにはかな

りの初期投資が必要となる。人気のベストセラー作品であれば話は別だが、通常は、少しずつ増刷して出版費用を回収していく。儲けが出るようになるまで数年を要することもあった。執筆者に費用の一部を負担させるのも、本屋のリスクを少しでも軽減するためである。

出版業に対して貸本屋業で生計を立てていけば、大きなリスクを負うことはないだろう。本にもよるだろうが、鳴雁堂の国学の本のレンタル料(見料)は「三割」だった。これは本の値段に対しての割合だろうから、四回貸出せば黒字になる計算である。

本の相場は、基本的に現在よりも高かったので、買うよりも借りて読む人たちが多かった。そのため、江戸時代には全国各地に貸本屋が存在し、図書館のような役割を果たしていた。中には、行商人のように本を風呂敷に入れて担ぎ、得意先を回ったり、露天商のように道に広げて商売をしたりする者もいた。

鳴雁堂には、他の貸本屋と異なるところがある。それは、『鳴雁堂蔵書目録』と呼ばれる自店の貸本リストの版本が、静岡県立中央図書館に残っている点である。先の見料は、この目録に書かれている。

〈雁金屋の印〉

「厂」は「雁」の略字



*十五点

詳細は省くが、版本は、『癸未紀行』
『三之選』、『日本歳時記』、『参考太平記』
『狭衣物語』、『本朝編年小史』、『和州
諸將軍伝』、『本朝通紀』（前編）の八
点。写本は、『南方紀伝』、『難波戦記』
『古史通』、『読史余論』、『今川家集』、『三
川日記聞書』、『翁変成児論』の七点。

貸本屋の目録といえ、明和四年（一七六七）から明治三十二年（一八九九）まで営業していた、名古屋の大惣（だいそう）のものが知られている。『大惣蔵書目録』は、廃業の際に蔵書を売却する目的で作られたとされる。客に向けられたものではないが、掲載点数は二万を超え、貸本自体も京都大学や国立国会図書館などに残っている点で貴重である。鳴雁堂（めいげんどう）の場合、貸本の所在は知られていない。

二、鳴雁堂の蔵書

ここで立正大学図書館の蔵書の話に戻ろう。同図書館には、上の図のような「駿四足町／＼（山形にホ）白井／＼府雁金屋」という印が押された本が十五点確認できる。『三川日記聞書』もこの中に含まれる。印の雁金屋は屋号で、白井は本姓だろう。駿府四足町は店の所在地を表している。このような墨印は、貸本屋の蔵書に多く見られる。

四足町にある雁金屋について調べていく中で、鳴雁堂の存在が浮上してきた。この印が鳴雁堂のものであれば、立正大学図書館の十五点は、その蔵書ということになる。

*参考太平記

『太平記』を校訂・注釈した書。徳川光圀の命によつて、『大日本史』編纂の資料として作成された。元禄四年（二六九）刊。

*史記評林

明の李光縉が増補した『史記』の注釈書。

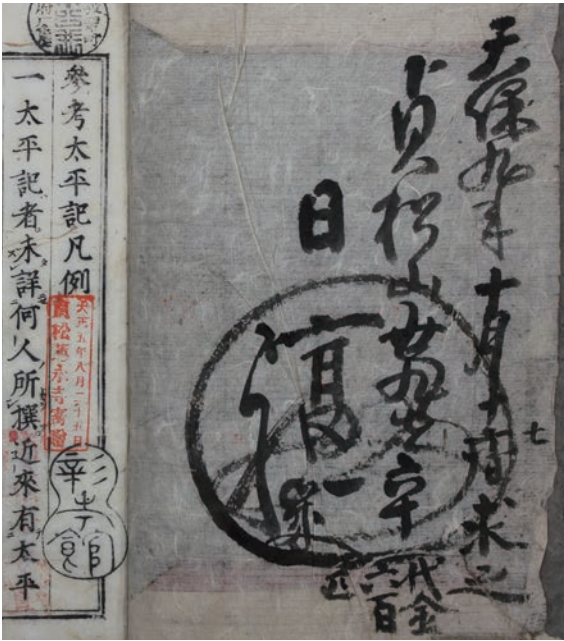
しかし、雁金屋要蔵の本姓については知られていないし、四足町の雁金屋というだけで、鳴雁堂とこの印を結びつけるのは早計かもしれない。そこで、立正大学図書館の蔵書にさらなる情報を求めた。ヒントを与えてくれたのは、またも日富である。

十五点中の『参考太平記』^{さんこうたいへいき*}には、日富による書入れがある。それによれば、日富は、この本を天保九年（一八三八）に「六百匹」で購入している。購入先は、墨印の四足町雁金屋である可能性が高い。天保九年当時も、鳴雁堂は四足町で営業していたと考えられるので、そこに複数の雁金屋がなければ、墨印は鳴雁堂の印ということになる。

『鳴雁堂蔵書目録』には、売り本も扱っている旨が記載されているので、日富が本を買っていてもおかしくはない。実際、貞松文庫の『史記評林』^{しきひょうりん*}には、「甲午十二月」に日富が「鳴雁堂」で買ったとの記載がある。日富の生存年から推すと、「甲午」は天保五年（一八三四）に当たするため、購入したのはそれ以前だろう。この『史記評林』に四足町雁金屋の印が見られない点が気にかかるが、日富も鳴雁堂を利用していたことは間違いない。

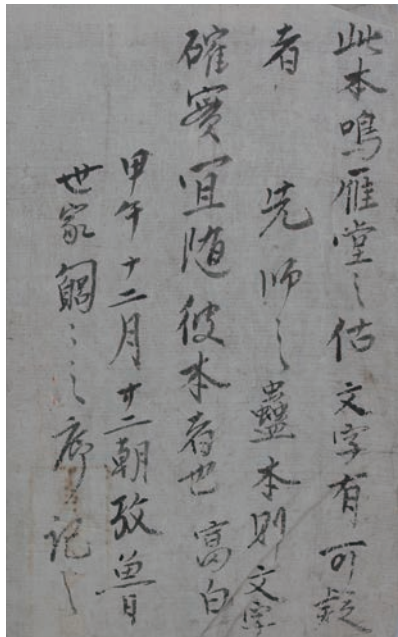
〔天保九年の書入れ〕

参考太平記 四十卷（巻第四十欠）四十冊（A94/45）
 第一冊見返し。「天保九年十月十六（七） 求之／貞松山廿九世／日富
 六十一歳 代金六百匹」とある。



〔天保五年の書入れ〕

史記評林 一三〇巻二十五冊（A86/13）
 大坂、柳原喜兵衛（他二肆）、天明九年（二七八九）求版。
 第十一冊見返し。「鳴雁堂之估」の「估」は売るの意味。



鳴雁堂で買った、この『史記評林』の「魯世家」に出てくる「劔々」という文字が、師の所持していた『史記評林』の文字と違っているが、師の本の表記に従う、といった内容が書かれている。この本の巻三十三（第十一冊）の該当箇所を見ると、「劔劔」の文字に対して、「夔夔」という注記を書き入れている。

*今川家集 三卷三冊。(第一・二冊
911.158/42/12' 第三冊 A94/
11)

今川氏親(一四七三〜一五二六)と、その一族や家臣、連歌師など、今川家に関わる人々の歌を取めた歌集。歌の指導者の位置にいた冷泉為広(法名宗清、一四五〇〜一五二六)、氏親の義兄正親町三条実望(一四六三〜一五三〇)、連歌師として著名な宗長(二四四八〜一五三三)や素純(生年未詳〜一五三〇)の名も見える。資料的な価値を考え、附録として本書の巻末に全文を翻刻した。

三、『鳴雁堂蔵書目録』の記載

四足町雁金屋の印が鳴雁堂のものだという可能性は高まったが、まだそう言い切るには不安が残る。そこで、更に別の角度からも検証してみた。

もし印を押したのが鳴雁堂ならば、立正大学図書館の十五点が『鳴雁堂蔵書目録』に掲載されているかもしれない。目録には、刊・写の区別や本の冊数なども書かれている。調べてみると、完全に一致するものは九点という微妙な結果だったが、それは大した問題ではない。目録が作られる前に売り切れてしまえば、新たに仕入れない限り、同じ書名が目録に載ることはないからだ。

重要なのは、一致している九点の方である。この中には、広く流布していない本が二点含まれている。それが冒頭でふれた『三川日記聞書』と、『今川家集』という写本である。

どこにでもある人気の本なら、別の貸本屋も持っているかもしれない。しかし、四足町雁金屋の印が押してあるめずらしい本が、たまたま『鳴雁堂蔵書目録』に載っているという偶然は考え難い。そうなると、『三川日記聞書』と『今川家集』は、目録に記載された貸本そのものだという可能性が出てくる。

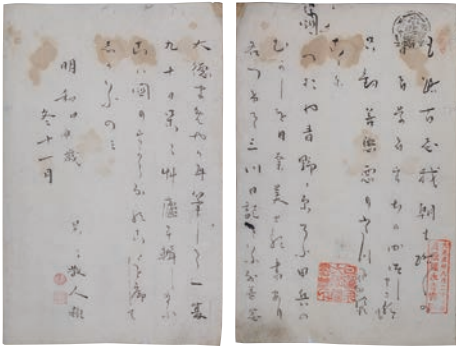
ところで、『三川日記聞書』と『今川家集』が、なぜめずらしい本だと分かるのか。それは、現在の残存状況からの推測である。

主な大学や公共図書館などが、現在どんな和本を所蔵しているかを調べるには、「日本古典籍総合目録データベース」を使うのがよい。これは、国文学研究資料館のサイトで公開されている。一昔前は、『国書総目録』を引くのが一般的だったが、先のデータベースは、『国書総目録』を継承・発展させていて、情報量も増えている（二〇一七年には「新日本古典籍総合データベース」が公開された）。念のため両方調べてみたが、先の二点は確認できなかった。むしろ、そこに掲載されているものがすべてではないので、あくまで一つの目安である。

『国書総目録』には、立正大学図書館の和本も一部は載っているが、網羅されているわけではないので、先のデータベースを検索してもヒットしないことも多い。ちなみに、二〇一一年に勉強出版から出された『江戸時代初期出版年表』は、立正大学図書館の蔵書も参照しているので、同館にある江戸初期の版本を調べるのに便利である。

次に、先の二点が、『鳴雁堂蔵書目録』にどのように書かれているかを確認

〈『三川日記聞書』序文〉



してみよう。『今川家集』は、「記録 物語隨筆 歌書類」という分類の中に「今川家集 三」とある。「三」の三画目が欠けているが、文字のバランスから見て、二でなく三だろう。『三川日記聞書』は「本朝軍記類」に次のようにある。

三河記 三

同日記 二十五

同聞書 二十二

「同日記」「同聞書」を略さずに書くと、それぞれ「三河日記」「三河日記聞書」となる。「河」は「川」と通じるので、「三河日記聞書」は『三川日記聞書』のことと見てよいだろう。書名の下に数字は冊数を表している。版数の場合、数字の上には●や▲の記号が入る。無印は写本なので、『今川家集』は三冊の写本、『三川日記聞書』は二十二冊の写本ということになる。これは、現在立正大学図書館に所蔵されている形態と一致する。

四、『三川日記聞書』

前置きが長くなったが、ここで『三川日記聞書』（以下、『聞書』）について、

〈序文翻字〉

もうこし我朝もろくの
智者学者たちの沙汰し申さるゝも
只勸善懲惡のふたつをはなれず
こゝに

国つおや青野か原ふ甲兵の

むかしをひなみせる書あり

名つけて三川日記といふ前善念

大徳まめやかに筆して一夏

九十日呆々草庵に輯したふ

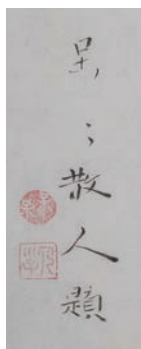
古は国のたからなることを序して

しかいふのみ

明和甲申歲

冬十一月

呆々散人題



〈序文の署名と印〉

もう少し詳しく見ていきたい。『聞書』は徳川家康を中心とした軍記物で、関ヶ原合戦の顛末までを描く。徳川家の由緒を永享年中（一四二九～一四四一）から語り始め、家康の伏見城入りなど、関ヶ原合戦後の出来事を六行ほどで略述し、天下の静謐を祝って終わる。

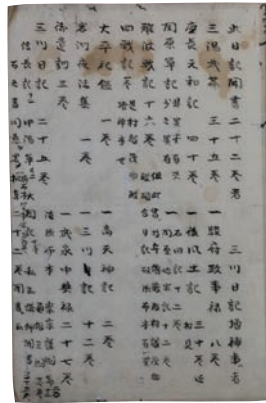
冒頭には、序文と、執筆に利用された書名のリストがあげられている。次いで、徳川家の略系図を家康の孫の代（將軍家と御三家を含む）まで載せる。

序文には、『聞書』の成立について書かれている。分かりにくい部分はあるが、関ヶ原合戦の顛末を記した「三川日記」を「善念大徳」が忠実に筆写し、それをもとに、一夏九十日にかけて「呆々」が草庵で編輯したものが『聞書』のようだ。序文の後に列記されている参考資料のリストから、『聞書』は、様々な版本や写本を用いて書かれていることが分かる。そのリストの中には、「三川日記 二十五卷」がある。「二十五」という数から、『鳴雁堂蔵書目録』で『聞書』の一つ前にあった「三川日記」が、これに当たるだろう。

序文は、明和元年（一七六四）の十一月に「呆々散人」によって書かれている。「呆々散人」は『聞書』を草庵で編輯した「呆々」のことだと思われるので、

『聞書』執筆に利用された本

左端に「右之書同意ヲ略シテ撰集（流布本写本台三百卷）二十二巻聞書ト云」とある。



*廖太（一七一八〜一七八七）

大島氏。寛延三年（一七五〇）、初代服部嵐雪から続く、雪中庵の名跡を継ぐ（三世）。以降、芭蕉への回帰を提唱し活躍した。

『聞書』の成立も序文と同じ年だろう。

善念大徳の詳細については不明だが、呆々散人の方は見当がつく。序文に書かれた署名の左には、「呆／呆」「兀／子」という印が押されている。この印文から判断して、呆々散人は呆々庵兀子のことではないだろうか。兀子は、俳諧師の廖太の門人で、俳諧の作法書『続夏引集』（宝暦十二年（一七六二）序）などの編者として名が残る。

兀子のような俳人が、合戦を扱った『聞書』の作成に関わった理由は分らないが、『聞書』は、どうやら何らかの企画によって作成されたようだ。それというのも、『聞書』二十二冊の見返しほぼ全てに、「発起」「世話」「施主」など、いずれかの言葉とともに、複数人の名が記されている。ということは、発起人が計画し、世話役が施主から資金を集めて作られたのだろう。

ただし、それらの人名は、ほとんどが墨で塗りつぶされており、読むことができない。辛うじて読めるものの中に、「発起 山本長蔵」「岡山清水西方半左衛門」などがある。山本長蔵は発起人ということ以外、これといった情報が書かれていないが、施主の西方は駿河の岡清水（現静岡市清水市）の在住だろ

う。そう言えば、序文を書いた呆々庵ばいばいあんごつし兀子も駿府城の南に住んでいたようなので、『聞書』の作成には駿府周辺の人たちが参加した可能性がある。

五、貸本のランキング

話は変わるが、貸本屋では、どんな本が人気だったのだろうか。寛政期（二七八九〜一八〇〇）から明治初期には、いろいろな事柄や人物をランク付けした番付表というものがあつた。それらは、相撲の番付表を模していたため、見立て番付などと呼ばれている。

現代にも、〇〇番付という名のランキングは色々とある。例えば、日本経済新聞社などが発表するヒット商品番付や、二〇〇六年に廃止されたが、税務署が発表していた高額納税者リストも長者番付と呼ばれていた。

これらと同じで、テーマごとに様々なものをランク付けし、一枚刷りの印刷物として売り出すようになったのが寛政期とされる。例えば、本書二章でも引いた『於多満おだまき幾』巻四（五十七歳の記事）には、採選亭さいせんていから活字本を出した猪飼敬所いかいけいしよが、「日本儒者番附」で西の大関にランク付けされたという話が出て

いる。この頃は大関が最高位なので、猪飼は西のトップだったことになる。

見立て番付の中には、貸本をテーマにしたものもあった。例えば、「和漢軍書小説貸本競」(明治四年)と「和漢西洋之群籍(貸本競)」(明治十四年)があげられる。どちらも、明治に入ってから番付だが、その内容は江戸後期からの延長線上で捉えることができる。

ここでは、明治四年(一八七二)の貸本競を見ていこう。大まかに言っている番付は、東が日本、西が中国の合戦を扱った本に分類される。西はイメージしづらいかもしれないが、大関の『通俗三國志』、小結の『通俗水滸伝』などが分かりやすい例だろう。「通俗」とは、漢文を和訳したものを指す。

次に、明治四年の貸本競にて東のトップ一〇を確認したい。ちなみに、明治十二年(一八七九)の上位もそれほど変わらないので省略する。

大関 △三六〇
△百廿 真書太閤記

関脇 △イロク 関ヶ原軍記

小結 △百五十 真田三代記

前頭 △三十 豊臣鎮西軍記 △三十
□合四 難波戦記 △六十 朝鮮軍記

〈六十〉石山軍鑑 いしやまぐんかん □ 四十 三河後風土記 みかわごふどき △ 四十 太平記 たいへいき □ 廿三 信長記 しんちやうき

書名の頭に書かれている記号は、「〓」が写本、「□」が漢字と片仮名の本、「△」が絵入り読本を指すという注意書きがある。その下の数字は巻数だろう。現在知られている本の巻数と大きく異なるものもあるが、タイトルが一致する以上、大まかな内容は同じだと考えて話を進めたい。

ここにあがっているものは、『太平記』を除き、戦国武将とその合戦を題材にしている。しかも、織田信長おだのぶなが・豊臣秀吉とよとみひでよし・徳川家康とくがわいえやすに関わる合戦が中心である。この三者に焦点を当てたものに『信長記』しんしやうき、『真書太閤記』しんしやうたいこうき、『三河後風土記』がある。その他は、個々の合戦を大きく扱っている。『石山軍鑑』は信長の石山本願寺攻め、『豊臣鎮西軍記』とよとみちんぜいぐんき、『朝鮮軍記』ちやうせんぐんきは秀吉の九州平定と朝鮮侵略、『関ヶ原軍記』せきがはらぐんき、『難波戦記』なにわせんきは関ヶ原合戦と大坂夏の陣・冬の陣を描いている。『真田三代記』まんださんだいきが少し他と異なるが、真田幸村まきむらや、その子大助が大坂冬の陣と夏の陣で活躍するので、これも基本的には同じ流れの中にある。

信長・秀吉・家康と言えば、NHKの大河ドラマでおなじみの顔ぶれである。二〇一二年の『平清盛』たいらひよしよの視聴率は振るわなかったようだが、戦国時代を舞台

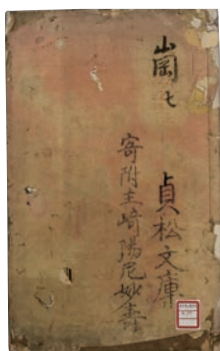
にした作品は、おおむね高視聴率を記録している。貸本競かしほんきょうの上位を見る限り、日本人の戦国時代好きは今に始まったことではないようだ。

ただし、これはあくまで貸本屋のランキングである。『平家物語』へいけものがたりなどの、よく知られた軍記物が読まれていなかった訳ではないだろう。トップ一〇に入っている本に写本が多いが、戦国時代の合戦を扱った本は、貸本屋を介して写本の形で流布することが多かった。多くの版本が出ているものであれば、貸本屋で借りなくても良かったのかもしれない。実際、貸本という括りがない「和漢軍書集覧」わかんぐんしよしゅうらんという軍書の番付では、『平家物語』の異本の『源平盛衰記』げんぺいせいすいきが東の関脇となっている。

最後に、話を『三川日記聞書』みかわにっきききがきに戻そう。『聞書』も家康を中心に、関ヶ原合戦などを描いている。この点では、貸本競の上位に入っていた『関ヶ原軍記』や『三河後風土記』などと重なる部分がある。流布した本ではないが、傾向としては人気の内容を扱っており、いかにも貸本屋にありそうな本だと言えるだろう。さらに、家康とゆかりの深い駿府城下で営業していた鳴雁堂であれば、『聞書』のような本の需要があったであろうことは想像に難くない。

大清嘉慶十九年時憲書 (49.822/227)

『額爾登布・福文高他編』。袋綴・五つ目綴。縦長本一冊。29・0×18・2cm。『北京』。欽天監『嘉慶十八年(二八三三)刊』。四十二丁(落丁あり)。



*グレゴリオ暦
ローマ教皇グレゴリオ三世により制定された暦。ユリウス暦に替り、一五八二年より実施された。

中国からやってきたカレンダー——『大清嘉慶十九年時憲書』

一、太陽暦と太陰太陽暦

二〇一二年は、ちよつとした暦ブームで、暦関連の書籍が複数出版されたり、歴史関係の雑誌で特集されたりした。二〇一〇年、本屋大賞などの賞を受賞した沖方丁氏の小説『天地明察』が映画化された影響だろう。『天地明察』の主人公、渋川春海は、日本独自の暦を作成した人物として知られる。最後に、江戸時代の暦と関連づけて、『時憲書』という中国のカレンダーを紹介し、本書を締めくくりたい。

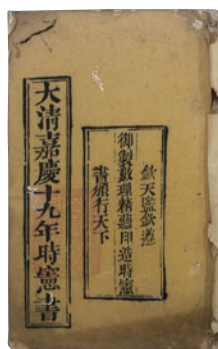
『時憲書』について述べる前に、太陽暦と太陰太陽暦について簡単な解説をしておこう。現在、世界の多くの地域で採用されているのは、グレゴリオ暦*と呼ばれる太陽暦である。太陽暦は、地球から見た場合の太陽の運行を基準にしており、太陽が見かけ上、地球を一周する期間を一年とする。グレゴリオ暦では、この周期を365.2425日としているので、一年を三六五日とした場合に誤差が出る。その誤差を埋めるため、閏日を設けることになる。ご存じのように、

閏日は四年に一度、二月に設けられるが、それだけでは誤差が出てしまう。端数が0.25日であれば、四倍してちょうど一日になるが、0.2425日では一日に足りないからである。そのため、四年ごとの閏日を欠かさずにいると、四百年で三日分の遅れが出てしまう。グレゴリオ暦はこの点を考慮し、閏日のある年を四百年間で三回減らして、九十七回となるように調整している。

日本で太陽暦が採用されたのは、明治六年（一八七三）、中国では中華民国が成立した一九一二年からである。それまでは、両国ともに太陰太陽暦を用いていた。太陰太陽暦は、月の満ち欠けの周期（朔望周期さくぼうしゅうき）を基準にしつつ、それを太陽暦の一年の長さに合わせるという複雑な方法をとる。月の朔望周期は29.5日ほどである。これを一ヶ月とするので、その日数は三十日の大の月と二十九日の小の月とに分かれる。これを一年十二ヶ月で計算すると約三五四日となるが、太陽暦と比べると約十一日少ない。この差を考慮しないのが純粋な太陰暦である。太陰太陽暦の場合は、そのずれを正すため、三十二か三十三ヶ月ごとに閏月を設けて一年を十三ヶ月とした。

二、時憲曆

『時憲書』封面



*乾隆帝
二十九頁に既出。

キリスト教社会では、グレゴリオ曆が制定されて以降、改曆は行われていない。それに比べると中国や日本は改曆が多い。特に中国では、たとえ曆を割り出す方法や基準（曆法）に大きな変化がなかったとしても、王朝の交替を契機に曆を改めた。これは、曆の作成や頒布を王の責務とする儒教の思想に基づく。明を滅ぼした清も、順治二年（一六四五）から新たな曆法を採用することになった。その曆法を用いて作られたのが時憲曆である。時憲曆は、途中数年のトラブルがあったものの、清が亡ぶ宣統三年（一九一一）まで使われ続けた。立正大学図書館には、なぜかこの時憲曆が一冊だけ所蔵されている。山吹色料紙の最初の丁（封面）には「大清嘉慶十九年時憲書」とある。「時憲曆」ではなく「時憲書」という名称なのには理由がある。乾隆元年（二七三六）、新たに皇帝となった乾隆帝の諱が弘曆だったので、「曆」の字を憚り、以後時憲書と呼ばれることになった。嘉慶十九年は一八一四年なので、当然「時憲書」となる。本書では、固別の本を指す場合を除き時憲曆に統一する。

時憲曆は、欽天監きんてんかんというところで毎年作成された。欽天監は、江戸幕府でい

〈欽天監の印〉

「尊奉憲諭／司頒監本」とある。ちなみに、毎年同じ印を用いているわけではない。



*アダム・シャルル（一五九一～一六六六）
ドイツ人。一六一一年にイエズス会士となり、布教のため、一六二二年に中国へと渡った。

うところの天文方、今ならば国立天文台に相当するが、天体の観測のほか、暦の作成や祭祀の吉凶を判断したりする役所である。少し見にくいだが、立正大学図書館の『時憲書』にも、欽天監の印が押されている。

意外にも、歴代欽天監の長官（監正）や副官（監副）には、キリスト教の宣教師が多かった。それは、時憲暦の暦法が西洋の天文学をふまえていたためだろう。嘉慶十九年『時憲曆』の作成に関わった宣教師には、監正の福文高ふくぶんこうと監副の李拱辰りきょうしん・高守謙こうしゆけんがいる。

西洋の方法に基づいた暦が中国で誕生するまでには、紆余曲折があつた。もともと西法の導入は、明朝末期の崇禎二年（一六二九）から計画されており、アダム・シャルル*（中国名、湯若望とうじやくぼう）らを中心に、西洋暦書の漢訳・集成作業が行われていた。こうして出来たのが『崇禎曆書』すうてんれきしよである。この編纂自体は崇禎七年（一六三四）に完了したが、改暦は先送りにされた。従来の暦法に従うべき、という保守勢力が存在したためである。ようやく採用が決定したのは、九年後の崇禎十六年（一六四三）のことだった。しかし間の悪いことに、その翌年、明は清によって滅ぼされてしまう。計画は白紙に戻ったかに思われたが、

* 「正五行」 「洪範五行」

五行説のこと。五行説は、万物が木火土金水の五気によって生じ、五気が順番に交代することで万物が変化するという考えで、様々な物事に適応された。五行の循環する順序には、木火土金水（五行相生）前の気から後の気が生じる（五行相生）前の気から後の気が生じる）や、木土水火金（五行相剋）後の気が前の記に勝つ、水火木金土（五行始生）五行の生まれる順序）などがある。「洪範五行」は、『書経（尚書）』「洪範」編で説かれている五行説で、五行始生のこと、「正五行」は五行相生のことを指すと考えられる。

明の滅亡により反対勢力が弱体化したことが幸いした。シャルルが清の欽天監に職を得ると、順治二年（一六四五）から時憲曆の頒布が決定する。この時、曆の計算に用いられたのは、『崇禎曆書』から名を改めた『新法曆書』であった。しかし、これで安心というわけにはいかなかった。西洋の曆法に対する反発はくすぶり続けており、そのことが反キリスト教運動と結びつく。

楊光先（一五九七〜一六六九）という人物は、以前からキリスト教や西法の曆を批判していたが、康熙四年（一六六五）、ついにその訴えが一部認められることになった。楊光先は「選択議」という文章を提出し、順治十五年（一六五八）に夭折した榮親王の葬儀の日時を選定ミスを指摘した。本来、選定に用いるべき「正五行」でなく、「洪範五行」に従ったため、葬儀が不吉な日に執り行われたという（『清史稿』卷四十五 志二十 時憲一）。曆法そのものとは無関係であるが、行事の日時を決めるのも欽天監の仕事だった。このことが重く受けとめられた結果、実質的に欽天監を統括していたシャルルと、キリスト教信者の中国人欽天監員の五名に死罪が言い渡された。シャルルは死罪を免れたが翌年に死亡し、他の五人には刑が執行された。

こうして一時的に旧来の暦法が復活したが、新たに欽天監の実権を得た楊光先らは、実のところ暦法に明るくなかったため、種々の不手際を引き起した。そのため、康熙八年（一六六九）、再び西洋暦法の優秀さが認められ、復活することになった。以降、雍正元年（一七二三）にキリスト教が禁じられたにも関わらず、道光十七年（一八三七）に高守謙が病で中国を去るまで、欽天監には宣教師が勤め続けた。

三、渋川春海

冒頭でもふれたように、『天地明察』の主人公、渋川春海しぶがわはるみ（一六三九～一七一五）は、初めて日本独自の暦を作成し、初代の天文方に選ばれた人物である。春海以前、日本では中国の暦法を採用していたが、特に長く用いられたのが宣明暦せんめいれきである。宣明暦は、一年を365.2446日としていた。真の値である365.2422日との誤差は0.0024日と僅かだが、貞観四年（八六二）から約八百年間も使われ続けたため、約二日（ $0.0024 \times 800 = 1.92$ ）の遅れが生じていた。宣明暦は冬至を基準に計算する。春海は、実際の観測結果から、冬至が

暦より二日早いことに気づき、正しい暦法の作成を目指して大和暦を考案した。

改暦運動の末、大和暦は貞享暦と名を変えて採用され、貞享二年（一六八五）から宝暦四年（一七五四）まで用いられた。

春海は、何もないところから貞享暦の計算方法を作ったわけではない。春海が参考にしたのは、元朝で使われた授時暦という暦法だった。時憲暦は、春海の貞享暦に直接影響を与えていないようだ。

ただし、時憲暦は春海も目にしていた。渋川家の四代目、渋川敬也が編纂した『春海先生実記』を見ると、元禄十二年（一六九九）九月に、六十一歳の春海がその年の時憲暦について意見を述べたことが書かれている。春海は、時憲暦が七月に閏月を置いていることなどを批判し、「時憲暦法」は適当でないという見解を示している。

四、二十四節気

元禄十二年の貞享暦は時憲暦と異なり、九月に閏月がある。この違いはどうして起こるのか。時憲暦は西法を用いているとはいっても、太陰太陽暦の形式

* 渋川敬也（一六九九〜一七二七）

仙台藩士、入間川市十郎。渋川家に養

子へ入り、敬也と名乗る。家督を継ぎ、

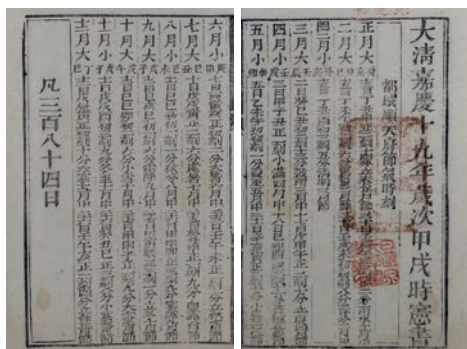
幕府天文方となるが、若くして死亡する。

をとることは変わらない。その点では、従来の枠から大きくはずれたものではない。しかし、二十四節氣にじゅうしせつきの割り出した方は大きく違っていた。これが、閏月をどこに設けるかに関わってくる。

二十四節氣とは、季節の目安として一年を二十四等分し、それぞれに名称を与えたものである。春分や秋分、夏至・冬至などは今でも馴染み深い。従来の割り出し方は、一年前の冬至の日時を基準とし、そこに一年を二十四で割った値を足していく、というものである。この方法を恒氣こうきという。しかし、時憲曆は、黄道こうどう（地球から見た太陽の通り道）を二十四等分し、その等分点を太陽が通過する日時を実測して求めた。この方法を定氣ていきという。恒氣の場合、二十四節氣の間隔は一定になるが、定氣は異なる。地球の公転軌道は楕円形を描くため、中心から遠いときは速度が遅く、近いときは早くなる。冬は日が短く、夏は長いのはそのためである。

実際の観測結果に合わせた方がよいように思えるが、定氣を採用したことにより、閏月の置き方に問題が生じた。二十四節氣は中氣と節氣の二つに分ければ、両者が交互に来るようになっていく。一ヶ月の間には必ず中氣がこなければ

〈嘉慶十九年の閏月と日数〉



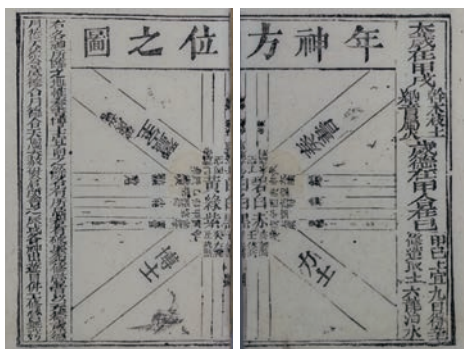
ばならないが、計算上、中気の無い月が現れる。この月を閏月とすると、ちょうどうまくいく。古来より中国では、この法則で閏月を決定していた。貞享暦でも同じである。しかし、二十四節気の間隔が一定でなくなつたため、この法則が使えなくなり、より複雑な定義が必要になつた。定気と恒気の違いは、時憲曆に反対した保守派が批判する所でもあつた。

立正大学図書館の嘉慶十九年（一八一四）の『時憲書』にも二月に閏月がある。同じ年の日本の暦と比較してみたい。この時、日本は寛政曆を用いているが、寛政曆も貞享曆と同じく定気法を用いているので、やはり時憲曆とは閏月が異なっている。両者の違いを分かり易く書くと次のようになる。

文化十年	十一月	嘉慶十八年	十一月
	閏十一月		十二月
文化十一年	十二月	嘉慶十九年	一月
	一月		二月
	二月	閏二月	

閏月が置かれる月が異なると、一年の日数にまで違いが出てしまう。嘉慶

〈年神方位之図〉



十九年の日数は三八四日だが、文化十一年は三五四日であり、当然、閏月の分だけ少ない。

定気法は、天保曆てんぼうれきになってから日本でも使われはじめた。現在作られている旧曆のカレンダーも定気を採用しており、天保曆の閏月の置き方を踏襲している。しかし、そのルールでは対応できない年がもうすぐやってくるという。二〇三三から二〇三四年にかけては、閏月を置く候補が三つあるようだ。まだどう処理するかは決定していないように、関係者は頭を悩ませている。

五、『時憲書』の範囲

もう少し、『時憲書』について見ていこう。カレンダーと言っても今とは大分異なる。日々の吉凶についての注記が書かれていたり、冒頭にその凡例に当たる用語の説明があったりする。それらは朱で印刷されていたと思われるが、立正大学図書館所蔵の『時憲書』では退色してしまってほとんど見えず、一見白紙かと勘違いしそうになる。その他にも、「年神方位之図」という方位を司る神の図を載せたりしている。西洋の天文学を用いているからといって、科学

的な情報のみが記されているわけではない。

一方で、中国各省の日の出・日の入りの時刻や昼夜の時間や、二十四節気の時刻も割り出されている。その範囲は国内にとどまらず、朝鮮や琉球などの周辺諸国にも及ぶ。ただしデータがなかったためか、嘉慶十五年（一八一〇）までの琉球の時刻は記載されていない。

当時、朝鮮や琉球は清の冊封体制さくほうたいせい下に組み込まれていた。冊封体制とは、中国が周辺諸国の王に官職や爵位を与えて統治を認める代わりに、各国が定期的に朝貢し、中国の皇帝に臣下の礼とるというものである。朝貢国は清の属国扱いになるため、清の暦を用いるのが建前だったが、琉球に時憲暦じげんれきが届くのは、その年も半分が過ぎた頃だったという。

《各地域の節氣時刻》
 縦列が地域、横列が二十四節氣。縦列の三番目に「琉球」、五番目に「朝鮮」がある。

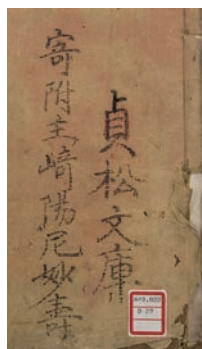
甲戌歲各省節氣時刻		各省序次盛京而下悉依地圖地之經度所列	
立春	正月五日	西初刻	西初刻
雨水	正月十五日	西初刻	西初刻
春分	二月五日	西初刻	西初刻
驚蟄	二月十五日	西初刻	西初刻
清明	三月五日	西初刻	西初刻
穀雨	三月十五日	西初刻	西初刻
立夏	四月五日	西初刻	西初刻

地域	立春	雨水	春分	驚蟄	清明	穀雨	立夏
盛京	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
琉球	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
朝鮮	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
吉林	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
錦州	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
浙江	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
福建	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
江蘇	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
山東	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
安徽	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
魯豫	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻
江西	正月五日 西初刻	正月十五日 西初刻	二月五日 西初刻	二月十五日 西初刻	三月五日 西初刻	三月十五日 西初刻	四月五日 西初刻

六、長崎からの寄付

嘉慶十九年の『時憲書』^{じげんしよ}は、中国製のカレンダーであるから、当然、中国から輸入されたことになる。なぜこれが、駿府の蓮永寺^{れんえいじ}にあつたのだろうか。ご存じのように、江戸幕府は鎖国政策をとっていたが、中国やオランダといった限られた国に対しては、長崎の出島を窓口として貿易を行っていた。一般的に、本が貿易品であるというイメージは薄いかもしれないが、荷揚げされる品の中には書籍も含まれており、それらは持渡り書^{もちわた}と呼ばれた。

立正大学図書館所蔵の『時憲書』の表紙には、「貞松文庫」^{ましまつ}の文字と共に「寄附主崎陽尼妙寿」^{きよまうにみやじゆ}と墨書きされている。どちらも同じ筆跡なので、寄付されたときに蓮永寺で書かれたものだろう。本を寄付した妙寿は、「崎陽」すなわち長崎の尼だと思われる。長崎在住で、たまたま手に入れた『時憲書』を駿府の蓮永寺に寄付したということだろうか。そのあたりの事情については分からない。仮に嘉慶十九年、すなわち文化十一年（一八一四）に寄付したとすれば、蓮永寺の貫首は、まだ日遇^{にちぐう}と名乗っていた三十七歳の日富^{にっぶ}だっただけである。



〈表紙の書入れ〉

七、書物改役と『時憲書』

基本的に、暦は消耗品であるため、年が改まれば捨てられてしまうことが多い。そのため、作られる数が多くても残りにくい。一方、日本国内にある中国の暦は、目的があつて手に入れた場合が多いだろうから、ぞんざいには扱われなかつただろう。

日本で、纏まつた数の『時憲書』を所蔵している機関はいくつかある。たとえば、国立国会図書館や国立公文書館（内閣文庫）は、複数の中国の暦を所蔵している。特に内閣文庫には、立正大学図書館と同じ嘉慶十九年の『時憲書』もある。立正大学図書館の『時憲書』は、巻末の数丁が欠けていたり、朱の部分が退色してほとんど見えなかつたりしたので、比較のために内閣文庫のものを見に行つた。

内閣文庫に所蔵されている『時憲書』は、江戸幕府の学校であつた昌平坂学問所の旧蔵書である。どうやら幕府は、たびたび中国の暦を輸入していたらしい。輸入の目的については、日本の暦と比較するため、中国の暦を把握するためなど、色々と想像できる。

〈向井元仲の書状〉

内閣文庫本(381/223)に付属のもの

覚

一大清嘉慶四年時憲書(式部/式冊)

右時憲書改被 仰付吟味仕候処

太陽出入昼夜時刻之内第二張目

第四張目第五張目第七張目第

八張目第十張目より第十三張目迄

第十張目都合拾張二部共、同様

脱紙仕候則其所^江白紙を相挟申候

其外相違之儀無御座候ニ付此段

以書付奉申上候以上

午十二月

向井元仲

内閣文庫の『時憲書』^{じげんしよ}には、覚書が挟まっているものがある。その覚書を書いた人物は、向井元仲^{むかいげんちゆう}(一七七〇〜一八二八)という。向井家は代々、長崎奉行配下の書物改役を勤めた家柄である。書物改役は、輸入される書籍にキリスト教など、幕府にとつて都合の悪い思想が書かれていないかをチェックすることを役目とした。

向井元仲の覚書は、嘉慶四年・六年・十五年の『時憲書』を吟味した際に書かれたもので、いずれも落丁箇所を確認し、その部分に白紙を綴じたことが書かれている。確かに、白紙の丁の前後を見ると、丁の番号が飛んでいることが分かる。覚書の日付は、それぞれ「午 十二月」「申 十一月」「巳 十二月」である。干支^{えと}の記載は、各『時憲書』の年の前年にあたる。『時憲書』は前の年の十月に翌年のものが配られた。ということは、元仲がチェックしていたのは、出来てから一、二ヶ月で日本に届いた新品だったということになる。それにしては、落丁が随分多い。作られた際のミスによるものだろうか。

覚書はないが、内閣文庫の嘉慶十九年『時憲書』にも、同じような白紙が綴じられていた。やはり元仲が入れたのだろうか。立正大学図書館所蔵の『時憲書』

にも落丁があるが、巻末の一丁を除き、落丁箇所はこの白紙の部分と一致する。丁の番号を見ると、落丁は二・四・五・七・八・十一〜十五である。立正大学図書館所蔵の『時憲書』にも同様の丁がない。同館の本は裏表紙がなく、末尾の一丁を欠いており、状態があまりよくないが、先の落丁は破れたりしてなくなつたのではなく、もともとなかったのかもしれない。

立正大学図書館の『時憲書』も中国から長崎に入り、改められた後に妙寿みよしげの手に渡つたのだろうか。そこから更に、駿府の蓮永寺れんえいじに至り、現在は立正大学図書館にある。同図書館には、他にも中国で刊行された版本が複数あるが、それらも皆、この『時憲書』のように長い道の手を経てここにたどり着いたのだろう。つい忘れがちになるが、世間でいうところの貴重書でなくても、時代を経た本にはそれなりのドラマがあつて、今ここに存在しているはずだ。

遍歴する蔵書―山梨稲川『三丁集』

- ・一海知義・池沢一郎注『儒者（江戸漢詩選二）』（岩波書店、一九九六年）。
- ・今関天彭『駿遠之詩界』（静岡谷島屋書店、一九三五年）。
- ・岩崎雅彦『笹野堅氏旧蔵文献資料目録（付解題）』（『能楽研究』二三、一九九九年）。
- ・小川環樹「山梨稲川の説文学の著述―天理図書館所蔵の稿本について」（『ビブリア』十五、一九五九年十月）。
- ・加藤正行『名遠理會之記』中（静岡郷土研究会、一九二八年）。
- ・貞松修蔵「稲川先生と其著述」、山梨稲川集刊行会編『山梨稲川集』四（山梨稲川集刊行会、一九二九年）。
- ・繁原央「山梨稲川の書誌」『山梨稲川と『肖山野録』』（麒麟社、二〇〇一年）。
- ・繁原央『山梨稲川』（静岡新聞社、二〇一二年）。
- ・高島要編『東瀛詩選本文と総索引 本文編』（勉誠出版、二〇〇七年）。
- ・静岡県立中央図書館蔵『山梨稲川詩稿』二三冊（K072/7）、同図書館デジタルライブラリーにて確認。
- ・静岡文化協会編『稲川先生記念録』（静岡文化協会、

一九二七年）。

- ・内藤湖南『先哲の学問』（筑摩書房、二〇一二年）。
 - ・日蓮宗宗務院「編」『月刊宗報』二（一九一七年一月十日）。
 - ・立正大学日蓮教学研究部編『日蓮宗宗学全書（史伝旧記部二）』（日蓮宗宗学全書刊行会、一九六〇年）、「日富上人略伝」収録。
 - ・立正大学日蓮教学研究部編『日蓮宗宗学章疏目録（改訂版）』（東方出版、一九七九年）。
 - ・渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』（青裳堂書店、二〇〇一年）。
 - ・「山梨稲川の詩文稿其他本文庫収蔵」（『葵文庫ト其事業』九八、一九三四年八月）。
- 採選亭の木活字本―『重修無得道論』**
- ・飯塚伝太郎「本と新聞」、井出孝「他」編『ふるさと百話』十九（静岡新聞社、一九七六年）。
 - ・猪飼彦績「於多満幾」、国書刊行会編『史籍雜纂』三（統群書類従完成会、一九七四年）。
 - ・大内田貞郎「近世木活字による印刷と出版」（『文学』四九―十二、一九八一年十二月）。

- ・岡雅彦・青木利行編『ハーバード燕京図書館和書目録』（ゆまに書房、一九九四年）。
- ・小野玄妙編『仏書解説大辞典（改訂四刷）』十（大東出版社、一九八五年）。
- ・岸本真実「近世木活字版概観」（『ビブリア』八七、一九八六年十月）。
- ・雲英末雄「近世木活の俳書」（『俳書の話』（青裳堂書店、一九八九年）。
- ・慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』二（井上書房、一九六三年）、「延宝三年刊新增書籍目録」収録。
- ・後藤憲二編『近世木活統貂』上下（青裳堂書店、二〇〇一年）。
- ・笹野堅「採選亭木活字板に就いて（一）」（『本道楽』一七、一九二六年十一月）・「同（下）」（同、同、同年十月）・「同追記」（同、一九二七年一月）。
- ・静岡県印刷文化史編集委員会編『静岡県印刷文化史』（静岡県印刷工業組合、一九六七年）。
- ・D・シャウベッカー著・石川光庸訳「他」（『ブルーノ・ペツォルト（1873年—1949年）第一部・第二部』、ペツ

引用・参考文献

- ・オルト夫妻を記念する会編『ペツォルトの世界』三、四（ペツォルト夫妻を記念する会、二〇一一年—二〇一三年）。
- ・長沢規矩也『図書学参考図録』三（汲古書院、一九七七年）。
- ・中野三敏「講演 近世木活字本の魅力」（『ビブリア』一二二、二〇〇四年十月）。
- ・橋口侯之介『続和本入門』（平凡社、二〇〇七年）。
- ・ペツォルト夫妻を記念する会編『比叡山に魅せられたドイツ人』（『ペツォルト夫妻を記念する会』、二〇〇八年）。
- ・道元徹心「ブルーノ・ペツォールド氏の仏書コレクションについて」、鈴木淳・マクヴェイ山田久仁子編著『ハーバード燕京図書館の日本古典籍』（八木書店、二〇〇八年）。
- ・マクヴェイ山田久仁子「ハーバード・イエンチン図書館の歴史 および日本語コレクションの特質」（『Intelligence』六、二〇〇五年十一月）。
- ・立正大学史編纂委員会編『立正大学史資料集』一（立正大学学園企画広報室、一九九五年）。
- ・立正大学図書館編『立正大学蔵 溝之口宗隆寺 島田文庫目録』（立正大学図書館、一九七〇年）。

左官職人による自費出版―『安鶴在世記』

- ・石川淳「駿府の安鶴」『諸国畸人伝』（筑摩書房、一九六六年）。
- ・江戸川乱歩「声の恐怖」『悪人志願（江戸川乱歩全集二四）』（光文社、二〇〇五年）。
- ・静岡県編『静岡県史 資料編十（近世二）』（静岡県、一九九三年）。
- ・静岡市役所編『静岡市史 近代史料編』（静岡市、一九六九年）、「御進発御用途金上納名前帳」収録。
- ・白鳥金次郎「安鶴行状記」『静岡名人畸人伝』（静岡名人畸人伝刊行会、一九五七年）。
- ・坪内逍遙「西洋の八人芸」『逍遙選集』十一（春陽堂、一九二七年）。
- ・暉峻康隆・東明雅校注『井原西鶴集 一（新編日本古典文学全集六六）』（小学館、一九九六年）、「好色一代女」収録。
- ・中川芳雄「庶民生活と創作―『安鶴在世記』の意味するもの」、静岡市編『静岡市史 近世』（静岡市、一九七九年）。
- ・中野三敏『和本のすすめ』（岩波書店、二〇一二年）。
- ・服部良男編『名陽見聞図会』（美術文化史研究会、一九八七年）。

- ・花野井有年『辛丑雜記抄（駿河叢書十七）』（志豆波多会、一九三四年）。
- ・樋口保美「八人芸」、『芸能懇話』十七、二〇〇六年・「同（補筆）」（同十八、二〇〇七年）。
- ・三田村鳶魚『江戸百話』（大日社、一九三九年）。
- ・早稲田大学図書館蔵『新累解脫物語』（へ13/00199）、早稲田大学古典総合データベースにて確認。
- ・貸本屋、鳴雁堂の蔵書―『三川日記聞書』

- ・青木美智男『決定版番付集成』（柏書房、二〇〇九年）、「和漢軍書集覽」収録。
- ・猪飼彦纘「於多満幾」、国書刊行会編『史籍雜纂』三（続群書類従完成会、一九七四年）。
- ・岡雅彦「他」編『江戸時代初期出版年表（天正19年〜明暦4年）』（勉誠出版、二〇一一年）。
- ・小此木敏明「貞松文庫と鳴雁堂の蔵書―『今川家集』と『三川日記聞書』の紹介を兼ねて」（『立正大学国語国文』五一、二〇一三年三月）。
- ・古典遺産の会編『戦国軍記事典 天下統一篇』（和泉書院、二〇一二年）。

- ・繁原史「鳴鶴堂蔵書目録と楽山吟社」『山梨稲川と』肖山野録』(麒麟社、二〇〇一年)。
 - ・静岡県編『静岡県史 資料編十五(近世七)』(静岡県、一九九一年)、『続夏引集』収録。
 - ・静岡県立中央図書館蔵『鳴雁堂蔵書目録』(S020/61)、同図書館デジタルライブラリーにて確認。
 - ・柴田光彦編著『大物蔵書目録と研究 本文篇』(青裳堂書店、一九八三年)。
 - ・長友千代治『近世貸本屋の研究』(東京堂出版、一九八二年)。
 - ・長友千代治『江戸時代の図書流通』(仏教大学通信教育部、二〇〇二年)、『和漢軍書小説貸本競』、『和漢西洋之群籍(貸本競)』収録。
- 中国からやってきたカレンダー——『大清嘉慶十九年時憲書』
- ・R・J・スマイス著『通書の世界』(凱風社、一九九八年)。
 - ・内田正男『日本曆日原典』(雄山閣出版、一九七五年)。
 - ・大谷光男「時憲書の曆注について(琉球)——大清乾隆二十七年選日通書(国立国会図書館蔵)」、小林春樹編『東アジアの天文・曆学に関する多角的研究』(大東文化大学東洋研究所、二〇〇一年)。

引用・参考文献

- ・大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東洋学術研究所、一九六七年)。
 - ・小川益男「西曆二〇三三年問題について」、『歴史研究』五八二、二〇一〇年六月。
 - ・川原秀城「中国の曆法——天の科学と天の哲学」、蓮実重彦『他』、『こよみ』(東京大学出版会、一九九九年)。
 - ・国立公文書館蔵『大清嘉慶時憲書』十六冊(291/22)。
 - ・渋川敬也『春海先生実記』(平山諦、一九六四年)。
 - ・趙爾巽等撰『清史稿』七(中華書局、一九七六年)。
 - ・橋本敬造「西法批判のなかの天学——康熙初年の曆獄を中心にして」(『東西学術研究所紀要』四十、二〇〇七年四月)。
 - ・林淳『天文方と陰陽道』(山川出版、二〇〇六年)。
 - ・矢沢利彦「嘉慶十六年の天主教禁圧」(『東洋学報』二七—三、一九四〇年五月)。
 - ・矢沢利彦『西洋人の見た中国皇帝』(東方書店、一九九二年)。
 - ・籾内清『中国の天文曆法(増補改訂)』(平凡社、一九九〇年)。
- *立正大学図書館所蔵の和漢古書については省略した。

『今川家集』 翻刻

本書の第四章でふれた『今川家集』三卷三冊の翻刻を附録として掲載する。

【書誌】

〔所蔵・請求記号〕立正大学図書館（古書資料館）。第一・二冊、911.1581-42/1-2。第三冊、A94/111。

* 第三冊は大正五年（一九一六）に図書館に登録されたが、第一・二冊は、未登録本の中から発見され、二〇一四年に新たに登録された。

〔形態〕袋綴 四つ目綴 写本 半紙本（二三・〇×一六・七糎）

〔紙〕楮紙

〔表紙〕水浅葱色表紙無地。第一・二冊、表紙右肩に貼紙「闕ノ二」。第三冊、右肩に打付朱書「闕ノ六」。

〔外題〕第二冊、書題簽「今川家集 中」。第三冊、左肩打付書「和歌夫木集（朱）／わか集」。

〔内題〕なし

〔写式〕每半丁八行前後。和歌は一行書。

〔書写年〕江戸時代後期か。

〔丁数〕第一冊、墨付三十九丁。第二冊、墨付三十九丁。第三冊、墨付四十三丁。

〔部立〕春・夏・秋・冬・恋・雑（第一冊 春・秋、第二冊 秋・恋、第三冊 恋・雑）。冒頭落丁のためか、「春」の記載なし。

〔歌数〕九五九首（春・一七一、夏・一〇五、秋・二〇〇、冬・九十五、恋・一九九、雑・一八九）。二二二〜二二五番は夏歌に分類されているが冬歌。

〔作者〕五十四人。（一）内は歌数。ただし、氏兼と乗阿は、名前のみで歌の記載がないものが一例ずつある。

宗清（九十八） 実望（七十六） 氏親（六十八） 素純（六十八） 宗長（四十八） 南狂（四十八） 孝成（四十） 重阿（三十九）

承堆（三十二） 氏兼（二十八） 寛阿（二十八） 宗禪（二十八） 承俊（二十七） 安元（二十） 氏秀（十九） 円照（十九）

時茂（十九） 泰貴（十八） 氏広（十七） 光陽（十五） 嵩親（十五） 愛菊丸（十三） 範為（十） 道芬（十）

盛清 (十)	盛助 (十)	珠易 (十)	孝汶 (十)	兼能 (十)	良寿 (九)	亮範 (九)	貞基 (九)
政興 (九)	乘阿 (九)	盛綱 (七)	泰以 (五)	望教 (四)	氏正 (四)	氏延 (四)	氏貞 (三)
氏泰 (三)	氏慶 (三)	光世 (三)	為興 (三)	泰宗 (二)	親能 (二)	信盛 (二)	氏満 (二)
氏端 (二)	兼秀 (二)	安屋 (二)	布袋 (二)	慈駿 (二)	氏治 (二)		

* 二文字目が空白 (四)

〔印記〕各冊に「駿四足町／＼(山形にホ) 白井／府厂金屋 (直径三・〇糶)。第三冊のみ「大正五年八月二十五日／＼貞松蓮永寺寄贈」 「日蓮宗」／大学圖／書課印」。

〔落丁・散逸の指示〕

第一冊の二十九丁表、二二六番歌の前「此処落丁ニ而不分」。

第二冊の二十三丁表、四八六番歌の前「此所落丁有」。

第三冊の四十三丁裏、九五九番歌の後「此すへ散失す」。

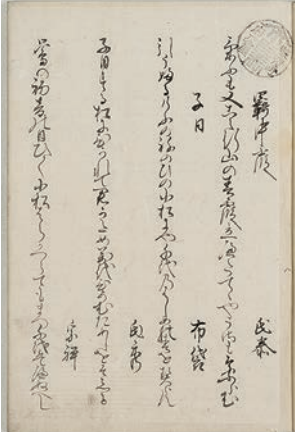
〔その他〕第一冊見返し右上に「歌書部」、第三冊裏見し左下に「ウコノ／＼ウツイ」と墨書。二二二〜二二五番歌に朱で丸印あり。第二冊の二十一丁と二十二丁の間に「奥三人」と書かれた紙片あり。

【凡例】

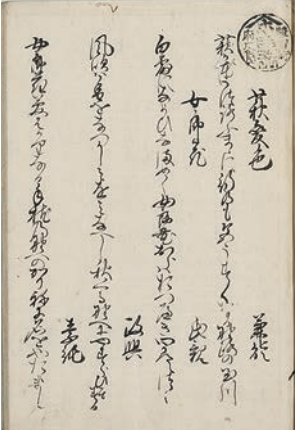
- 一、立正大学図書館 (古書資料館) 所蔵『今川家集』を底本とした。
- 二、仮名遣い・踊り字などは底本のままとしたが、旧字・異体字は基本的に通行の字体に改めた。
- 三、和歌に通し番号を付し、上の句と下の句の間を一字開けた。
- 四、作者名がない箇所や、歌の途中を空白にしている場合などは□で示した。
- 五、丁うつりは「」で示し、表裏はオ・ウと略記した。
- 六、ミセケチによる訂正は「^ままた」のようにし、塗滅や書き損じによる訂正は「^は」のように示した。また、右に傍記された補入の文字は「^{軍カ}」で括り所定の位置に入れた。
- 七、誤写や脱字などが疑われる場合、「^{軍カ}」のように「^{軍カ}」に入れて示した。「^{軍カ}」のないルビや注記は原文のままである。

【各冊の表紙と二丁表】

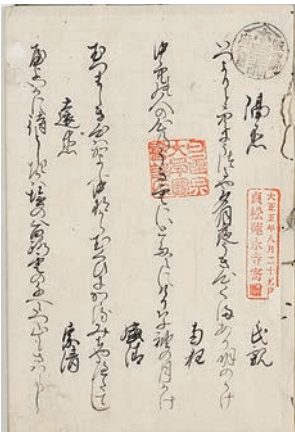
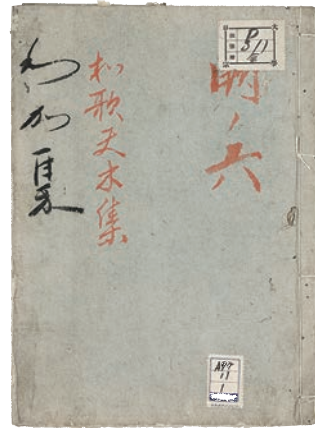
第一冊



第二冊



第三冊



【翻刻】

〔第一冊〕

- 1 けふも又こえ行山の春霞 立へたて、やうさもそふらむ
 轡中霞 氏泰
 子日 布袋
- 2 引そふるけふのねのひの小松にや 千代のはしめの春を契らん
 氏秀
- 3 子日する松にひかれて君かため 万代ひかむためしをそしる
 宗禪
- 4 鶯の初音の日ひく小松はら かへらてもまつ千代はへぬへし」1オ
 氏兼
- 5 おもふとちいさうち出むあらましの
 □□
- 6 はつ春のけふひくよりや誰もみな 松ともなる千代をへぬへき
 若菜 氏治
- 7 雪もまたふる葉をすて、つむからに 手にたまらぬや若菜成らん
 兼能
- 8 君かためゆくすとをくもとめきて 千とせふる野の若菜をそつむ」1ウ
 若菜知時 宗長
- 9 春たゝはあすからはとや野へことに けふつむわかなおひはしめけむ
 橋若菜 氏慶
- 10 いそのかみふるきためしの君か代に 立かへる春とつむ若菜かな
 原若菜 円照
- 11 から衣すそのゝ原のわかなをは 摘もつまぬもむつまじきかな

- 12 春浅みこほる沢辺はもえかねて 雪をいつれとつむ若菜かな」2オ
 沢若菜 盛清
- 13 いつのまに若なやおひて小山田の 雪まに人のつまぬ日もなき
 田若菜 慈駿
- 14 面影は露けき秋の花そのに 今朝やうち出若菜つむらん
 園若菜 承堆
- 15 いつのまにおふるわかなそ昨日まで 山風さむみこほる沢水
 水辺若菜 重阿
- 16 春日野にけふたち出て雪まそと 若菜つむてふ袖の寒けさ」2ウ
 谷残雪 兼秀
- 17 朝なく霞にしるく立春を よそにみ谷の雪のさむけさ
 松間残雪 道芬
- 18 消残るとを山もとの色さえて 猶つれなしやまつの下雪
 望教
- 19 くる春のやふしわかねは呉竹の 垣ねのうちも雪のむらきえ
 竹畔残雪 孝成
- 20 先さくを我かきねとや梅の花 ひとへふたへの雪をのこして」3オ
 庭残雪 氏正
- 21 春日さす野はわか草の色なれと またきへのこる庭のしら雪
 待鶯 盛綱
- 22 山かつのかきねの雪はきえそめぬ 霞にいてよ谷のうくひす
 聞鶯 泰以
- 23 今朝ははやたかならはしに鶯の 時しりそめて音には立らん

- 24 故郷鶯 盛助
ふる里の軒はの梅やうくひすの 忘ぬ宿と又きなくらむ」3ウ
河辺鶯 範為
- 25 谷川にかけをうつせはもろこゑに 鳴や木すゑの春の鶯
鳥鶯 光世
- 26 鶯のこゑにしられて河島の 水のなかに青柳のかけ
遠鶯 安元
- 27 朝霞よその梢にうくひすの うつるか声のかすかにそなる
鶯馴 信盛
- 28 おくふかきみ谷かくれも鶯や かれなて梅の花したふらん」4オ
鶯為友 親能
- 29 霞より木つたひきある鶯の 声を友にや春をくらさむ
閑中鶯 泰宗
- 30 世のほかとおもふしるしかおく山を 人は音せて只鳥そとふ
鶯稀 時茂
- 31 里なれぬはつねに今は立かへり 又めつらしき野への鶯
初梅 光陽
- 32 待ころは今朝の人まに咲せめし 色よりもこぎ梅の夕はえ」4ウ
梅花 為興
- 33 にほひ来て夢おとろかす梅か香は たかすむ里の風の行ゑそ
栽梅 安星
- 34 うへて見む色さへ香さへ梅からや 春の花にはいまた咲らむ
雪中梅 珠易
- 35 春とたにきえあへぬ雪に玉すたれ まきの戸ほそ梅か香そする

- 36 月前梅 孝汝
梅の花たちえさたかに匂はすは 色をや月の影にまかへむ」5オ
梅盛 実望
- 37 さく梅をまつ吹とりて難波かた 波ちにとをくにほふうらかせ
見梅 宗清
- 38 宿守よ折なとかめそ花もわか ゆるし色なる梅の立枝を
翫梅 素純
- 39 あかてのみ春はへにけり梅の花 にほひにあかし色にくらして
折梅 氏親
- 40 おりやるもおもひのほかむめの花 かすむやとはぬ宿の立枝と」5ウ
寢覚梅 南狂
- 41 うたゝねの夢はさそひて吹風の 枕に残る夜半の梅か香
梅薫風 宗長
- 42 いかたわきて身にもしめまし梅花 風の心みちらすにほひを
梅移袖 孝成
- 43 白妙に咲やこの花難波めの 春の衣ににほふうら風
梅留客 重阿
- 44 よしやたゝかへる人をは梅花 ふかき色香にまかせたらなむ」6オ
簷梅 承俊
- 45 春雨の軒の雫のたえまにも もりくる梅や猶にほふらむ
堤柳 氏親
- 46 水もれぬ人めつゝみにうちけふり 春をあらはす青柳の糸
江柳 時茂
- 47 あさみとり江にうつりつゝよる波の しら糸むすふ青柳のかけ

水郷柳

48 みよし野やむつ田のよとの青柳のなひく 日こにぎゆるしら雪」6ウ

村柳

49 ゆく水のつゝみのうへのさし柳 誰かひとむらの春のさかひそ

門柳

50 年へてもしろきすちなき青柳の かみや老せぬ門のしる人

故柳

51 むす苔のみとりゆ^をかるや道のへに なかはくち木の青柳のいと

春雨

52 春の草のみとりの里やあさなく 日をふる雨に色をそふらん」7オ

53 をそくとき程こそはあれ打そゝき もらさぬ木のめ春の雨哉

54 今日に明て昨日の暮る榊姫の くり返す糸の長雨の空

55 をりかくる霞の衣はつれてや いとにみたるゝ春雨の空

56 春の雨のあしのいとなきけふことに みとり跡ある雪のした草」7ウ

57 をとほそき雨のはれまは霞ぬる日影になるもわかぬ軒哉

58 花にのみかそいろならずあまねくや 四方の野山も木のめはる雨

59 露もなきこほれもやらず吹むすふ 風さへよわき野への若草

宗長

南狂

素純

重阿

実望

宗長

宗清

氏親

素純

孝成

南狂

氏親

野径春草

60 秋は千ゝにあつかひ草の花野をも ひとつ緑に春は分けり」8オ

磯春草

61 冬かれも春をさそひてよる浪の みとりにかへる磯の若草

岸春草

62 かつとくるきしの氷の下もえに よしあしわかぬ草のひとむら

沼春草

63 春はまたあさかの沼のうす水 かつ見るはかり色にもえつゝ

早蕨

64 むらゝの松をけふりに山陰や 下もえわたる春のさわらひ」8ウ

65 山人のやすみかてらに折よくも もえいつる道の初わらひ哉

66 よちのほりたれ折てそといへはえに 岩ねつたひの嶺の早蕨

67 山かつのをものに柴に折はへて 家つとおもふはつわらひ哉

68 折ほともまたもえ出ぬさわらひや ひろふ妻木の障り成らん」9オ

69 うらわかみ草にあさるとつなひきて 手馴の駒もたゝにやはある

70 若草をかひのくる駒名のみして あを毛にみゆる春のまきたし

71 雪をふくこしの山風空にさえて 花ちる嶺に駒いはふ也」9ウ

宗清

承俊

寛阿

宗禪

実望

素純

宗清

氏兼

承堆

氏親

実望

宗禪

花

- 72 たのめつゝ神にそかくる春ことに ちらて千代へん花のしらゆふ
承俊 宗清
- 73 開しよりいける仏の御国そと 思ふ外には花やなからむ
実望
- 74 つみにさてあかてや花にはなれまし 春のかきりは見てくらせとも
南狂
- 75 桜花千もとにさくを待えたる 春とや神もさなうれしき」10才
嵩親
- 76 初瀬山ことしいかなる道かへて また人しれぬ花をたをらむ
氏秀
- 77 咲花のおなし色香をいくしほも そむるや人の心なるらむ
良寿
- 78 物いはぬ花にやはある咲しより 色香は代々のことのはにして
兼能
- 79 朝なくさきそふまゝによしの山 花より外は雲もましらす」10ウ
珠易
- 80 桜花咲てまかは、芳野山 雲をかきりに分つゝや見む
泰貴
- 81 分そめしたかしるへよりみよしの、 花に跡あるみちのしは草
素純
- 82 花見ても花をぞ思ふやまさくら 一本のかけに何くらしけん
氏親
- 83 秋の夜の千夜をかきねてかきしおる よる日のいくか花やあかれん」11才

- 84 花さかりなひく霞のたえまより こほれてにほふ山風ぞ吹
貞基 氏広
- 85 をしなへて花のさかりはよしの山 峰にもおにもかゝるしら雲
乗阿
- 86 高砂のおへの桜さかりかも 舟まてにほふ袖の追風
愛菊丸
- 87 春雨に色もにほひも浅からぬ 花のしづくに身をやゝつさん」11ウ
宗清
- 88 形こそやつれよつともはふらしの 心の花は木ゝも知らむ
承堆
- 89 なへて世はおるもおらぬも花さかり かさしにもるゝ色もかまなし
宗長
- 90 百千鳥さえつる春に桜花 年にふりせず匂ふいろかな
盛助
- 91 山姫の花のたもとやかさぬらん わきて色こき峰のしら雲」12才
安元
- 92 みやまへや榎のかたへの桜花 にほひはくもる色としもなく
盛清
- 93 けふは暮つあすとはまたぬ老か身の たちざりかたき花の下かけ
円照
- 94 色香より外に心のなかりせは 花にうき世や又やすくみん
重阿
- 95 ひとともに暮しやせましをちこちの 花に心のちはいかにと」12ウ

96 うつせみの世にうつり来て山桜 花やさかりの□□すくらん
氏兼

97 春はさていつちゆかむとあしひきの
とを山さくらさかり過らん
道芬

98 花にあかぬなけきのもとかさきしより ちるまてとたちくらす心は
時茂 覚阿

99 あかす見る心をたねに咲花の ちるをも人になとかまかせぬ」13才
孝成

100 桜花我身ひとつにあらねとも ちりなは千々に物思ふとか
範為

101 花さそふ風はつらしとおもへとも ちらてもあたらさくら成へし
光陽 帰雁

102 つはさのみ雲にみたれて帰るさの みちとやいそく天津かりかね
実望 深夜隔雁

103 別ちよたれにしのひてうは玉の 夜深き雲を分るかりかね」13才
宗清 帰雁連雲

104 さすか共姿はみえてあま雲に つれて 雁のよそに別る、
孝汶 帰雁消霞

105 いかはかりいそく道とてかへる雁 みるく空にかすみはつらん
南狂 帰雁迷

106 行ちかひきぬるつはめにまかふまて 見をくる影や天つ雁
宗長 遠近帰雁

107 名残たにぬにもか、らす霞ゆく ひとつつもとや急雁金」14才

108 雁金にかへるさならぬ旅人や をくれて渡る峰のかけはし
素純 橋辺帰雁

109 浅みとりかすむ浦わのさ、波や 一つらかへるはるのかり金
承俊 湖帰雁

110 浪なれし名残やさすか浜ひさし ひさしく残るはるのかり金
宗禪 承堆 帰雁不駐

111 駒とめてしたふかひなくひのくまや 川波はやく雁ぞ過行」14才
宗清 三月三日

112 けふもとて青をふめる路のへに なれも時めく桃のくれなる
実望 桃花

113 ことしまつさくひめも、の花かつら 三千代の春やかけてにほはん
覚阿

114 植し代は花やしる人その、桃 さきそふ春のいくめぐりとも
南狂

115 春ことに花をこそみめ三千とせに 咲てふ桃も一木ならずは」15才
氏親 春月

116 霞にしひき残されてかたふくや たか弓はりの山のはの月
氏兼

117 春とてや霞の海にこきて行 月のみふねのほのか成らん
実望

118 おほろなることはりしるき春の夜は 月にかすみのとかやはれ行
宗清

119 ふけざりし我世の春にかすますは 空おほれとや月をしもみん」15才

- 120 月をたにめてしいまはの身のとかに 春のならひもかすむ夜の空
素純 宗長
- 121 春の夜は山のはいて、深行も またる、月のいさよひのそら
重阿
- 122 かすむこそ春の光よくもれた、 雨しふらすは月のよなく
安元
- 123 空よりもいく重分きて山のはの 霞のそこに残る月かけ」16才
孝成
- 124 ふけ渡る風に見れば中空の おほろ月夜は面影もなし
宗禪
- 125 春の夜は花のひかりにつゝまれて 木のまの月そいとゝともしき
春曙 宗清
- 126 世にこえむ詞の波の明ほのや 花と月との末のまつ山
素純
- 127 花の香を空なる風のとつてならて 霞のうちの春の曙」16ウ
氏親
- 128 わきてみむ花うくひすの春のうち^も 色か香に明ほの、空
実望
- 129 あけほのや霞の袖にたちかへて のをれわかるゝ峰のよこ雲
承堆
- 130 春の夜の花よりあけて山のはの 日かけもまたぬしのゝめのそら
宗清
- 131 落瀧つ末野ほのかにみえてけり こや水引のいとゆふのかけ」17才
遊糸

- 132 子を思ふ妻もこもるやきゝすなく かすかの野へはけふはなやきそ
春雉思子 孝成
- 133 のとかにもあさるきゝすの声すなり 沢辺ひとつにかすむ山もと
重阿 田雲雀
- 134 打かへすたみの心の日まをなみ あかるひはりそ床し定めぬ
雲雀揚 寛阿
- 135 吹まよふ塵かとはかり風のうへに 行ゑ定めぬ夕雲雀哉」17ウ
宗清 雲雀落
- 136 床しめてひはりそおつるあら小田や あらすきのこすけふの芝生に
氏親 喚子鳥 実望
- 137 おほつかなをのかはかひの山かけに たれよふこ鳥ねにはたつらん
素純
- 138 み舟山たか別路にこかれてか 朝きりかくれよふこ鳥なく
南狂
- 139 かくれすむ心もしらて柴の戸に 誰よふこ鳥山ふかき声」18才
苗代 宗清
- 140 わつかなる苗代垣もこん秋の 心の種や千ゝに籠らむ
宗長
- 141 小山田のほそ水つたふ苗代に つくるほとゝみゆる春かな
孝成
- 142 なるこひき鳥をふこゑそきこゆなる 岡部のわき田種やまきけん
重阿
- 143 むさし野ゝ草のゆかりやとれならん あしたの露に葦さく色」18ウ
朝葦

- 144 野亭童 宗清
見やいかに野守か庭のつほ董 花の心はつみしらすとも
籬董 氏兼
- 145 むらさぎの色に露さへみたれあひ 庭のまかきの董咲なり
款冬 素純
- 146 行春のなこりやひとりいへはえに いはしとさける山吹の花
氏親
- 147 よし野川春は浪こすしからみや かけてうらみむ^キの山ふき」19才
宗長
- 148 もろともにこへけむ人のこぬのみを 思ふことなる山吹の色
南狂
- 149 山吹をおらてすつるやくちなしの いはぬはいふにまさるならまし
実望
- 150 春深く咲山吹のせをはやみ 浪の花さへ色にたつなり
橘杜若 宗清
- 151 八橋にかけし心を一はなの 色に隔てぬ杜若かな」19ウ
池杜若 孝成
- 152 池水のそこにも見えて咲花の 影はへたてぬかきつはたかな
野杜若 氏親
- 153 いほりふくをさゝもましる花ながら 野守のそのゝ杜若哉
山躑躅 重阿
- 154 春も来てたち帰るとや岩つゝし 錦おりはへさける山道
浦躑躅 宗清
- 155 三保の浦やよりくる浪の白つゝし をのれ折ても人に見すらん」20才

- 156 巖躑躅 素純
山姫や春はいまはたくれなみの あか裳かけする岩つゝし哉
藤繞庵 実望
- 157 花を色におりかこふ藤のした庵は たかゆかりなる宿とかもみん
社頭藤 南狂
- 158 ちはやふる神のとりゐにかすか野ゝ わかむらさきや咲る藤かみ
古寺藤 宗長
- 159 春ふかき寺井の水を結ふ手の 岩かきしつく藤かほるなり」20ウ
藤埋松 宗清
- 160 梢まで藤咲ぬらし池水に 波の底なる松風のごゑ
泊藤 安元
- 161 舟とむる入江の山に藤さけは 色ある波をよする松風
暮春 円照
- 162 もゝ千鳥さえつる花の山桜 あらぬわかれに春やわかれん
暮春風 氏親
- 163 行春や風をかたみにおもひいては ちるかけにてそ花も残らん」21才
暮春雲 素純
- 164 かすむともあすはたのまし今朝までや ことしの春の峰のよこ雲
暮春水 氏秀
- 165 かそふれは日数なかれて水無瀬川 山もと遠く春や行らん
山家暮春 氏広
- 166 又友もなき山里はうくひすの なくねにたてゝ春やおしまむ
坂暮春 □□
- 167 あふ坂や花に青葉のさねかつら はふ木あまたにくるゝ春哉」21ウ

- 168 から崎の松も名残の夕かすみ浪路わけてやはるかへるらん
 愛菊丸
 三月尽 承俊
- 169 春霞はれ行まゝに三保の松 けふるそあすの名残なるへき
 惜三月盡 宗清
- 170 花鳥の色音もわきて身にしむや あすよりさきの春の別路
 三月盡 実望
- 171 鳥か鳴あつまちこえて行春そ せきたにとめよあしからの関「22才
 夏哥百首 氏親
- 172 けふよりはさしてそ祈る夏衣 をるしつはたの神の榊に
 宗清
- 173 今日君の給ふ扇や軽からぬ めくみを四方に風も伝へん
 更衣 実望
- 174 もろこしの此里人はてをりして わかからきぬと今朝やかふらん
 承俊
- 175 たちかへてうつろふ花の袖よりも うすきそ人の心成ける「22ウ
 余花 南狂
- 176 たちかふる夏の衣のにほひにと うすくあを葉に残る花哉
 宗長
- 177 そこはか見えぬ青葉をふけはちる 風をも花にまつ世ならずや
 新樹 素純
- 178 雪おれの木末のひまも夏山や うつみかへしてしましける覧

- 179 茂りゆく木すゑにまじる若葉にも 残る匂ひや桜成覧「23才
 卯花 孝成
- 180 去年の雪の色を移してうつきかき さゆるや花のひかりなるらん
 卯花 実望
- 181 時しらぬ雪の山かと卯花の かのこまたらにさくまかき哉
 宗清 覚阿
- 182 卯花を月にかへてやゆふやみの ひかりにみかくたま川の里
 宗禪
- 183 見るもおし烟へたつる山かつの かきほにあまるやへの卯花「23ウ
 重阿
- 184 山里はかきねもわかすつもりこし 雪かとはかり峰の卯花
 葵 乗阿
- 185 あふひ草引むすひつゝ朝露に ぬれくしたふいにしへの跡
 郭公 氏親
- 186 郭公こやとたのめは夏かりの あしのやへふき待夜ひまなし
 盛助
- 187 時鳥まつ夜をこめて見る夢の さむる枕も猶そつれなき「24才
 盛清
- 188 有明のつれなき空に郭公 ならはて名の一声も哉
 宗清
- 189 思ひねになれて聞夜かうつゝさへ 夢路にかへるほとゝきす哉
 泰貴
- 190 郭公をのか(さ)月をまつとせは またるゝたれかうらみさらまし

- 191 時鳥思ふによらはたか里の こそゑのうへにまたきゝなかむ」24ウ
珠秀 範為
- 192 郭公まつ夜は明てしのゝめの 雲のはつかにもらすひと声
良寿
- 193 つれなきの夜はかさなりて■明の 月は山のはやま郭公
光陽
- 194 一声はいつれの空ぞ時鳥 たそかれときに鳴すてゝ行
実望
- 195 ひとこゑはきくやよるらむ時鳥 なれも朝たつあへの市人」25オ
道芬
- 196 郭公それかあらぬかとはかりの たゝ一声に明ほのゝ空
承堆
- 197 なきさして只一声のうちになさへ こゝろつくしのほとゝきす哉
高親
- 198 みしか夜にまゝとむむこの時鳥 聞も夢かと驚れけり
氏広
- 199 時鳥なきつるかたにきゝをくる 心はさらになちもかへらす」25ウ
素純
- 200 あやにくに音やなきそへん時鳥 別をささふ鳥になきはや
氏兼
- 201 此里は初音も聞す時鳥 なきふるしてむ方もなつかし
政興
- 202 つれもなき初音なりしを時鳥 誰そのもりに聞ふるす覽

- 203 山高み今朝越くれば郭公 ふもとの月の名残かほなる」26オ
氏秀 兼能
- 204 あはれとも思ふ心や郭公 我ひとりねのねさめとふらん
安元
- 205 此ころは里なれにけり時鳥 はつねにかへる山のおくとや
橘 宗清
- 206 みな山川く風ふくや筑波山 このもかのにも匂ふたち花
貞基
- 207 うたゝねの枕すゝしく夢さめて 花立花のかほる朝あけ」26ウ
亮範
- 208 五月やみ道もまかはす橘の にほひやしるへ人のとひくる
橘 実望
- 209 たちいつるそともあふちしるしおひて 木陰すゝしき花の夕風
牡丹 孝成
- 210 春過て花なき庭に咲いつる 色も匂ひもふかみ草かな
五月五日 重阿
- 211 おなしくはけふのあやめのなかきねに きゝそへまほし山時鳥」27オ
菖蒲 承俊
- 212 今日袖に伊香保の沼の朝霧の 玉ぬきかくるあやめをそひく
南狂
- 213 露にぬれかりにしつか袖もさそ けふはかほれるあやめ成らん
盛綱
- 214 板ひさし久しき世より年くくの けふのためしにふくあやめ哉

- 215 いつしかも今日はひかれてかくれぬの 承堆
 かくれなき名のおやめ草哉」27ウ
 宗長
- 216 誰もみなけふなかせねを引かくる ことの葉さへそあやめわかれぬ
 早苗 宗清
- 217 暮深みおりたつ田子のあし玉も 手玉もゆらに取早苗かな
 孝成
- 218 またきより秋のたのみもしなかれや なひくさなへはむらなへもなし
 円照
- 219 門田よりとをきさなへもとりくりに 人行かへる里の中道」28オ
 五月雨 実望
- 220 さみたれはふしのしは河しはし猶 わたりやなみの春まさるなり
 宗清
- 221 夕霜のいたくもをける蘆のはに 嵐吹そふをとのさむけさ
 光陽
- 222 さえまさる汀のあしの朝なく 霜に残れる色そさき
 水 実望
- 223 ことゝはむ鳥もいぬめりいほさきや すみた河原の氷るこの頃」28ウ
 氏親
- 224 今朝はまたあし辺のを舟さす棹も さはるほとなき水のうすらひ
 貞基
- 225 岩かねの笈のなかれたえくくに 氷をくゝる下水の音
 乗阿
-
- 226 はや幾日降もはてなし武蔵野や 萱□末葉の五月雨の空」29オ
 宗清
 愛菊丸
- 227 ふりつゝく雨は五月のならひそと つくるや雲になく時鳥
 宗長
- 228 さ月闇あけぬ暮ぬと草の庵 あまゝもをかす窓を打声
 孝成
- 229 河かみのきしやくつれし五月雨は あらぬところのふし柳哉
 道芬
- 230 五月雨の日をふる頃のつれくりに たれとしもなくつてそ」^{不知}29ウ
 時茂
- 231 水こもりにする葉もなりて川そひの 柳木ふかき五月^{不知}
 良寿
- 232 日数ふるならひとをしる五月雨や 心のうちの晴まなるらむ
 素純
- 233 白妙にはれ行雲の浪そこす けふ五月雨や末のまつ山
 氏親
- 234 うき草もみかきにこえて引残す もくつにとまる五月雨の跡」30オ
 水鶏 南狂
- 235 門たゝく色いつはりてたそかれに たかためつらきくみな成覧
 氏親
- 236 たゝくともみ草にしなき律して させる門にはあらし水鶏は
 宗清
- 237 かゝり火はしめりう川も桂人や 心のそこに鮎ひかるらん
 宗清

此処落丁三而不分

- 238 あけ行や宇治の河せをさしかへる う舟のさほの短夜の空」30ウ
盛清
照射 南狂
- 239 ともしすと峰にさつおや弓張の 月のいるさを先待ぬらん
承俊
蚊遣火
- 240 賤士のをや見るもつたなきまとる哉 蚊火をくほとどの門すゝみして
氏兼
夏草
- 241 とはるへき人のたよりは夏草の しけれる道といかゝいとむ
宗禪
- 242 玉ほこの行てにむすふ夏十や わけまよふ野のしるへなるらん」31オ
重阿
珠易
- 243 かりそめもむすひをかすはたれわけん 野へも深山の道の夏草
孝文
- 244 いふせしやいかにありへむ人ことは けに夏草のしけき世の中
素純
- 245 夏草のまかきの萩に日くるれば おとろくはかり秋風そふく
瞿麦
- 246 いつかたにわきてか見まし花の色は からくれなゐのやまとなてしこ」31ウ
宗長
- 247 うすくこくさくやなてしこうへし時 からやまとゝはわかさらめとも
宗清
- 248 草枕いも恋しらになてしこの 床なつかしくく野原かな
南狂
- 249 神かきにつゝける里の軒はまて しらゆふかほをかくるころかな
夕顔

- 250 池ひろみはずの浮葉のひまをなみ 露をきわたす水のうへ哉」32オ
氏親
蓮 嵩親
- 251 池水にかけさす月は明はてゝ はちすの露そ光そひ行
寛阿
夕立
- 252 吹すさむ風にまかせて夕立の 雲の行多の空や涼しき
亮範
- 253 水上のふるほと見えて山川に つなくいかたをなかつ夕立
氏秀
- 254 夕立の名残の露の月の色は たゝ一時の秋の夜の元」32ウ
実望
夏月
- 255 山のはにいさよふ程も夏の空の ふくるはあたら夜半の月影
泰貴
- 256 いてゝくる山のあなたは夏の夜も 月にやほと有て見る覧
氏広
- 257 夕立の雲のまきれにすみのほる 月はなか空に夜や明ぬらん
承推
- 258 ゆふ霜の真砂にをける程もなく 消行空や夏の夜の月」33オ
安元
- 259 あけやすきならひなりとも天の戸に つれなて残れ夏の夜の月
宗清
蝉
- 260 一方に鳴ぬときは木々の枝も ゆずるはかりの蝉の声く
寛阿
- 261 蝉のこゑこ高き森のかけにきて あつさひかりの猶まさる哉

- 262 音にたてぬほたるやなにの忍草 素純
しけきお花かもとにこかれて」 33ウ
虫 宗禪
- 263 忍ぶ草思ひもらさぬした水に もゆる蛍のかけむせひつゝ
円照
- 264 窓に在るほたるや心なからまし ねむりにむかふ身のをこたりを
重阿
- 265 夏の夜もいかにひさしと明るまを 急く蛍のおもひ成らん
望教
- 266 涼しやと夕浪かくる河きしに なれもみたれてとふ蛍かな」 34才
時茂
- 267 夏なれやもにすむ虫のわれからと もゆる蛍の蘆へ行見ゆ
光陽
- 268 難波江のあしの末葉をこす波に きえず蛍のもへて見ゆ覧
水室 宗長
- 269 寒くらしけふもわかしをたれゆきて つけの、水室はこひとく覧
泉 宗清
- 270 夕すゝみ散かふ波の玉琴や 水の調に秋を引らむ」 34ウ
泰貴
- 271 夏衣なれていつみの水きよみ こけのむしらはたちもやられす
納涼 素純
- 272 岩つたふしつくや下にさえぬらん ふむこけこほる夏のみ山路
氏兼
- 273 しるしらす涼しきかたとむれきつゝ、 ゆふかけまちてかへる木のもと

- 274 夕浪やあそひなひく柳かけ いともすゝしくかよふ秋かせ」 35才
晩夏 実望
- 275 すゝしくそゆふかせならすあしつゝの ひとへはかりを秋のこなたは
六月祓 氏親 政興
- 276 西川やなかるゝ水に袖ひちて けふみな月の祓しるしも」 35ウ
- 秋 立秋 素純
- 277 なかはらや今年も夢のさめ残る うつゝよいか秋の初風
実望
- 278 夏引の手ひきの糸のいと薄 穂にあらはれて秋やくるらん
宗清
- 279 秋はけさくるやこしやのいさよひに いてそよ一葉ひくらしの声
早秋風 氏親
- 280 吹もあへす風より今朝は立田山 夜半にや越て秋の待けん」 36才
早秋露 承堆
- 281 いつしかと山田も秋のほと見えて けさはいなはにをる白露
早秋朝 宗長
- 282 いつのまに秋くる道そさゝ分る 朝けの露のをきあまるまで
遠郷早秋 南狂
- 283 秋そ又それともなきにかきりなく なかめやらるゝ里のむらくゝ
閑居早秋 覚阿
- 284 尋ねこむ人はいまはたよもきふの やとり忘れぬ秋の初風」 36ウ

- 285 みつ塩に秋をうかへて吹そむる 風のたよりをきくの高浜 氏兼
 早秋扇 孝成
- 286 物ことにうつる心の秋風は ならすたものあふきのみかは 宗清
 待七夕
- 287 あひ見むはいつやす川と七夕や 年のわたりをよそに見るらん 素純
 七夕舟
- 288 天川君わたしてやよひのまに 月のみ舟はこきかへるらん」37才 宗禪
 七夕衣
- 289 をり姫のころもへにける恨みより きて立帰る天の川波 承堆
 七夕扇
- 290 風なからけふやかさまし七夕の あふ瀬すゝしきあふき也 実望
 七夕枕
- 291 うらみのみつもる枕のちりもけふ はらひやなかつ天の川波 氏親
 七夕糸
- 292 袖かはしふししけれとしけ糸や 星のあふ夜に懸てたむけん」37ウ 重阿
 七夕別
- 293 浅からぬ契なれともきぬくの 袖にやくゆるあまの川なみ 氏広
 海辺萩
- 294 さしよするさほのしつくも夕露も おきの葉分の天の釣舟 氏秀
 簷萩
- 295 秋きぬとしらむ心をさき立て 軒のおきにわたる夕風 宗清
 荻似人来
- 296 鶯の声きなれし山里に 秋は人くとおきのゆふかせ」38才 宗清

- 297 いまさらの秋やきてふくきくやわれ 誰にとはまし萩の上風 素純
 独聞萩 南狂
- 298 萩の音にこぬ人かこつ夕暮も 露のこほるゝ老の袖かな 円照
 萩破夢
- 299 ひたすらにおきの声とも思はれず なにさまたけし夢のなかはそ 安元
 萩
- 300 移り行秋を残して花はたゝ 下葉にかゝる秋の朝露」38ウ 実望
 初萩
- 301 夕露にひもときかけてこ萩はら 人まちかほの花の色かな 嵩親
 栽萩
- 302 庭のおもにうへしこ萩のいつよりか 葉末もたはに露の置らん 時茂
 野萩
- 303 をきまよふ露はうへ野の真萩原 かくてや見ましなりや帰らん 泰貴
 岡萩
- 304 咲まじる岡のかやはら萩か枝の 色もひとつに露そみたるゝ」39才 宗清
 朝萩
- 305 朝露にぬるともえやはさしすきの くるすの小野は真萩咲めり 愛菊丸
 夕萩
- 306 あき秋の夕の露に色こきを おもへはちるもほとはあらしな 宗長
 愛萩
- 307 暮は又家も下葉の露をゝもみ もとあらは秋とゝもにかもねん 孝成
 分萩
- 308 萩か花分ゆく袖はむらさきの ねすりの衣露にぬれつゝ」39ウ 孝成

〔第二冊〕

- 萩変色 兼能
 309 萩か花うつろふまゝに行水も 色うすくなる野路の玉川
 女郎花 氏親
 310 白露になよひなまめく女郎花 おらはおつへき心見えつゝ
 政興
 311 風吹は香をなつかしみをみなへし 秋くる野へにやすらひそする
 素純
 312 女郎花夢はかりなる手枕の 野へのかりねに名をやたゝまし」1才
 範為
 313 秋の野に露わけ衣きても猶 おる袖しほるをみなへし哉
 盛綱
 314 たれもこの思ひかけたる女郎花 秋風にのみなとなひくらん
 蘭 実望
 315 野へことに草のいとすちよりかけて 誰かためにぬふ藤はかまそも
 承俊
 316 めもはるにさくあたし野の藤はかま 花紫のゆかりをやしる」1ウ
 南狂
 317 藤はかまふくや秋風ほころひぬ 花さへにほふ野辺の草かな
 薄村ゝ 盛助
 318 とくをそくほに出そむる花すゝき 色をわきてそ露も置ぬる
 行路薄 重阿
 319 分ゆけは猶我袖は薄より すゝろにぬれて露そみたるゝ

- 薄似袖 寛阿
 320 ひきわかれいかにわすれむ花薄 まねくと見えし袖の名残を」2才
 薄為牆 乗阿
 321 すみなれし野守か庵はをのつから 薄をしなみかきほとそなす
 古砌薄 宗禅
 322 植置しみきりの薄いつふりて 野はらをうつす秋のゆふ風
 薄散 宗清
 323 こさまよふ入江のお花ちりぬらし たゝぬ浪こす真野の浦ちね
 荻萱 良寿
 324 故郷はそことも誰かしら露に ひとりや月のやとりかるかや」2ウ
 貞基
 325 行暮て草の枕をかるかやの 葉末にかゝる露よなみたよ
 承堆
 326 ちらさしな哀そふかさまゝに 秋もやとりをかるかやの露
 路浅茅 氏兼
 327 心あらはさひしき宿をとひこかし あさちか末もみちは見ゆらん
 槿末開 愛菊丸
 328 あたし世の色をもよほす朝かほの 葉に置露や花にさき立」3才
 槿不待夕 南狂
 329 夕露にうつろふとても見るほとひ ひさしからめや朝顔の花
 隣槿 珠易
 330 中垣も花はへたてぬ心とや うらおもてなくさけるあさ顔
 露浅 素純
 331 秋は又夏野のまゝにたか草の 末葉一むら結ふ露かな

- 332 露深 宗清
御笠をいふことくきにをきそふや 雨よりけぬる宮城野、露」3ウ
露如玉 氏親
- 333 をろかなるたか涙とか玉はなす 草のたもとの秋の夕露
露霑袂 宗長
- 334 我ながら草の袂と思ふまで 心よりをく秋のゆふ露
露脆 実望
- 335 秋風に草葉をまろみをく露の 色や名にかるあたし野、原
尋虫 孝成
- 336 秋の野のさかりになればふりはへて 尋ゆくく鈴虫のこゑ」4オ
虫声滋 泰貴
- 337 聞よりはかなたこなたと夜やふけむ をの山くの野への虫の音
庭虫 道芬
- 338 庭のおもをいまはた宿と鈴虫の 枕にならす秋の夜なくく
藁虫 孝汶
- 339 思ひある虫の声かな秋の野は お花かもとにあらぬ草はも
夕虫 氏親
- 340 我かともいさやいつれをとふらはん おなし夕に松虫の声」4ウ
旅宿虫 宗清
- 341 草枕八声の後もをのれまた かれなてなくやすけの鶏
虫近枕 盛清
- 342 露結ふ庭のよもきふふくる夜に 枕へたてぬ虫の声哉
深更虫 実望
- 343 ふけはて、人は音せぬ草の戸に 誰を松虫ひとり鳴らん

- 344 さまくの虫の音きけは袂まで やとして結ふ露の白玉」5オ
虫怨 光陽
- 345 よひのまは枕とふかと松虫の こゑまとはせる野辺の秋風
虫声迷 円照
- 346 さ夜更て手枕ちかくなく鹿の 声にいくたひ夢覚ぬ覽
鹿 氏貞
- 347 こゑの色は花もあさしときけとてや 野へに妻待鹿の鳴くらん
鹿交草花 素純
- 348 小倉山嶺の紅葉に立ならし いくたひ鹿のゆき帰るらん」5ウ
嶺鹿 重阿
- 349 谷深み紅葉かつちり鳴鹿の こゑも色なる秋の夕かせ
谷鹿 氏延
- 350 谷深み紅葉かつちり鳴鹿の こゑも色なる秋の夕かせ
柚木にはあらぬを鹿もをのか妻に 山立ならし心ひくらん
柚鹿 宗清
- 351 山高み木しげき陰になく鹿の 涙や秋の露とをくらん
林鹿 望教
- 352 いつはとは思ひわかすやさをしかの なくぬときはのもりて聞ゆる」6オ
杜鹿 氏正
- 353 妻こふところゝ鹿の小山田に むせふかりほのけふりくらへや
田家鹿 氏親
- 354 朝日山ふもとに出てなく鹿の 跡をへたつる宇治の川きり
鹿隠霧 嵩親
- 355 吹まよふ枕の上の秋かせに 山のはわかぬさをしかのこゑ
鹿声何方 安元

- 356 秋夕 実望
 しはつ山夕こえゆけはくま葛 くるしやすこや秋の谷かけ」6ウ
- 357 山にてもおく山人になりてたに 素純
 なをもうけくに秋の夕くれ
- 358 うき物と荻さへはらふ夕風を 心の露よなにやとすらん 宗清
 承堆
- 359 さなきたにやるかたなきをたそかれの 空まで残る日暮しの声 時茂
 宗長
- 360 大かたの秋の空なりたれそこの うき夕暮とひとりわふらん」7才 秋風
- 361 露けさを思ふやとりか秋の風 ほかに吹てかへるよもなき 氏秀
- 362 あちきなくつらき心も打そひて 身にやゝさむく秋風ぞ吹 泰以
- 363 秋の空もおなし雲井の風ながら 身にしむ斗吹そかはれる 承俊
- 364 秋風のさゆるを月のまゝにして 曇りなき世や空に見すらん」7ウ 孝成
- 365 秋と吹もおなし空なる風ながら 荻に契りて名にや立らん 宗清
 月
- 366 あくかるゝ心のはてや久かたの 月の都にすまむとすらむ 氏親
- 367 あきらけき御代の光りに空の月 あひにあふとはしるき秋哉

- 368 雲風もおさまれる代を秋の月 のとかにすみて空にしるらん」8才 宗長
- 369 ふけ嵐雲おさまればてるのみか 行ことおそき秋の夜の月 素純
 寛阿
- 370 さそはるゝ月のかつらの秋風に ふくるもしらすむ心かな 南狂
- 371 久かたの月のかつらは木かけまで くまなき秋の光り成けり 泰貴
- 372 またよひの心つくしも更行は 木のまはなれてすめる月哉」8ウ 重阿
- 373 花はまれにさけはことほり月はなと 夜な〜見てもあかぬ物なる 氏広
- 374 くらふ山名のみはかりか月影の いたらぬかたのえやはあらしを 八月十五夜 実望
- 375 駒むかへ都はすゝし東路や 名たゝるけふの月かはらす 駒迎 氏広
- 376 やすらひてしはし水かへきりはらの 駒もけふこそあふ坂の関」9才 愛菊丸
- 377 清見かた月影よする浦なみの かゝる夜をしも誰かぬへき 月 実望
- 378 待出し山のあなたにすむ人は 入とや月をしたひてもみん 宗清
- 379 月しろく夜渡るよきのうら風に 一村くもるあまの橋立

- 380 うつり行よみあかつきの空の月 まち惜にや猶もめつらむ」9ウ
孝成
高親
- 381 たれもみなえやはかはらむ あくかれて千ゝに月見る心はかりは
円照
- 382 夜とゝもにひとり涙やすゝむらん
昔をかたる月ならねとも
南狂
- 383 秋の月の影のみおしめ大かたに 人またぬ時はさもあらはあれ
氏親
- 384 移りきて我世の空にみしかけも 思へは久し秋の夜の月」10オ
素純
- 385 いく秋もおなし影なる月にわか よはひかたふく哀をぞ知る
宗長
- 386 よしや月おいすはいかて老てこそ めてしともいひ哀ともみれ
初雁
承俊
- 387 鳴雁もなへて思へはわかれくる こゝもこし路の秋ならぬかは
寛阿
- 388 声するやいつくの波をはかりとて 秋もみなとの雁の一つら」10ウ
氏親
- 389 あまとふも軒はの雲にたなひきて 雁金□□□□の山風
里雁
宗禪
- 390 うき数を思ひつらねてくるかりや ね覚の里のさ夜の手枕
雁作字
宗清
- 391 浦遠みあしては消し浪の上に 文字を残すや天つかり金

- 392 天の海やねさめてきけはいつ手舟を 〃し明かたゆわたる雁金」11オ
南狂
馬上雁
宗長
- 393 乗駒も朝霧ふかくねふる夜の 夢路をつるゝ初かりの声
夢後雁
素純
- 394 おしと思ふ夜をいたつらにねし夢は おとろけとてや衣雁金
朝暮雁
氏兼
- 395 くとあくとき空にわきてや漆江を たち行雁の又おちてくる
左右聞雁
実望
- 396 あつさ弓をすやかたゝの浦にきゝ 波のあはつにきゆる雁金」11ウ
霧
光陽
- 397 小倉山名のみしられてたつ霧の 空をもわかす猶そくれ行
曙霧
氏親
- 398 峰まてはたちものほらて晴残る 霧に一すち横雲の空
政興
- 399 すゝか山声ふりたてゝ友よふや せきのむまやに霧深暮
山館霧
貞基
- 400 さらぬたにさひしと思ふ山里の 庵りをうつむ峰のうき霧」12オ
水郷霧
宗清
- 401 里とへは霧ふたかりて水無瀬河 なみのみ声や有て行らん
霧間舟
兼能
- 402 夕風やきりのと絶と成ぬらん みえみ見えすみかよふ浦舟
霧中塩電
素純
- 403 もしほやく浦一むらの煙りより みるゝいく重秋の夕霧

- 404 はるくゝと浪たちこめし三保か崎 良寿 霧まや今朝の松の一しほ」12ウ
 濁霧 盛助
- 405 波による月も今夜は塩干濁 へたつる霧に影そかくる、 孝成 霧隔望
- 406 霧渡る浦よりをちの波の上に けさもいつらんあまの釣舟 珠易 九月九日
- 407 千世ふてふ花にしあれば長月の けふつむ菊を老やいとほん 盛清 白菊
- 408 秋ふかき庭のしらきくをく霜の いつれを花の色と見るらん」13才 重阿 黄菊
- 409 忘れては春かと思ふ山吹の 色なる菊の花も八重にて 実望 紫菊
- 410 うつろふと見しはそらめそ紫の ねすりの色にさける村きく 宗清 菊延齡
- 411 幾秋もわかえつゝみむ老のなみ せき入ておとせ菊の下水 盛綱 挿頭菊
- 412 霜なからおるかと思みる宮人の 今朝のかさしの白菊の花」13ウ 氏親 海辺菊
- 413 しほくむやあまの衣もぬれてほす 月の色なる菊のしら露 宗禪 池辺菊
- 414 大沢の峰のしら菊風吹は そこさへ匂ふなみそ立ける 光世 秋来擣衣
- 415 秋の色それとはなしに誰しかも 音にたてつゝ衣うつらん

- 416 山のはに月いる後もなかり夜と きげはまとをにうつ衣哉」14才 亮範 擣衣袴
- 417 この頃はひたもなるこも引すて、 きぬた数そふ賤かつち音 承堆 擣衣忽
- 418 風前擣衣 南狂 いと、はた身にしめとてやあさ 衣うつをときそふ秋の夕風 素純 聞擣衣
- 419 程とをき礎の音を露をなと よその袖にはうちそへぬらん 宗清 南北擣衣
- 420 月寒み冬こん方の枕より 跡よりさやにうつ衣かな」14ウ 承俊 海辺擣衣
- 421 音もせて引ほとはかり浦風や なみまをませて衣うつらむ 実望 閑夜擣衣
- 422 更行やしてうつ夜半の秋風に 音もまとをのあさのさ衣 氏親 擣衣不眠
- 423 なをさりの人やうつらんとせめは かへしてもねむ夜の衣を 宗長 擣衣欲曙
- 424 から衣夜さむにあれや白妙の ゆふつけ鳥もうちしきり鳴」15才 宗清 九月十三夜
- 425 今夜又名の光そふ月そとも しらてやめてんもろこしの空 時茂 月
- 426 なかむれは心は行て久方の 月のみやこにすむはかりなり 氏秀 身こそあれ心をいさややりてみむ この世の外の月の宮こに

- 428 月見れば涙すゝろに成にけり 夜や更ぬらん物やかなしき」15ウ
宗輝
重阿
- 429 ふたつともあらぬ物から月の影 所によりてなとかみゆらむ
範為
- 430 難波かた月のいり江の蘆の葉に 露の玉ちるさ夜風ぞ吹
承堆
- 431 陰高き木すゑつたひに月さへて 雪の下吹みねの秋風
安元
- 432 おほへすよ更てみるく山のはの 月に心やちかくゆくらん」16才
光陽
- 433 引とめよ思ふかひなく梓弓 秋もすゑ野のあり明の月
氏兼
- 434 まとろまで見てさへあかす有明の 月にぬる夜を誰かおしまぬ
宗清
- 435 河風の高瀬の浜の明かたに しきつきのほる月のさむけき
野鴨
孝成
- 436 をちこちに人はるなのゝ夕暮を なれやしめゆふ鳴のはね音」16ウ
田鴨
重阿
- 437 あかつきの哀はいつれ鳴のたつ 田面の沢の秋のゆふ暮
夕鶉
実望
- 438 暮行は芝生の床のあれまくや いと鶉のねには鳴らん
麓鶉
孝汶
- 439 夕くれは山風吹て雲まよふ ふもとの野辺に鶉なく也

- 440 あれしより庭のさゝ原ふしなるゝ 人はうつらるところはなれつゝ」17才
故郷鶉
氏親
岡葛
覚阿
- 441 をかのへやうつろふ秋の風の色を うらみかほにもかゝる真葛は
径葛
亮範
- 442 ふみ分て誰かとはまし秋の野の 葛はふ道は露茂くして
松葛
素純
- 443 葛の葉の色つくをのか秋に似ぬ 露の恨みや岩ねの松
垣保葛
宗清
- 444 葛紅葉色めく秋は故郷も 草にやつれむ垣保ならめや」17ウ
葛懸松
宗長
- 445 ひまもなく葛はふ山の軒近き 松もみちのするかとそみる
秋田
氏兼
- 446 うちなひくわさ田おくての露を分 かりほの庵に人そ行かふ
紅葉
南狂
- 447 宇津の山うつろふ比と旅人の 行こそやらねつたのした道
初紅葉
氏泰
- 448 昨日までしくるゝとたに白露の よるや染けん今朝のみみち葉」18才
紅葉浅
実望
- 449 山姫のそむてふ千ゝのくれなゐも またはつしほのはゝそ原哉
紅葉一拊
泰貴
- 450 をりそむる紅葉のにしき山姫や まつ一もに掛けてみすらむ
雨後紅葉
氏秀
- 451 染わたす雨の名残に今朝はゝや 松をは松に見するもみちは

- 452 うすくこき山はきのふの秋の色 夜半の時雨にわく方もなし」18ウ
 紅葉遍 時茂
 紅葉深 氏満
- 453 日にそへて木ゝの梢は時雨をも またす紅葉の色そこかるゝ
 紅葉盛 氏広
- 454 秋とてる四方の梢にうつろひて 青葉の山ももみちしにけり
 紅葉色ゝ 宗清
- 455 爐かえて植しみぎりや秋にそむ 心の色もわきて見ゆらむ
 紅葉透松 宗禪
- 456 夕つくひ残るこのまのうす紅葉 松は春より秋そひとしほ」19オ
 紅葉誰家 重阿
- 457 石はしる瀧はありとも紅葉する この河上の家をとほゝや
 閑紅葉 氏親
- 458 うすくこく色も八重山染なすや 露時雨もるあしからの閑
 連峰紅葉 承俊
- 459 峰續く外山もおなし下染の 時雨おくなき薄紅葉哉
 高紅葉 承堆
- 460 秋の色になひくあさまのたけみれば 紅葉よりたつ煙成けり」19ウ
 閑紅葉 孝成
- 461 ちらは又かきつめてみむみつききの をかのもみちに秋風そふく
 杣紅葉 安元
- 462 時雨ふる谷の朽木の杣木にも いく秋もれて紅葉しぬらん
 潤底紅葉 実望
- 463 露しにもみちし木ゝの色にまた 染てなかるゝ谷のした水

- 464 山深み陰分いつるした水の もみちをくゝるなみの□紅」20オ
 紅葉映水 円照
- 465 秋ふかき木ゝの梢やひたすらむ 浪に色そふ興津しま山
 紅葉随風 素純
- 466 蔦かつらたのみてかゝる松かせに 雨もたまらずちるもみち哉
 暮秋 宗清
- 467 暮ことのうきをは千ゝに残しをきて 独も秋のいつち行らむ
 暮秋霧 氏端
- 468 夕霧の立まよひつゝ行秋の 名残かなしき野辺の色哉」20ウ
 暮秋興 素純
- 469 秋やいかに菊の花咲もみちてる 山路を誰に残してか行
 暮秋送客 宗長
- 470 まてしはし秋こそあらめ人もなと きほひかへらむ葛の浦風
 旅暮秋 覚阿
- 471 分なれし野山のうへの秋にさへ 名残露けきかり枕かな
 暮秋遠情 実望
- 472 行秋に心の色もたくへてや 猶物ことのあはれそふらむ」21オ
 幽栖暮秋 氏親
- 473 さひしきは身にそふ影の宿なれば 秋のとゝめむかたみにもせし
 九月昼 氏慶
- 474 野への草かれゝになる虫の音も こよひや秋の名残成らん
 九月昼夜 氏兼
- 475 なかしてふ夜もなかゝらす長月の 名残をさそふ鳥の音もうし

駐九月尽

476 長月よけふはかりかははわかるとて 人はしはしと袖もこそひけ」 21ウ

南狂

冬哥百首

初冬

477 かけたかき松のは山に時雨てや 冬のはしめの色を見すらん

寛阿

氏親

478 なかめせし露もひぬまの秋の袖 こほりこほらす冬はきにけり

素純

479 花すゝき草のたもとかほころひて 風もたまらぬ冬はきにけり

南狂

480 きふけふ時雨に見れば里わきて まつむらくに冬は来にけり」 22オ

宗長

481 はけしきは秋の草木の山おろし 又もむへなり冬はきにけり

実望

時雨

482 冬かれの木をした山のむら時雨 ふるかひもなき名にやたゝまし

宗清

483 人やとり笠やとりとをいふるやに はや降晴る村時雨哉

承俊

484 木の葉ちりてなにを時雨の残さまし おのへの松のつれなからすは」 22ウ

泰貴

485 わか袖もまたほしあへす過そゆく たれにかゝらん夜半の時雨そ

氏兼

此所落丁有

486 風さゆるかた山もとの朝曇り 夜半の時雨や枚のむら立

落葉

宗清

487 見し夢はむなしき階の雨の声を こたふ落葉ぞ窓に夜ふかき」 23オ

実望

488 かよひちや猶分わひぬ山風は 吹たゆむ間も木枯のもり

氏広

489 行かよふ人こそなけれちりうつむ 木のはかさねの秋の山路は

素純

490 一葉見し秋の初風木からしに うつりもあへすうつむかよひ路

南狂

491 吹風にねくらの鳥のなきたては あとをしたひて行木葉かな」 23ウ

氏親

霜

492 さえまざるあしたの霜のむすふとや 落葉ゆるかぬ風渡る也

兼能

493 しもかれの草むら薄くちはてゝ 鳥のふしも見えぬ野へ哉

重阿

494 鐘のをとは峰よりさえて霜いくへ まよふ麓の真木の板はし

宗清

495 冬かけてかへりこてふのやとりとや 猶折のこす菊のひとえた」 24オ

時茂

496 おりかさすをちかた人は程ふりて 霜にうつろふ野辺の白菊

愛菊丸

497 さえくらす風のすゑ野よいかならん かれたつ荻の霜を吹こゑ

寒草

- 498 霜かれの千種の原に一むらの 残るをさこそ色し身にしむ
円照
- 499 露わけし秋の色えも霜かれは ひとつ夢野の草の原かな」24ウ
宗長
- 500 あしつゝのうす雪ふりて氷るえに かれはささはかす風心せよ
寒廬 素純
- 501 浮たちし雲のゆくゑはいく夏も 時雨になりてはるゝともなし
嵩親 氏秀
- 502 さそふかと木の葉みたるゝ夕風に つれて時雨のめくる山のは
宗禪
- 503 あつま屋のかやの軒つく板ひさし きくかたわへる村時雨哉」25才
承堆
- 504 たちまよふ山路の雲のほともなく すそのゝ里に時雨ふる也
孝成
- 505 おりふしにふりかはり行雨の名の けにさためなき神無月かな
安元
- 506 朝こほり解ぬかきりはふかき江に つなかぬ舟もえやはなかるゝ
政興
- 507 岩ま行水もとたえ河風の はけしき程そなを氷ぬる」25ウ
承俊
- 508 岩浪のよとむひかりのさえくゝて 氷にむせふ清瀧の月
孝成
- 509 冬の夜をめてすは月にとふ人や 心浅しとわれをおもはむ
-
- 510 うち時雨雲のたえまもさへくゝて した行水に氷る月哉
親能
- 511 風あるゝむらしか磯のむら千鳥 ねくらやなみのよそに鳴覧」26才
千鳥 実望
- 512 わかの浦や行ゑも八重の塩風に 吹上の千鳥声むせふらし
宗清 亮範
- 513 声たてゝ吹上の浜のはま風に とをさかり行さ夜千鳥かな
南狂
- 514 さ夜ふかくね覚わひぬる身の上と するはかいそに鳴千鳥哉
宗禪
- 515 清見かたなみのさ花のむらちとり 月にけちかくひとくもりして」26ウ
盛清
- 516 影ふくる月も清見かいそ千鳥 行かへりなく波のさむけさ
範為
- 517 なみたかく夜半もふけるの浦千鳥 あかしかねてや声さきるらん
孝汶
- 518 空にわひ汀にさゆる声すなり あはれひとしき友千とり哉
承堆
- 519 難波江のあしのかれ葉に霜さえて やとりやさむき衝鳴なり」27才
珠易
- 520 ふけ渡るさ夜風よりも浜千鳥 つまとふ声そ波にさむけき
水鳥 素純
- 521 夜をかさね汀や氷るあしかもの さはくうきねも遠さかり行

- 522 はらひあへぬうは毛の霜にむすほゝれ 鳴の春羽も残るとは見す
氏親 宗清
- 523 しかま河水の床やたえさらん 海に出する水鳥のこゑ」27ウ
実望 網代
- 524 かりあけし田上川のあしろもり 秋よりのちもうきいほね哉
氏兼
- 525 風ませになを音たかみ明かたの さしろにあまる宇治の川波
重阿
- 526 なれてたにさそあからし網代守 さえこほる夜の宇治の河風
宗清 雲
- 527 雨か雪かともかくにも立よるや この手柏の木ゝのした陰」28オ
宗長 寛阿
- 528 今朝はまたおなし時雨の衣ての ぬれてこほるやみそれなるらん
寛阿 霰
- 529 山風にあられ吹ませ村雲の たえまを見せてさゆる半天
道芬
- 530 あられふる野辺のさゝ原分行は ひろはぬ玉を袖に見る哉
実望 鷹狩
- 531 いのちそこのむるとのあはれさよ 夢とふ犬のかみみかへるまを」28ウ
孝成
- 532 暮ぬれはいまひとつかれかりすてゝ かへる心や野にとまるらん
盛綱
- 533 ふる高にとたちも見えず狩くらし 道さへわかぬけふのかつるさ
盛綱

- 534 旅人になりて今夜は折しくや とたちにくらす嶺の椎しは
安元 盛助
- 535 鷹人の声にや鳥のいりぬへき 草を忘てとを羽ひくらん」29オ
宗清 五節
- 536 月更る露の童に乙女こか 昔をかへす袖のさやけさ
重阿
- 537 天津風けふはのとかにしろたへの そてをやかへす雲のかよひ路
南狂 神楽
- 538 をく霜に庭火うちしめり明かたの そらにもさゆるあかほしの声
承堆
- 539 榊葉に霜のはなをもさしそへてうたふかさしにさよやふくらん」29ウ
実望 雪
- 540 道さけて今朝見る庭に此頃の とはぬ恨もはるゝ雪哉
泰貴
- 541 むら雲のまよふうちにや山のはの 見えてたえくの今朝の初雪
宗清
- 542 宮つこもよしやをこたれ玉塵 つもるそ庭の朝きよめなる
素純
- 543 白雪のうす花すゝき今よりは うへてたにみむ庭の明ほの」30オ
氏貞
- 544 今朝ははやふきくる風の音もなく 軒はの松につもるしら雪
光陽
- 545 春秋の花よ紅葉のあはれをも うつみてみねの今朝の初雪

- 546 月こぼる風のみねはいく重とも わかぬはかりにつもるしら雪
愛菊丸
円照
- 547 庭に今朝とふことのはも初雪や まちし心のとをつくらん」30ウ
氏兼
- 548 うちゝりし雪をぬれく構かね 身のしろ衣ぎさち人やたれ
孝成
- 549 またれしといひしことの葉あともなし 消ゆるものとも白雪の庭
泰以
- 550 かきくらし雪のふる道ゆきかよふ 心にえやはあとの見ゆへき
氏秀
- 551 ふる雪に軒もかきほもうつもれて となりもうとぎすまひとそ成」31オ
宗禪
- 552 雪つみて爪木ともしくほとふれは 軒はにかゝる枚のしたをれ
氏正
- 553 松はまつ竹は竹ともしら雪の をのれくの下をれのこゑ
氏広
- 554 ふかき谷あさまのたけにふりかゝる 雪けの空は雲も絶せし
為興
- 555 風ませに落葉はけしくみたれしも はやしつまりて積る白雪」31ウ
時茂
- 556 海山もひとつにはれて白妙の 雪よりいつるあすの釣ふね
嵩親
- 557 雲のうへに雪こそ積れ富士のねの よそは枯野のさむき明かた
-
- 558 雪白く富士のたかねの雪はれて みかけそうつる田子の浦浪
氏延
- 559 ふりつみてうかへる舟のいかりなそ はなる雪をつなくとそ見る」32オ
氏親
炭竈
- 560 さえくしやく炭竈も獣の かたちはけしき山風のこゑ
宗清
覚阿
- 561 朝な夕な心はみねにすみかまの けふりのたゝすたのむ山かつ
埋火
宗長
- 562 山風ものとかに成てまどろめは 春の夢みる埋火のもと
氏親
- 563 かすもなくきえてはおこるあかつきの 思ひにしろも埋火のかけ」32ウ
仏名
実望
- 564 三世かけてとなふ仏のかすくくの 御名さく人よつみやけぬらん
承俊
- 565 はれねとや心の月も三世かけて ほとけの御名のすめるとなへに
歳暮
南狂
- 566 春のこむ門の松もてやま人の あへの市路にいそくころかな
素純
- 567 あすとのみ心にたのめ身にまたせ さもいたつらにくらす年哉」33オ
重阿
- 568 春をまつ心やけふはわするらん くれ行年のおしきのみにて
宗清
- 569 行年も惜むとなしやなやふを いそくはかりの雲の上人

- 570 身に月日つもりてかへりくせは 宗長
暮ぬととしをいつか惜まむ
良寿
- 571 今夜まつかねてそいはふ鳥のねの つけむ八千代の春のはしめを」 33ウ
恋二百首
亮範
- 572 いかならむ種し有てかおもひ草 うへそめしよりかるしいろなき
初恋
実望
- 573 しほれ行をのか袖しの浦波の よるよりはやく名にや立覽
宗清
- 574 浅はかにけふこそ思ひそめ河よ 何うき瀬を袖に見らん
忍恋
氏親
- 575 つるにうき人のためもや心にも おもへはおもふすちは知らし」 34オ
承俊
- 576 もしほくむ海士の袂にやとさはや 我か人みれすこふる涙を
泰貴
- 577 たくひありや尾花かもとの思草 たゝならぬ名は露もちらする
宗長
- 578 かり衣かけてもなれすしらぬ身の 心よいかて忍ふもちすり
宗禰
- 579 恋草の柴にも色にもいたさねは つましからぬ袖の上哉」 34ウ
素純
不見恋
- 580 いつもらすかほをたにみむ梅花 かすみしまゝの中のとれなき

- 581 せめてとていふかひもなきかな よそなからにもしらぬうときは
南狂
- 582 うきにそむ心の色の錦木や 立名はかりにおもひくたさん
不逢恋
宗清
- 583 なかゝらむちきりのあれやおしからぬ 命を思ふ逢ふ事のなき」 35オ
氏親
覚阿
- 584 思ふ事われにまかせぬうき身をは いか定めぬ心とかしる
孝成
- 585 あひ見てもなをうきならば二しへに 物や思はむ忘はてはや
重阿
- 586 こえはやともゆるいふきのやますなと 心と思ひ身をこかず覽
見恋
氏広
- 587 我か恋は涙の海の袖のうへに あはれみるめのしけるはかりそ」 35ウ
氏兼
- 588 こすのひまほのみそめつる面影を 忘れすそれといつか語らん
聞恋
実望
- 589 音に恋するかの海に引あみの 目にまたかけぬ人を何そも
祈恋
氏秀
- 590 やはらくる神のひかりをゆふしてに かけてたのむそまつ契りなる
承堆
- 591 月よみの神にしたのむ中なれば おもひの雲も晴さらめやは」 36オ
契恋
愛菊丸
- 592 あはれ世のわかれのなくはたくひなき 契りにいかて物おもはまし

- 593 かならずとかけてもよそにおもふやと 猶あやにくに疑うはれぬる
 円照
 憑恋
- 594 うと浜のうとくすくともしら波の かけて 中に猶や頼まむ
 実望[※]
 素純
- 595 ひたふるにたのむの雁のたのむとて いつわるかたによるとしもなく 36ウ
 高親
- 596 かねことの末たのみある中なれば うつる月日そ猶またれぬる
 光陽
 待恋
- 597 ことの葉をたのめし末は波さはく 海となるおの松風もうし
 南狂
- 598 たのめをく此夕くれのひさしさは きたになかる、河もすみなん
 宗清
- 599 とはしとの草の原をもこよひやは 露の情に思ひけたれん 37才
 乗阿
- 600 かすくゝに思ひつくしてあふことは 夢うつ、ともえこそおほえね
 重阿
- 601 おもひきえんと斗いひし心さへ 今夜はくやし身をや頼ん
 貞基
- 602 契りかしはかなき夢とさめはて、 涙はかりやけさ残るらん
 宗禪
- 603 おきわかれ又よといひし黒髪のおかぬみたれやまゆのおもかけ 37ウ
 孝成
- 604 夢なからかへるあしたの我心 人のうつ、にいはみえけむ

- 605 末ちきることの葉なくはなに、かは 今朝の涙の露をほさまし
 安元
 時茂
- 606 夜るくゝに枕さためぬ思ひより わかれし今朝そ胸はこかる、
 別恋
 宗清
- 607 そをたにも払はし床よ落髪の一筋に別はてなは 38才
 政興
- 608 しはしとも思ふ物からいそかる、 心よいか今朝のわかれ路
 宗長
- 609 なに心あり明の空の月もうく つらからぬ物なきわかれかな
 道芬
- 610 鳥かねをまたても人やいそく覧 心みしうきあり明の空
 範為
- 611 あか月は露も涙もかきくらし 面影くもる別れ路のそら 38ウ
 安星
- 612 袖の露に我思ひこそしらるとも 人の名までをもらさずも哉
 顕恋
 承堆
- 613 いたつらにもる、うき名をいひかへて よそになすへき媒もかな
 望教
- 614 此ころは何とわか名のたつ田山 しくれし木、や色に出けむ
 実望
- 615 逢事そはるけかりける心のみ かはすはかりにいひはよりても 39才
 信盛
- 616 もすそふみ立ならひてもいたつらに ことはかきすいひもよられず

617 庭もせに殖てし松のことの葉も 我にはつらき秋風ぞ吹
馴恋 承俊

618 朝夕にみゆる心よ中くくに うとくはうとくとけはとけなて
素純 氏兼

619 をろかなる心を露もみたとや 立ならふ中に身をもつくさむ」39ウ

《第三冊》

隔恋

620 いつよりと空にうつるや夕月夜 うき心くまあり明のかけ
氏親 南狂

621 中空の人の心のうき雲に とたえにけりな袖の月かけ
盛清

622 むつましき心はかよふ中ながら むくひにかゝるみちやへたてし
遠恋 宗清

623 やよいかに待としきは塩の八百路 雲の千へたつ山もさはらし」1才
氏親

624 たのむそよ心の千里かさぬとは きかぬ斗のちかき雲井に
尋恋 覚阿

625 わすれけりとひしもいつそいもか門 さして尋んくれをしらねは
重阿

626 年月はいつくとのみに枚の門 さすかにおもひたえもやられす
孝汶

627 かならずといひし夕の頼みに むなしき空に恨みつる哉」1ウ
偽恋

628 かゝ覧と思ひなからの偽を うらむる今の家そはかなき
慈□ 不憑恋

629 くれぬれは又かきくらしのむ夜に あらてはかなき身をそ恨むる
盛綱 兼秀

630 きくからにこよひもとはす深にけり たのまむ物か鐘のこゑく
宗清 厭恋

631 きくもうし何ゆへよそに鳴尾舟や 我もひとりの松風の声」2才
良寿

632 忍ひ行人の心のかよひ路に てりそふ月や身のたくひなる
実望

633 契りつる人はこぬみの浜波の かけしもしいまはうき心かな
悔恋 素純

634 おちそめし露よりせかて枕たに 流るゝ水のくひの八千たひ
光陽

635 煙りにもたてしとくゆる胸の火の きえなは何のなきならまし」2ウ
変恋 氏親

636 言葉はいはしくらしてはるゝ夜の 空さへ雨にかはるちきりに
氏広

637 かならずとたのむまことも 偽になされて猶や人を恨ん
宗清

638 よしかはれ我にかはらは人にかはる たのみをせめて頼みてもみん
盛助

639 あすか川瀨瀬を人の心にて 流るゝ水の末もたのまし」3才

- 640 たのみこし人の心はうき雲に のるはかりにてよそにこそなれ
時茂
隠恋 円照
- 641 をしへつる宿をしとへはこたへぬや いふはかりなるもすの草くき
宗長
- 642 猶うしや春や昔とたとらるゝ 涙にあらぬ月をかたみは
兼能
- 643 いつくまで猶もたつねむこゝといひ かしこといひてかへすやとりを」3ウ
稀恋 素純
- 644 花の頃紅葉の折のなくもあれな さてもやとふと身を心みん
愛菊丸
- 645 花のあした月の夕とたのめしも はやいくめぐり人のつれなき
珠易
- 646 ひこほしの契りはかりになくさめて 忍ひはつへき月日ともなし
片恋 実望
- 647 身にしらぬ人はよそにやおかしとも ゑみの片岡かた思ひして」4才
孝成
- 648 かはかりもこかるゝ胸をいかにせば 人にうつつして思ひしらせん
久恋 氏親
- 649 殖そめしなけきふりぬる陰かへて いつわけもみむ恋の山路^(マヤ)みち
宗清
- 650 かくて身のおとろへはては三への帯の なかき恨とならんさへうし
泰貴
- 651 いくかへり枯れては茂る庭の草 わけこぬ中のなけきせしまに」4ウ
-
- 652 物思ふまきれにうつる年月は わかぬ我が身になにとつもらん
安元
承堆
- 653 いまそしる三代に逢にし唐人の 契りの末を身にむすひつゝ
旧恋 氏兼
- 654 露しくれ染ぬたもとは年をふる 涙の雨の色に出けり
素純
- 655 さ夜衣そのうつり香のなこりさへ 涙の露に昔おふるまで」5才
忘恋 実望
- 656 住よしの峰ならなくにわすれ草 なにそは中にねざし初けん
宗清
- 657 しられなはまたおなし世に有をさへ にくしとせめていはれん物を
承俊
- 658 よしや我が忍にまじる草ならば しけらてかれね人の心^{そ敵}に
宗禪
- 659 いつよりかたえてわすれの草茂み 我たにたたる朝の下道」5ウ
南狂
- 660 ことつてもいまはたたと名をそとふ あふとも人やみすしらせらん
怨恋 氏秀
- 661 つれもなき人の心はやましろの とみにうらみそ我にそひぬる
寛阿
- 662 いかにきておもふ程をはいはみかた よせくる波の袖のあまりを
南狂
- 663 かこちつゝ、またしあはしといひやるを うれしとき^(マヤ)かことさへもうし」6才

- 664 なをさりの恨てそあれ袖に見よ いふにもまさる我涙かな 重阿
- 665 向ふにも心のおくは中くくに いはぬをふかき恨とをしれ 宗清
- 666 身にしらは今はけつとやおもひいてん をきまさり行胸の日頃を 氏親
- 絶恋
- 667 あた波のかけはなれつうち河や つみのよるへを何とたのまむ 6ウ 実望
- 668 とにかくに霜かれまではおもひしを 雪かきくらす中の道芝 素純
- 孝成
- 669 いかなれや紅葉みたるゝたつ田川 わたるとなしに袖ぬらすらむ 宗長
- 670 なにとなくと絶し程の恨さへ 遠さかり行夜半のひとりね 氏貞
- 寄日恋
- 671 いつまでか心つくしに夕日影 さすかよそにもかかはなれす 7才 氏親
- 寄月恋
- 672 雨ならぬ涙を袖にかけそめて そをたに月にうらみそゆらん 実望
- 寄風恋
- 673 行多なき思ひをしたの浦風に □□もまよふ波のつり舟 承俊
- 寄雲恋
- 674 おもひのみくゆる烟の行末か はれぬ心の空のうき雲 宗清
- 寄霞恋
- 675 我思ひ晴ぬ心に立そひて 霞よ人の歎たるひと 7ウ

- 676 よのつねのならひととはかり見もすては 煙のはてもあちきなの身や 素純
- 寄煙恋
- 677 いかにしてふりはへてこそあらずとも 霧のまよひのかけをたにみん 宗長
- 寄霧恋
- 678 情ともいふへぎ中かあさかほの 露は見るまもある世なりけり 寛阿
- 寄露恋
- 679 夜かれするうらみは雨にかきらねと 猶葛のはの物にきく哉 8才 宗禪
- 寄雨恋
- 680 人を憂山ひこならば松にのみ こたへこそせめ雪折のこゑ 南狂
- 寄雪恋
- 681 いとはるゝ身の行多にはむつまじき いもせの山をいか頼まむ 孝成
- 寄山恋
- 682 面影も尽ぬはかりに立籠て 人はいなはの嶺の白雲 承堆
- 寄嶺恋
- 683 くるしさもあふ人からに忘られて 千とせの坂もこゆへかりけり 8ウ 重阿
- 寄坂恋
- 684 名にしおへは思ふあたりと問そくる 我も忍ひの岡の道下 氏兼
- 寄岡恋
- 685 薪をも身の歎きとを思ふまの 夕に告よ溪の北かせ 宗清
- 寄谷恋
- 686 袖のうへいかまかへむまとりすむ うるてのもりて露の染なは 氏親
- 寄杜恋
- 687 武蔵野や草のゆかりもわかかたに なひくとほ見ぬ秋風ぞ吹 9才 素純
- 寄野恋

- 688 寄原恋 氏広
あはずして帰る涙やかたをかの 朝のはらの露となるらむ
- 689 寄路恋 泰貴
いかはかりあしたゆくゝる道よりも 思ふひまなき身をつくす覧
- 690 寄田恋 □□
しら露の玉さかたに秋の田の いねてふことのかなとなるらん
- 691 寄水恋 安元
朝毎にむすはむ水のしつくをも 袖にはかけしなるやなかれん」9ウ
- 692 寄沢恋 南狂
ふしのねや雲井はるかになる沢の はやくうき名を流す我哉
- 693 寄池恋 円照
うらむともこやといはすはつこの国の いける身そとは誰にこたへん
- 694 寄河恋 氏秀
いつまてか音羽の川のをとつれを 情になして月日をはへん
- 695 寄湖恋 宗長
舟はあれとかち野の露をしのみても 思ふかたゝの浦風ぞ吹」10オ
- 696 寄海恋 重阿
見るめこそなくとも名をやたのまゝし はてはあふみの海の千尋に
- 697 寄浦恋 氏親
こき出てわかゆつるめるいもにこひ まつらのおきにさもそたゆたふ
- 698 寄江恋 時茂
うきふしは難波の蘆の一夜たに いかなるえにてあふよしのなき
- 699 寄島恋 宗清
あら塩のさすかあはれめいもか島 身を浦舟のこきはなるとも」10ウ
-
- 700 寄泊恋 嵩親
舟よせて泊せし夜のうかれつま 行ゑも浪やかたみならまし
- 701 寄隣恋 実□
一重たにうときためしのから衣 何中かきをへたてはつらん
- 702 寄里恋 氏延
行帰る頼むもはかるあふ事は かたのゝ里の露のかよひち
- 703 寄家恋 南狂
世をうしと家を出てもすみの袖に つゝむ思ひははなれさりけり」11オ
- 704 寄窓恋 素純
ひとりねははれぬ涙の雨夜そと 窓にみしかく霞ともし火
- 705 寄床恋 宗禪
くせとして暮れははらふ床の上に ちりはつもらすこぬよのみこそ
- 706 寄門恋 孝成
たへてみむ律のかとによもきふの もとの心や露も残ると
- 707 寄戸恋 乗阿
こよひまで聞のくるゝ戸たてのこし 待しはかなき空たのめかな」11ウ
- 708 寄牆恋 宗長
心たにあはせてゆかはうたふ夜の あしきき籬いくへありとも
- 709 寄庭恋 氏親
庭の面かれます我たに分ならし とはれしまゝの跡も残さむ
- 710 寄市恋 宗清
くるしめる恋のおも荷ようき中に 行てうるまの市路ともかな
- 711 寄草恋 乗阿
武蔵野やはてなき草の露もやは 物思ふ袖にをきはまさらむ」12オ

- 712 竹の葉のさやくかたには枕せし たのめぬ人をまつこゝちする
寄苔恋 氏兼
- 713 袖は猶岩のはさまもよそならぬ 苔の雪のかはくまそなき
寄忍草恋 承堆
- 714 をのつからいかて軒端に茂るらん ひとつ心に忍ふ草はの
寄忘草恋 素純
- 715 住吉のきしもせずしてつむかたを しらはや我も人わすれ草」12ウ
寄芝恋 孝汶
- 716 道芝のしけきにつけていとゝしく 枯行人をおもふ宿かな
寄苔恋 盛助
- 717 茂りあふますけのねさしきしなから なかき思ひをしる人そなき
寄累葛恋 実望
- 718 憂中よつゝらおるてふ山よりも くるしきまてに分そわひぬる
寄萍恋 範為
- 719 はかなくも身のうき草はかれぬせて 浪の立るにしほる袖哉」13オ
寄藻恋 氏親
- 720 河のせにおふる玉藻のそれならぬ 涙の露よ見かくれはせよ
寄木恋 重阿
- 721 それそとは立ならへともみ山木の 人にしらぬ思ひいつまで
寄松恋 愛菊丸
- 722 猶さりに思ふもつらし契りをく ゆくゑは松の千代をかきりそ
寄柏恋 宗清
- 723 今はとのことの葉ながら柏木や かねなてうさの猶残りけん」13ウ

- 724 祈りてもつれなきまゝに送る身の 猶いつまでふるの神杖
寄神恋 兼能
- 725 みつかきにさす神葉の折くは 神にそかこつ人のつらさを
寄槓恋 政興
- 726 秋きては槓の下はの露をさへ かけしとおもふ袖のうへかな
寄椎恋 珠易
- 727 ふけ嵐さらすはいかてしるの葉の 恨ありともみやまきのかけ」14オ
寄槻恋 素純
- 728 たかかたに程なく思ひつきの木の 弓とそり行人の心そ
寄桐恋 氏親
- 729 うちもねすちるをきゝそへ桐の葉も こぬ夜重る数としらすや
寄梨恋 嵩親
- 730 あふ事はいつとたのみも梨のはの 落るにそひてもろき涙は
寄鶴恋 実望
- 731 人はいさ鶴の毛衣我中の かりきにをせむ千世やかさぬと」14ウ
寄鶯恋 南狂
- 732 みちのくにかふてふ鶯のとやかくと いとはれてのみ恋わたる哉
寄鷹恋 孝汶
- 733 はしたかをたはなつも又身になるゝ 心しらねは心をそをく
寄鶏恋 時茂
- 734 あふ夜半も心つくしのきぬくゝに 八声の鳥よ物わすれせよ
寄鳥恋 宗長
- 735 夕暮はねところもとめ鶴も 木をめぐりてや思ひわふらん」15オ

- 736 寄山鳥恋 宗清
 したひても山鳥のおのうきすちに なかくやさても思はなれん
 寄鶯恋 道芬
- 737 よりそはぬ人の心の雲井路に 立もはなれぬ鶯の一つれ
 寄都鳥恋 氏□
- 738 なか空にたちこそまよへ都鳥 袖にみちくるしほのたゝへに
 寄鶯恋 素純
- 739 をし鳥のはねうちきせて一つかひ はなれぬにたに音はなかずやは」15ウ
 寄鶯恋 盛清
- 740 軒ちかき鳴のはねかき思ひねの 夢うつゝにかへす声哉
 寄蜻蛉恋 実望
- 741 心までいかにかはれはかけろふの あるかなきかとはれたにせぬ
 寄蝶恋 光陽
- 742 はかなさはこてふの夢のひまをたに うときや頼世と思ふらん
 寄蛙恋 重阿
- 743 山吹はいはぬ思ひを色いろになと ゐての蛙のこゝろなるらん」16オ
 寄蛩恋 円照
- 744 夜もすからもゆる蛩のうはの空に 思ひけたぬそわか心なり
 寄蟬恋 安元
- 745 蟬の羽のうすはな染のから衣 きなれば人のうつろひやせむ
 寄促織恋 宗清
- 746 物思へは何そはよけく蘆のやゝ しつはたをりの鳴ねさへうし
 寄蚕恋 氏親
- 747 人の秋にあへるもそふるきりくす あなかま何のたへすとかなく」16ウ
-
- 748 寄松虫恋 氏秀
 我も又鳴松虫に音をそへて 問はれぬ人に袖はしほらむ
 寄鈴虫恋 泰貴
- 749 憂思ひふり捨かたし鈴虫の 啼音やともにもたてなむ
 寄蛛恋 素純
- 750 我心引かたにしてさゝかにの いとゝたのみやかけ絶もせぬ
 寄玉恋 承堆
- 751 一かたに思ひなひかは玉かつら 心にかけてひかまし物を」17オ
 寄錦恋 実望
- 752 なき名のみたゝまくおしきこま錦 こまもとめてもあはむと思ふ
 寄糸恋 氏兼
- 753 むすほゝれはてむ心か紅の いとのみたれに袖はなしても
 寄衣恋 亮範
- 754 とにかくにむねそくるしき逢事の なくて年月きそのあさきぬ
 寄紐恋 宗長
- 755 かくとたに人や思ひいれ紐の 胸ふたかりて恋ふるこゝろを」17ウ
 寄帯恋 泰以
- 756 忍ふへき人の心のした帯よ とけてはいつを契ならまし
 寄布恋 良寿
- 757 人しれぬ思ひやかかる布引の 瀧の白浪袖にたつまで
 寄鏡恋 宗輝
- 758 おとろへはますみの鏡みるたひに 我にもあらぬ恋もするかな
 寄琴恋 覚阿
- 759 忍ふればことのねにさへたてわふる 心のおくを問ふ人もかな」18オ

寄笛恋

760 笛のねにふきはあはせず木からしの もり行名のみわふる中には

寄墨恋

761 人にさてすみ付かほの色をしも 思ひけたれん我涙か■^は

寄筆恋

762 いかにしてつたへもやらんとる筆の つかのまをたに忘れわひぬと

寄弓恋

763 梓弓ひかねはたゝにひかは又 とをからぬ中のよそにもやせん」18ウ

寄剣恋

764 石上ふりにし代々の剣かは 神きひにたる我おもひかな

寄扇恋

765 袖の露ともにをくへき扇かは つらくもかよふ人の秋風

寄枕恋

766 せめてさは五十年たのしむ枕かな 我憂中にかたしきてみん

寄筵恋

767 さ夜衣かへすもはかなみる夢も^ハ かたはらたひし床のさむしろ」19オ

寄灯恋

768 かひなしやかかひともしせし面影の 身をしはなれぬ契斗は

寄鐘恋

769 やすくやはまところみもせんまでしはし ねよとの鐘はうつときくとも

寄舟恋

770 我恋は跡なき浪をこく舟の いつをえにしのよるへなるらん」19ウ

雑二百首

神祇

771 立そふやするか山のしつはたに たのみをかくる新宮柱

772 めくみやあさまの神とたむけなは 千哥の文字や代々のあり数

773 国民を祈しめゆふ君か世は 万代かけて松のここの葉

774 いすゝ川清き流を結びあけて 心すゝしき御祓をそする」20オ

775 まもれるもあふくも代々にまさかきや 常磐を神は君に譲りて

776 いかゝえむ四十あまりの年のせに とかぬところの法のまことを

777 待とをきその暁かねてより まつてらさすやまよやみちを

778 ともすれは心の水のもりやすく 謂れるかたの早瀬にそ行」20ウ

779 色にそめにほふ心をたれもなと 御法の花に契らさるらん

780 たゝ一心の玉や十あまり 二に分し名のひかりなる

781 月影もあかてかたふく山かつら かくる宮こは心のみかは

- 782 灯もやゝほのかなる鳥のこゑ かねのねさめのあかつきの空」21才
氏広 泰貴
- 783 思ふこと見なはかなしとかねのをとや ねさめの後も驚^かすらん
氏親
- 784 ねさめつゝあつめてしれはうれしきは うきか一のあかつきの空
宗禪
- 785 あちぎなくわか世ふけ行庭の霜に おちたる月の有明の影
素純
- 786 はるかなる昔にかへりいまにくる 心のみちや寢覚成らん」21ウ
南狂
- 787 鳴鳥にわかれちまとふうき空や つれなき影の月にあふらん
孝成
- 788 横雲もゆふつけ鳥やさそふらん ひきわかれ行山のはの空
承堆
- 789 ひゝくめり雲井にたかく有明の 月の宮この鐘の声かも
重阿
- 790 よこ雲は嶺にかかるゝ跡よりも 影すみのほるあり明の月」22才
宗清
- 791 くるもわか夢路ならずや朝鏡 むかふ翁のしらす影なる
朝 素純
- 792 移るまもいとゝほとなき秋の日の けふにあげては権の花
実望
- 793 朝つくひさすや岡部の里人よ これもしるしか秋の一もと
-
- 794 明わたるうちの川つらほのめきて まつかけたかき朝日山哉」22ウ
氏兼 氏秀
- 795 露霜の跡ならなくにあらうねの 土うちしめる庭の朝あけ
氏親
- 796 遠くへむ六十のなかは身にすぎは 空のひつしのあゆみまためや
宗清
- 797 聞きあへす心のにるやむまの貝 ふくもまなひの道のいさめと
夕 愛菊丸
- 798 なくさみもあはれもおなし夕にて 月はさやかに虫の鳴こゑ」23才
実望
- 799 暮ふかみとふしら鳥のさき守の 堀江に波の色そあらそふ
宗清
- 800 夕なきや松の葉こしのなみ遠み 入日をのせて帰るうら舟
素純
- 801 吹くらす風も見えけり嶺の雲 埋みもらせる松の梢に
嵩親
- 802 さひしざはいつも夕の物なれと わきて思ふはしくれふるころ」23ウ
南狂
- 803 なすわさのなき身なからもとにかくに 又けふの日もいりあひのこゑ
円照
- 804 あしたには思ひ夕はなけゝとも たゞけふことのいりあひのかね
安元
- 805 みるかうちもかすかになりぬ嶺の松 夕や山を遠くなすらん

- 806 秋ふかきおのへの里にすむ人の 心しらるゝいりあひの鐘」24才 孝成
- 807 春秋をおしみくゝて年もはや 夕暮になり身はふりにけり 時茂
夜 氏親
- 808 むすほるゝ心のいともおきなれば 思ひとくへき長き夜とこに 貞基
- 809 うは玉のよるの寝覚につくくゝと それとしもなく物思ふかな 氏広
- 810 とふ人の昔を語る山窓に くもるかいるか木かくれの月」24ウ 氏満
- 811 ふけて猶あらしはけしき床のうへに 夢も結はぬ夜半そかなしき 重阿
- 812 何事の夢を待ともあらぬ身の いたつらふしにあかす夜はおし 実山
山 実山
- 813 いくへさて雲をふかめて不盡のねや そらおほれる雲のおも影 氏親
- 814 ありなからなきにやならん深山木に 立ならふへきつみの心は」25才 素純
- 815 のかれすむ山てふおくのなかりせば なにかやるかた世をかこつ人 氏端
- 816 薄くこくかさなる山をふもとにて 雲井にたかくみゆるふしのね 承俊
- 817 かさなれるよはひもおなしちりひちの つもらは千世の山と成なむ

- 818 山水のすめる心にはらずは 岩木やわれをいは木ともみむ」25ウ 宗清
- 819 神代より恵みありとを木綿山の かけたかゝれや今もあふかん 政興
宗禪
- 820 世を捨て思ひいらんはさはらしを ありふる身とては山しけ山 亮範
- 821 春は花秋は紅葉の錦をも をりこそかくれしつはたの山 宗長
- 822 つもりある心のちりの行すゑに いつれの山かたちもよはむ」26才 盛清
- 823 つれくゝに打なかむれば行かへる 雲もいこまの山の下のいほ 兼阿
- 824 人ことに思ひこそすれ世中の うきには山を頼むはかりと 兼能
- 825 山ふかみとふ人もなき夕暮に なれぬる物はさをしかの声 範為
- 826 山くゝのかさなる嶺の木すゑをも ふしのす野に移してそみる」26ウ 承堆
- 827 とふ人に山もこたへようこきなき 神代の塵の積る昔を 氏兼
- 828 陰たかき伊豆のを山にかけて思ふ しら玉椿八千とせもへむ 南狂
- 829 たてぬぎに雲のいとすちかゝりある しつはた山も積るちりかは

- 830 花紅葉^かふりせぬかけや四方の山 時にかはらぬ色をこめつゝ」 27才 寛阿
- 831 いかはかり山はふしのねたかけれや 空なる雲を替成らん 道芬
- 832 半天のふしのねおろしさそひきて 雪に明たつ浮島か原 素純
- 833 春の日のさすかにたにのおくまでも 水打いつる花の川なみ 実望
- 834 見渡せは夕波たかし興津河 おきつしほ風今や立らん」 27ウ 泰宗
- 835 常ならぬ世をしれとてやあすか川 ふかきもかはるせとは成覧 孝成
- 836 山ふかみいはのはさまのこゝかしこ おつるしつやす急の川波 宗清
- 837 つかへこし名は流ても代々の跡に しつむやなにの関のふち川 重阿
- 838 時しらぬ山のしつくやつもるらん このみな月もおなし富士川」 28才 盛助
- 839 かりすてしよとのわかこもたえくゝに みるる斗に川波そたつ 珠易
- 840 暮かゝるひのくま川は打わたす をちかた人かこまはやめ行 為興
- 841 世の人の心とやみむうつり行 けふあすか川かはるふち瀬は 為興
-
- 842 山風に袖ふりはへてすゝか川 わたるいく瀬かきむき夕なみ」 28ウ 孝汝
- 843 分ゆけは袖も色にやうつの山 うつろふころの鳶^下の細道 実望
- 844 はなれその松かねあらふしほみては みちあらためて通ふをとめこ 氏親
- 845 行まよふはまのまさこちふみ分て 問はゝおしへよ和歌のうら波 宗長
- 846 やすからんかたやいつこそ世中の 八十のちまたに迷ふ諸人」 29才 宗禪
- 847 よしの山あたら爪木そしをりせは たれおひそめん花のふる道 南狂
- 848 ししまの道のしるへにめぐりあひて たれことのはにふみまよはまし 光陽
- 849 玉ほこのみちの行てにはるくゝと 分てはるのゝ草そはてなき 承俊
- 850 ふはの関月や時雨のまゝながら いたまを秋にまかせてそもる」 29ウ 氏親
- 851 行水にかきなかすとやあとゝめて ことへはすくる文字のせきやは 実望
- 852 岩こゆる清見か磯のいかてなみも よるの関とやさすかいさよふ 氏広
- 853 よしやさはしはしやすらへ下ひもの 関のせきもり心とけすは

- 854 戸さしせむ心ともかなうつり行 世はうやむやの関の下道」30才
宗清
良寿
- 855 しくれつゝ猶すきかてのすゝか山 紅葉や関の戸さしなるらん
円照
- 856 恨つる身もいまおりにあふさかの 関をしこえて後いかゝせん
氏兼
- 857 けふも又くるゝ程とか関もりに よし草枕結ひてもねむ
孝成
- 858 戸さしせぬ世は関守もいとまあれや 花にくらせるあふ坂の関」30ウ
時茂
- 859 清見かたえならぬ月にをのつから 心ある人のとまる関の戸
橋
宗清
- 860 身の高くのほりうつるや雲井にも かけし心のはしと成けん
氏親
- 861 うらみしなかけとけぬねかひ世中は 神たにわふるくめのいはゝし
実望
- 862 こゝにきていまそみか野ゝはしら名のみくちせぬ渡り成らん」31才
本マ、
宗長
- 863 こほれ行板田の橋のあやうくも けたより人のつたふ朝夕
素純
- 864 人の世の夢のわたりにわたさはや うきはうつゝのまゝのつき橋
故郷
覚阿
- 865 すむ人も猶くれ竹の代々をへて 年におひそふかけのふる里

- 866 いくかへりいく春秋をふる里の さほの川水たへすゝむらん」31ウ
宗長
南狂
- 867 世中は難波のことかかゝらざる 宮この跡もあしのむらくゝ
承堆
- 868 立帰りくやくしくすむや故郷の 人はかすにも思ひ出ぬに
重阿
- 869 すめはたゝふち瀬のみかはふる里の あすかの川のかはる世中
宗清
- 870 里はあれて花も紅葉もいたつらに ひとり声するあすか風哉」32才
山家
泰貴
- 871 ひとりこちわふる詞も山彦の こたふる声や□のかり庵
宗清
- 872 山深み嵐の扣く松の戸に こたふやあるし谷水のこゑ
氏親
- 873 住馴て春は花守紅葉をも をのつからわか秋の山里
実望
- 874 世をいとふ人とやよそにみねの雲 かさなる山のおくの家居は」32ウ
素純
- 875 たへねたゝ千ゝにうき世はいかにせし 山のさひしきことのひとつは
承俊
- 876 故郷にたえず心のかへるかな み山のみちのまつの下庵
覚阿
- 877 柴の戸のしはしとてこそすむ山を 心の友に年へぬる哉

- 878 軒近く語らひきつゝ、鳴猿よ なれもさひしな松の夕風」33オ 南狂
- 879 いかばかりふかきおくには住とても 心は跡もたえぬみ山路 孝長
- 880 住人をうらやみなから柴の戸を かへる心やところせきなる 宗清
- 881 小山田や黄泥の垣ほこもすたれ かゝる住居もあれば有世そ 氏親
- 882 いくかへりもりてわさ田のかりほさず のをれも霜のふりはとはなる」33ウ 実望
- 883 雨もよふ雲とみてより小田守や いねほしわひてまつはこふらん 宗禅
- 884 帰るさの門田のみちの程なきを はるかに見する秋の夕霧 重阿
- 885 さしすて、秋よりほかはすむ人も あらしはけしき小田のかり庵 宗清
- 886 立よるも心しつけし家の風 姿うこかぬ軒の松かへ」34オ 実望
- 887 陰たかくなくひく千本の松原は そのいくとせの子日成らん 素純
- 888 これぞ友軒はの松のつれくゝと 住世中の色もかはらて 氏兼
- 889 ときはなる松の陰にや百年を とをく馴来てすめる仙人

- 890 たちならふ松のためしにひかれてや 住かけ迄もときは成らん」34ウ 承推
- 891 世を重ねよむともつきぬやまと哥に ならふは竹の葉の林哉 氏親
- 892 一とをり風はすきてもくれ竹の 林にそよ音そこもれる 泰貴
- 893 おひそめし心しらはや木か草か なに、もよらぬ園の呉竹 宗長
- 894 君か代を松にたくへし外に又 千尋の竹や園つゝくらん」35オ 円照
- 895 竹しける霞のをちの浅みとり 空もひとつになひく色哉 安元
- 896 あはれしらは我にかしてよ昔衣 木の根岩ねも陰と頼ん 宗清
- 897 秋ふかみ谷の岩橋むす昔の 一すちあをき露の染色 実望
- 898 見るからに心のうへのちりもみぬ 昔の緑に水はしる山」35ウ 素純
- 899 さゝれ石のなりし岩ほをたてならへ 苔むす緑深き庭哉 南狂
- 900 君か代のふるきためしにさゝれ石の いはほの昔のいくへともなき 時茂
- 901 すゑの世は誰もうねのゝたつひとり 思ひ絶たる音やは鳴らん 氏親

- 902 万代をかさねきるとや松風の 里にむれみる鶴の毛衣」36才 氏広
- 903 とを干潟月の出しほのみちくれば 夜半にたつ鳴声そさやけき 氏秀
- 904 千へ波の立わかるとも忘れすは 其やかたみの浦の友舟 宗清
- 905 風をさへいとふ柳を行道の 手向の神もなひくとそおる 宗長
- 906 別なほこよひの月も思ひ出ぬ おなし空にてとりや帰らん」36ウ 実望
- 907 浪のうつてこのよひさか先こえて 待としらすらやをちの河おさ 氏親
- 908 草枕いく世の人かかて見し かたみくもらぬ月の露けさ 愛菊丸
- 909 旅はたゝしらぬ人にも行つれて 語る程こそ道もなくさめ 政興
- 910 山路わけこよひ折敷榎しほの もる涙とも夢やしらせん」37才 素純
- 911 しらすわれ都をゝきていつくあれば 野くれ山くれあまりきぬらん 盛綱
- 912 何くにもいかに心のとゝまらん うき世を旅と思ひしらすは 兼能
- 913 露わけてけふも朝たつ旅衣 しほるゝ袖に月を残れる 兼能

- 914 たひの世に猶行末はしら雲の 千里をしのかく道やまよはん」37ウ 重阿
- 915 ありふるも世は旅なるに野山わけ 心つからや身をつくすらん 孝成
- 916 むさし野ゝ草の枕の夜なくくに 夢路もならふ心みえけり 光陽
- 917 むへ心ありてを見はや波の花に けうをさかする松かうら島 宗清
- 918 みほか崎や夕塩むかふたか浪に 田子のうら舟こぎかへるみゆ」38才 実望
- 919 山とをき梢をみねの横雲に たれかなひかぬ春の明ほの 覚阿
- 920 つなて縄ちいろの浜にくり返し あまはいくたひ舟出しつらん 氏兼
- 921 秋の月いつくはあれとうなほらや おきつ舟路の浪のよるく 乗阿
- 922 いり日うけ八重の塩路の夕なきに 紅くゝる浪の釣舟」38ウ 承推
- 923 住江の松の木のまを見渡せば 波にそかへるあまの釣舟 貞基
- 924 明日たる横雲しらむ浦風に なひきをくるゝ淀のつきはし 宗禅
- 925 たれもしれおへる薪の翁さひ 往くもかへるもやすけなき世と 宗清

- 926 くれはてゝ帰る木こりも世中を 南狂 をもくやわたる峰のかけはし」 39才
狩獵 実望
- 927 朝たつやをしかの原のかり衣 昨日の跡をけふもつなきて
孝成
- 928 ともしせし友の山路に立帰り 妻とふ鹿を又やまつらん
亮範
- 929 あま人の朝な夕なにひくあみの つなてくるしく世を渡る哉
漁 盛助
- 930 あ引する入江の小舟こきすてゝ 月ひとりたゝ波に残れる」 39ウ
夢 実望
- 931 見るかうちは夢もうつゝよううつゝ又 うつゝにはつるうつゝのみかは
宗清
- 932 色深く筆に開しをみる夢や 詞の花と世に匂ひけん
承俊
- 933 うつゝにもまたおとろかてあかす哉 此世を蝶の草の枕に
素純
- 934 さらはなと夢とみる世の夢ならて よしやあしやの跡の残るらん」 40才
氏泰
- 935 はかなさのおなしうき世は見し夢も うつゝもわかぬ心とそなる
宗長
- 936 さめあへぬ夢てとふことのある世にそ うつゝのうきめみるもなくさむ
嵩親
- 937 ふかき夜の枕しつかにまどろみて 夢に都の空そしらるゝ
-
- 938 さ夜風もしつまりけりなむは玉の 夢のたゝちを身に頼めとや」 40ウ
重阿 範為
- 939 ふることをみし夜の夢の面影も 残りてかひのなき世成けり
孝汶
- 940 うしとみて思ひ捨つるいにしへを いかかわすれぬ夢路成覧
懐旧 宗清
- 941 代々の跡よ麓の塵を継身そと あふくも高しやまことのは
覚阿
- 942 思ふかひ河そはひとついにしへの 身にもかへらぬ老のなみ哉」 41才
泰貴
- 943 みし世たゝ昨日やけふやとはかりに かそふることの雨もふりぬる
氏広
- 944 残してや昔の人の袖のかを はな橘もおもひ出らん
素純
- 945 たち帰る身も今朝もかな思たつ 道ははるかに日はくれにけり
氏秀
- 946 みし人そ数く袖にうかひぬる 昔を思ふ露をなすかと」 41ウ
氏□
- 947 我むかし人のいにしへ思ふにも 涙の外のすさひもそなき
泰以
- 948 まどろめは夢も昔の夢ながら さめてはいとゝ忍ふ頃哉
円照
- 949 いにしへにことは草もかくはかり しけりゆく世や誰も嬉しき

- 950 ともにみし人はいつくに有明の 月そ面影昔恋しも」42才
光世
述懐 実望
- 951 てらせ猶身をしら露のおきもせず ねもせて祈る国のすへ神
承俊
- 952 かくて世をすつる身なから思ふ哉 南山にをかぬ心つよさを
南狂
- 953 和歌の浦の玉にしそへは人なみに かけるもくつも神やうけなん
承堆
- 954 うき心身にしそはすは分入て すみよかるへき山のおく哉」42ウ
孝成
- 955 すみなからかこちうらむる朝夕を うしろめたくや世はおもふらん
安元
- 956 老にけりよしやいつくも身ひとつと たのめし頃^{虫食}
時茂
- 957 ことはりの心としらすとにかくに ふる世中せいふかひもなき
光陽
- 958 万世も君かかけにと祈こそ 身をおく山の庵もやすけれ」43才
氏親
- 959 しもなからきこえあけむも和歌の浦の この道いかに人なみにたに
此すへ散失す」43ウ

あとがき

筆者は、二〇二一年から、立正大学大崎図書館の業務として、貞松文庫の調査を行っているが、その成果をどのように形にするかは未定であった。それが、二〇二二年に本シリーズ刊行の計画が急ぎよ浮上し、報告書代わりにその第一冊目を書かせていただく運びとなった。

ただし、内容に関しては、学生にも興味を持ってもらえるように、という図書館側の意向もあって、貞松文庫を全面に押し出すような構成にはしていない。しかし、すでに本書をお読みいただいた方はお分かりだと思うが、必ずしも万人受けする内容にはできなかつた。ひとえに、筆者の力量不足のためである。

それはさておき、貞松文庫については、大崎図書館でも以前からその存在が知られていた。図書館は、嘗て『立正大学図書館年報』という冊子を作成していたが、その四号（一九八一年）と六号（一九八三年）の中に、「立正

大学図書館蔵貴重書解題」が掲載されている。この中には、わずかに貞松文庫についてふれた部分がある。これは、当時大崎図書館副館長で教養部の教授であった故市川任三先生の指導を仰いで書かれており、宮内庁書陵部や国会図書館などで照合調査を行った旨が明記されているかなり本格的なものである。

結局この解題は続くことなく、図書館が年報自体を作成することもなくなつた。自館の蔵書を研究する取組みが継続されていれば、貞松文庫の全貌についても早くに明らかにされていたかもしれない。

大崎図書館が典籍の調査・収集に力を入れ始めたのは、ここ最近のことである。今後は、貞松文庫以外の文庫の調査や目録作成などの取組みにも期待したい。

最後に、本書を執筆するにあたっては、大崎図書館の岩場静子課長と水上裕子氏にご協力いただいた。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

増補改訂版あとがき

シリーズ・アタラクシアは、立正大学の学生に向け、同大学の図書館が所蔵する和漢古書をアピールするという目的のもとに作成された。そのため、図書館内の各所に置かれ、無料で持ち帰ることができるようになっていく。また、オープンキャンパスやインターシップなどの際には、希望者に対して配布も行っている。そんなわけで、アタラクシアの在庫は定期的に消費されることになる。

アタラクシアの中で特に人気なのは、野沢佳美先生の担当した巻で、学外からの問い合わせも多く、刊行から三年あまりで在庫が切れ、増刷となった。

アタラクシアの最初の巻として刊行された本書も、六年を経て、残部がほぼなくなつたとの連絡をいただいた。初版刊行当時に印刷部数を聞いたとき、そんなに刷つて大丈夫かと思つたが、在庫が切れたとのことではとまず

安心した。立正大学の和漢古書をアピールするという当初の目的に対して、一定の成果があつたと思いたい。

在庫切れに当たり、野沢先生の巻と同じく増刷するという話になつたが、いつぞ増補改訂版にしたいと申し出たところ、図書館より了承を得ることができた。増補の中心は、図書館（古書資料館）が所蔵する『今川家集』の翻刻である。内容については、六十三頁で述べたので割愛するが、翻刻する意義のある資料だと考えた。当初は、学内の雑誌に掲載するつもりだったが、分量の問題で実現しなかつたため、アタラクシアに載せることにした。学生向けという主旨からは外れるかもしれないが、何かしらのアピールになれば幸いである。

増補改訂版を出すに当たっては、立正大学図書館の田中麻巳氏にご協力いただいた。この場を借りて深く感謝を申し上げる。

【著者略歴】

おこのぎ としあき
小此木 敏明

昭和 52 年 群馬県に生まれる

平成 19 年 立正大学大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻単位取得満期退学
立正大学非常勤講師

平成 26 年 立正大学図書館古書資料館専門員

著書等 『『中山世鑑』の伝本について—内閣文庫本を中心に』、小峯和明監修・目黒将史編『資料学の現在（シリーズ日本文学の展望を拓く 5）』（笠間書院、平成 29 年）。庄司史生・小此木敏明解説『立正大学品川図書館所蔵 河口慧海旧蔵資料解題目録』（立正大学図書館、平成 30 年）など。

シリーズ・アタラクシア vol.1

立正大学蔵書の歴史 寄贈本のルーツをたどる

—近世駿河から図書館へ— （増補改訂版）

平成 25 年 3 月 28 日 初版発行

平成 31 年 3 月 29 日 増補改訂版発行

著者	小此木 敏明
編集	立正大学品川図書館
発行	立正大学図書館
	〒141-8601 東京都品川区大崎 4-2-16
	電話 03-3492-6615
	http://www.ris.ac.jp/library/

印刷・製本	株式会社イーフォー
	〒141-0031 東京都品川区西五反田 8-4-15
	電話 03-3779-1140

立正大學圖書館

